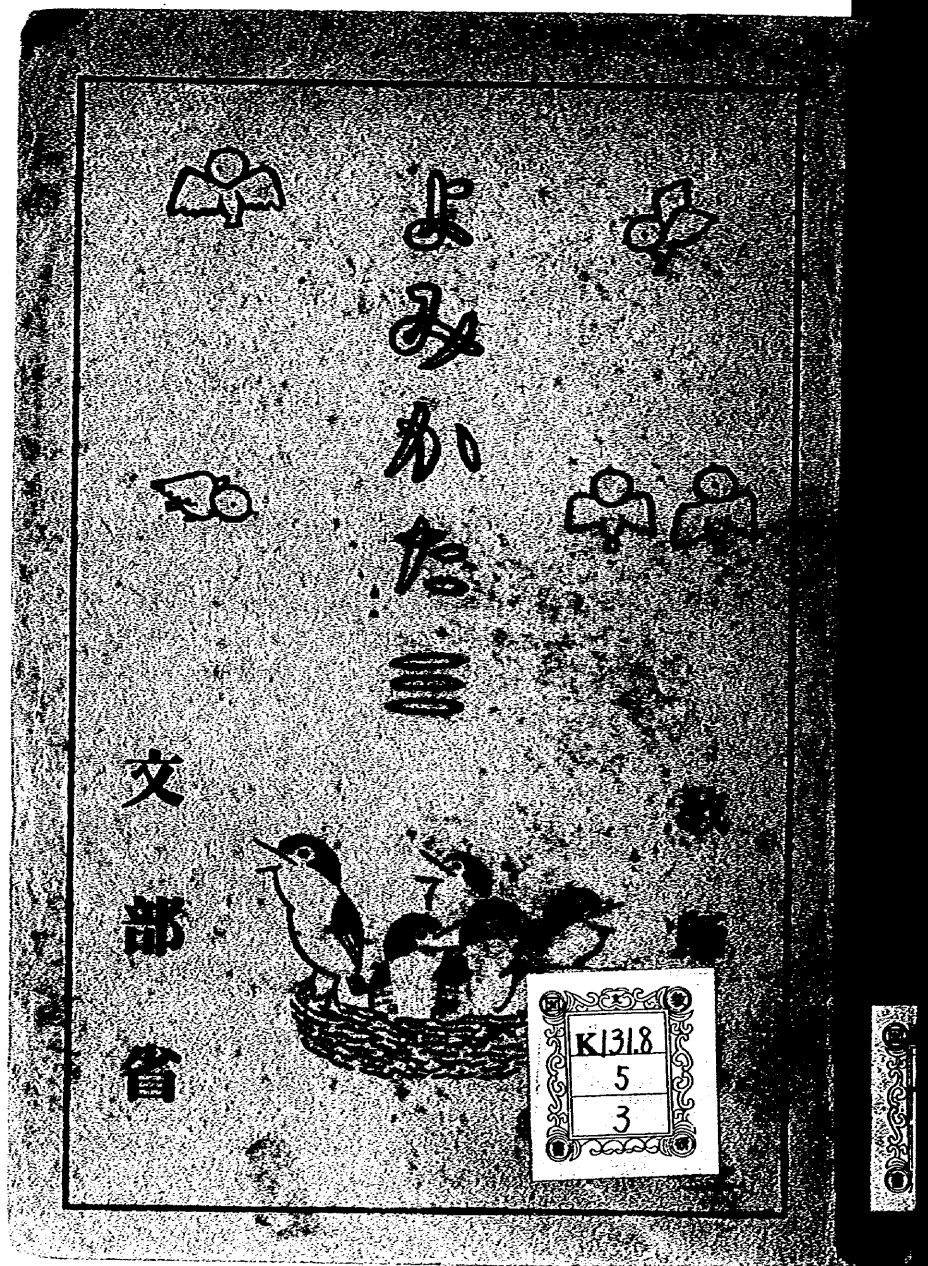




K131.8

5

3



よ

み

か

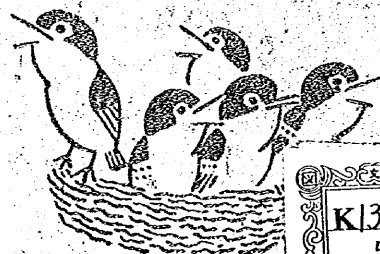
た

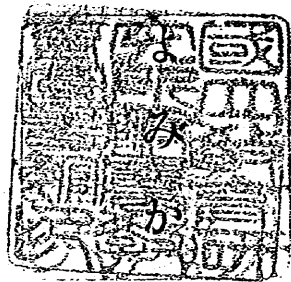
三



文
部
省

教
師





た
三

文
部
省

教
師
用

「よみかた三」教師用目録

總 説

一 國民科指導の精神	七
(1) 國民科の意義	七
(2) 國民科に於ける教科と科目との關係	九
(3) 國民科の教科書とその指導方針	一一
(4) 國民科と他教科及び儀式學校行事との關係	一六
二 國民科國語指導の精神	一九
(1) 國民科國語の意義	一九
(2) 國語指導の四分節	二二
分節の基礎	二二
音聲言語指導と文字言語指導	二五
読み方	二五

各 説

綴り方	二八
書き方	三〇
話し方	三一
(3) 國語愛護と國語の醇化	三三
三 國民科國語教科書	三九
(1) 編纂方針	三九
(2) 第一期の國語教科書	四一
ヨミカタ	四二
コトバノオケイコ	五一
教師用書	五三
掛圖	六四
一 春	六七

附 録

二 らくかさん	七五
三 國引き	七九
四 二重橋	八六
五 鯉のぼり	九一
六 牛わか丸	九六
七 ささ舟	一〇〇
八 蛙	一〇六
九 軍かん	一一一
十 お話	一一七
十一 むしば	一二五
十二 ねずみのちる	一三〇
十三 川	一三五
十四 一寸ぼし	一四一
十五 つり	一四四
十六 金魚	一四九
十七 花火	一五五
十八 お祭	一五八
十九 きりぎりす	一六三
二十 海	一六九
二十一 子馬	一七五
二十二 うさぎとたぬき	一七九
二十三 自動車	一八六
二十四 長い道	一九一
二十五 日曜日の朝	一九五
二十六 うらしま太郎	二〇〇
新出讀替文字一覧	二〇六
運筆順序	二二五
鉛筆による書き方指導上の注意	二二七
よみかた三の發音	二二八

綴り方指導要項……………二七六

指導の發展段階……………二七六

初等科第二學年……………二七七

一 指導要項……………二七七

二 指導要項例……………二八〇

三 參考文題……………二八八

話し方指導要項……………二九五

指導の發展段階……………二九五

初等科第一・二學年……………二九六

總 說

一 國民科指導の精神

(1) 國民科の意義

國民科の目的

國民學校は、皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲ爲スヲ以テその目的とする。國民科はこの目的を全うするため設けられた教科の一つであつて、特に國體の精華を明らかにし、國民精神を涵養し、皇國の使命を自覺せしめる點に於いて重要な任務を有する。

國體の精華

教育に關する勅語には

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深

厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

と仰せられてある。國體の精華を明らかにすることは、とりもなほさず皇國の道を明らかにすることであり、道を體得實踐して億兆一心の實を擧げることである。

國民精神

國民精神は皇國の道に基づいて發揮せられる。しかもそれは無窮に生々發展する皇國の相を體現してあらゆるものを包攝する博大な精神である。義勇奉公を中核として活動することは勿論であるが、また優にやさしいもののあはれを知る心もそれであり、外來文化を攝取してこれを自家藥籠中のものとなし、獨自の文化を創造展開して行く精神もそれである。

皇國の使命

皇國の使命は肇國の大精神に發源する使命であり、皇國の道を體とし、國民精神の發揮によつて遂行せらるべき使命である。隨つてこの使命は肇國の事實に基づいて本來道義的であり、皇國の生々發展に即して歴史的であり、また世界的であるといふことができる。さうした皇國の使命に就いての自覺を促し、將來の活動に資せしめんとするところに、國民科指導の窮極の目的はある。

(2) 國民科に於ける教科と科目との關係

皇國の道と國民科

皇國の道とは、教育に關する勅語に示し給へる「斯ノ道」に外ならないのであるが、「斯ノ道」を學ぶとすれば、先づ道の教に即して國民道德を體得し實踐することが、國民科の任務の一重點となる。しかも「斯ノ道」は皇祖皇宗の御遺訓であり、皇祖皇宗の宏遠なる肇國深厚なる樹德をはじめ奉り國史的事實に基づいての道であるから、かうした歴史的事實

に即して皇國發展の相を明らかにし、皇國の大生命を感得せしめることによつて、皇國の道を學ばしめることが大切であり、ここに國民科教科内容の第二の重點がある。しかも歴史と分つべからざるものは我が國土であり、我が國土國勢を明らかにすることによつて皇國の道を學ぶことが大切である。ここに第三の重點がある。この三重點を通じて學ぶことによつて、始めて古今に通じて、謬らず中外に施して悖らざる「斯ノ道」が體得されるわけであるが、更になほ「斯ノ道」及び「斯ノ道」に基づいて發現する國民性、國民精神、國民文化等は、我が國の言語によつて表現され、理解される場合が極めて多いのであるから、國語の習得も亦國民科の重點となる。

國民科の四科目

即ち國民科といふ教科は、皇國の道を明らかにし、これを體得實踐する立場から自ら右四つの重點を含むのであつて、これがとりもなほさず國民科が修身、國語、國史、地理といふ科目に分化する所以となるのである。

ある。随つて國民科が四科目に分れることは、在來の小學校に於ける修身、國語、國史、地理が、簡單に國民科の中に束ねられたことを意味するものではなく、寧ろ逆に國民科の目的を、遂行するための重點として四科目が分化するのであり、あくまでも原理的に一貫して國民的自覺を喚起し、信念に培ふ教科である。

(3) 國民科の教科書とその指導方針

教科書の分化と指導方針

國民科に屬する教科書は、その科目に應じてそれぞれ分身するものであるが、その目的に於いて精神に於いて一致するのは當然であつて、指導に際しては、先づこの點に對する十分な考慮が肝要である。

しかも教科書にはそれぞれの特色があり、教材は多種多様であるが、しかしどの教科書どの教材を取扱ふにしても、常に大局から見て次の如き指導方針を見失ふことのないやうにしなければならない。

一、皇國に生まれたる喜びを感じしめ敬神奉公の眞義を體得せしむること。

一、我が國の歴史國土が優秀なる國民性を育成したる所以を知らしむるとともに、我が國文化の特質を明らかにしてその創造發展に力むるの精神を養ふこと。

一、他教科と相俟つて政治經濟國防海洋等に關する事項の教授に留意すること。

これらの條項はいづれも我が肇國の大精神を堅持し、皇國の使命を自覺せしめんとするところから生まれ來るものである。天壤無窮の皇位を中心とし奉り、一君萬民君民一體の國家活動に對する信念、正しく明かるい國民生活の展開に對する信念、無限の努力に基づく卓越した國民文化の創造に對する信念を周到なる注意のもとに獲得せしめなければならぬ。

教材の排列

但し、かくの如き指導目的は一足跳びに達成されるものではない。随つて國民學校に於いては、教材を兒童心身の發達に即せしめ、その生活の實際並びに生活環境と照應せしめながら、段階を追うて進むものである。即ち教科書は教材を精選しつつ、左の四期に亘つて發生的に組織する。

第一期 初等科第一、二學年

第二期 初等科第三學年

第三期 初等科第四、五、六學年

第四期 高等科第一、二學年

右は國民學校の教科書全般に亘る編纂方針であるが、國民科に就いていへば、

第一期に於いては、特に兒童生活に於ける躰と國語の初步的練習とを主とし、日常行爲にあらはれて來る事象に就いて見方考へ方並びに實踐を指導し、且想像力を豊かならしめるやうにつとめる。「ヨイコード

「ヨミカタ」はこの目的を達成するために編纂された教科書であつて、それらは修身國語の教科書であるとともに、國史地理の萌芽を含むものである。しかもこの期の兒童の心情と理解とに即し、全國共通の兒童生活に取材するとともに、生活暦によつて排列されてゐることも見落すべきではない。

第二期に於いては、生活體驗に對する正しい理解力と發表力とを伸張せしめ、次第に道徳的理想構成の方向に向かはしめようとするものである。この時期は兒童前期から兒童後期に移る過渡期として、特に考慮した教科書が編纂され、隨つてそれに應じた取扱が考慮さるべきである。

第三期に於いては、兒童を自覺的ならしめることに重點を置いてゐる。隨つて實踐の能力を助長するとともに、道徳的判斷が十分に行はれるやうに輔導しなければならぬ。この時期に至つて、國民科は修身國語のほか、郷土愛の念を涵養し、郷土の觀察をなさしめるのであ

るが、同時にまた國史地理の二科目を分化せしめ、それに應じた教科書を提出する。

第四期に於いては、第三期に至るまでの基礎的な鍊成の上に、東亞の情勢並びに世界の動向を知らしめて、益々國體の精華を明らかにし、大國民たるの資質に培ふものである。

第一期の教科書

「ヨイコドモ」と「ヨミカタ」は第一期の兒童に對する國民科の教科書として作られたものであつて、國民的自覺信念に培ふといふ點では一體であり、教材内容は相互に連絡し、補足し合つてゐる。いはば「ヨイコドモ」は國民生活の正しい筋道を明らかにしめる表側となり、「ヨミカタ」は國民的な感情情緒を豊かにして心の興行を作る裏側になつてゐる。しかも「ヨイコドモ」は國民的自覺を喚起しながら、實踐行爲に駛けることを求めるものであり、「ヨミカタ」は、言語文章を訓練してことばの實踐に導き、ことばの國民的思考感動を通じて、國民精神を養ふものであつ

て、そこに自ら取扱の相違があるのである。

(4) 國民科と他教科及び儀式學校行事との 關聯

理數科との關聯

國民科は皇國の道を明らかにし、國民的自覺信念に培ひ、實踐せしめることを目的とする。随つて皇國の新たな伸長を意圖する限り、國民科は同時に科學の重要性の理解と文化創造の任務を自覺せしめるものでなければならぬ。その點全く理數科に於ける合理創造の精神の涵養と軌を一にする。また理數科的な考察處理を重んずる生活態度の養成と、自然の觀察への契機を與へる點で、極めて密接な關聯を有するものである。

體鍊科との關聯

體鍊科とは保健衛生に關する指導によつて、かたく結びついてゐる

が、心身一體の境地をめざす國民學校教育としては同時に、獻身奉公規律協同服従公明正大の精神を涵養するとか、體鍊に關する禮法の修練を基礎づけるとか、武道精神を鼓吹するとか、體鍊科に於ける修練と不可分の關聯にある。

藝能科との關聯

國民科は國民精神の涵養を意圖するものであるが、そのなかには當然國民的情操を醇化し、高雅な趣味を涵養することを含んでゐる。随つて藝能科ともまた不可分である。特に表現鑑賞の能力に培ひ、家庭生活の理會、婦徳の涵養を期すること等、藝能科教育のめざすところと離るべからざるものがある。

實業科との關聯

實業科は一面に於いて、國民科の精神を實生活に具現することを意圖する教科である。特に職分を通じて公に奉ずるの精神を養ひ、産業の國家的使命を自覺せしめ、海外發展の素地に培ふ等、國民科に於ける

指導はそのまま實業科に於いて擴充せられるわけである。

儀式學校行事との關聯

儀式行事等に對してその本義並びに由來を明らかにし、禮法を修練し、生活體驗を發表し整理する等、國民科の分擔するところは極めて重大である。

二 國民科國語指導の精神

(1) 國民科國語の意義

國民學校令施行規則第四條に

國民科國語ハ日常ノ國語ヲ習得セシメ其ノ理會力ト發表力トヲ養

ヒ國民的思考感動ヲ通ジテ國民精神ヲ涵養スルモノトス

とある。國民學校に於ける國語指導の範圍方法目的の三者がこの中に要約されてある。

「日常ノ國語」とは、日常生活に使用する國語の意義で、特殊専門乃至高尚な國語に對し、ここに國民學校教育としての限度が示してある。「日常ノ國語」は換言すれば普通の國語である。もちろん生活言語としての生きた國語を基礎とするが、といつて方言訛語や蕪雜野卑な言語を含むもの

ではない。それらは教育的立場から當然矯正醇化さるべきものであり、どこまでも醇正な國語を對象とすべきものである。更に「日常ノ」といつたからとて、單に我々の日常の話しことば及びそれを基礎とする口語文に限るわけではなく、普通の文語や或程度の古典語をさへ含んでゐる。これを要するに「日常ノ國語」とは普通の國民生活に必須であり、基本的規準的な國語を意味するものである。

日常生活に使用する國語には、いはゆる話しことばとしての音聲言語と文字に書きあらはす文字言語とがあり、國民學校に於ける國語指導はこの兩者に亘つての理會力發表力を養はなければならない。即ちその理會力は讀むこと、聽くことによる理會力であり、その發表力は、話すこと、書くこと、綴ることによる發表力であつて、ここに國語指導が「讀み方」「綴り方」「書き方」「話し方」等に分節する基礎がある。

國語を指導する者は、豫め國語の本質を見定めておくことが大切である。

言語を單に思想傳達の道具とする考へ方は、極めて通俗的な言語観であるが、これがためにしばしば教育上の過誤を來たすことがある。なるほど言語を結果からのみ見れば一種の符徴であり、道具である。しかし言語によつて發表される思想は、元來言語を通して考へられ、感じられた所産である。換言すれば、我々は言語を通して思考し、感動して思想を構成するのである。思想と言語とが紙の表裏の如く一體不可分であるといふ理由はここに存する。これを國語に就いていへば、我々日本人は國語を通して考へ、感じ、思想を構成する。我々の思考なり、感動なり、思想なりは、どこまでも國民共有——祖先傳來の國語と離るべからざるものである。さうしてここに國語指導の大切な鍵が秘められてゐるのである。即ち國語指導の第一義諦は、國語そのものと分つべからざる國民的思考感動を通じて國民精神を涵養することにある。換言すれば、國語は國初以來國民がなし來つた思考感動の結晶體であり、國語指導はこの思考感動と一體たらしめることによつて、國民精神を啓培することにあるの

である。

言語を思想交換の具とのみ見る者は、ややもすれば言語そのものを形式としてこれを輕視し、言語發表の題目たる材料を内容と考へてこれを尊重する結果、言語指導をして恰も實物そのものの指導の如き觀を呈せしめる。もとより實物そのものの指導は教育上大切なことではあるが、少くとも國語指導に於いては、言語が主であり、實物は客であつて、この主客を顛倒するに至つては、既に國語指導は存在しないといはなければならない。

(2) 國語指導の四分節

分節の基礎

國語に音聲言語と文字言語の兩面がある以上、國語指導はこの兩者にかけての理會力發表力を養はなければならない。即ち音聲言語の指導

には「話し方」「聽き方」が文字言語の指導には「讀み方」「書き方」「綴り方」が分節し得るゆゑである。但し實際問題として考へれば、「聽き方」は「話し方」の一面として相即するのであるから、「聽き方」は「話し方」に包含するものとして、「讀み方」「綴り方」「書き方」「話し方」の四つが國民科國語に於いて取立てられたのである。

音聲言語指導と文字言語指導

在來「話し方」は國語指導の一分節として明らかに認識されてゐなかつた。ために我が國語指導は、ややもすると文字言語に限られがちであり、ここに國語指導の弱點があつたと考へられる。國民科國語に於いて新たに「話し方」が拾ひ上げられ表面におし出されたのは、大に注意すべきことである。言語の發生的見地からすれば、いふまでもなく音聲言語が文字言語に先んじて出現し、音聲言語の地盤の上に文字言語が發達したのである。随つて文字言語としての國語指導を徹底するためにも、その地

盤たる音聲言語としての國語が正しく豊かに培はれることが大切であつて、そこに「話し方」の重要性がある。

しかし、それかといつて、國語指導の窮極の目標が音聲言語にあるかの如く考へるのは早計であり誤りである。殊に國內の兒童を相手とする國語指導は、國語を外國語として教へる日本語教授と、その出發點に於いて趣を異にする。學齡兒童は既に家庭なり社會なりから音聲言語を學び、數千の語彙をもつてをり、彼等の生活に必要な程度に於いてそれを自在に驅使してゐる。國內に於ける音聲言語の指導は、兒童のかうした生活言語を基礎として次第にこれを醇化し、發音語法を適確ならしめ、進んでは音聲言語そのものを高めて行くことにある。さうして、かうした役目は、寧ろ文字言語の習得によつて果たされることが決して少くないのである。今日國內に於いて用ひられる話しことばが文字言語によつて統一され、醇化され、高度化されて行くのと同じやうに、兒童の言語もまた文字言語の習得によつて統一、醇化され、高度化されて行くのである。た

だ文字言語のみによる教育はややもすれば音聲言語の重要性を閑却し、その修練を等閑に附する結果、文字言語と音聲言語との分裂を來たし、文字言語は陶冶されながら、音聲言語は野卑な方言訛語のままに放置される。その結果、一般社會の音聲言語をして健全な發達をなさしめないで終ることになる。故に國語指導に於ける音聲言語、文字言語の指導は、互に相倚り相俟つてその効果を全うすべきものであることを忘れてはならない。

讀み方

「讀み方」は在來國語指導の主體であつたが、今後といへどもその重要性は決して變らないはずである。いはば「讀み方」は國語指導の中核であり、その縮圖である。即ち「讀み方」は、單に讀むことばかりでなく、書くこと、話すことをそれ自體に包含してをり、隨つて「書き方」「話し方」及び「綴り方」と密接不可分の關係をもつからである。

言語文章は思考感動と不可分であり、それ自體生命的な存在である。正しく讀むことは結局文字を通じてこの思考感動と一體になることであるが、それが操作としては先づ正しい發音抑揚による音感から出發して、言語の意味・語感に没入しなくてはならない。なほ讀むといふことは、文字の正しい發聲を出發點としていふのであるが、進んだ階梯に於いては發聲階段を通過した默讀をも含むことはいふまでもない。

「讀み方」は、要するに正しく讀む力を養ふことを目標とするものではないが、それがためには單に讀むことばかりでなく、種々の操作が必要である。殊に年少の兒童に對しては、教材に即して種々の言語活動をさせることが一面には意味感情に徹して讀みを深からしめるゆゑであるとともに、一面には音聲言語の基礎練習をなさしめることになるのであるから、或は挿畫掛圖や文章に就いて話合をさせるとか、或は文章を暗誦させ、又これを劇的に演出させるとかが、讀み方に於ける大切な操作となるわけである。かくの如くして「讀み方」と「話し方」とは指導の實際に於いて

相即一致することが考へられる。

更に書くこともまた讀み方の一操作であると考へられる。即ち文字の劃や筆順を正しく指導し正確に書寫せしめることに始まつて、文字の記憶を確實にし、進んで教材を適當に書取らしめることがそれであつて、ここに實際指導に於ける「讀み方」と「書き方」の相即がある。この場合注意すべきことは書くことを徒に器械的ならしめ、言語の取扱を形骸化せしめないことである。書くことは一面に讀む力を深めて行くための作業であり、言語文章の意義とか構造とかは、讀むこと以上に書くことによつて體得されることが多い。随つて書寫や書取は單なる文字練習として行ふべきでなく、適當な範圍内で教材の文章を書かせながら理會せしめることが大切である。特に韻文などは全文を書かせることによつて思考感動に徹せしめることが取扱として望ましいことである。

以上の如く、讀み方は、讀むこと、書くこと、話すことを包攝することによつて國語の正しい理會力を養成することを目標とするものであるが、こ

の理會力はやがて言語の發表力として、話し方、綴り方に發揮せしむべきものである。

綴り方

「綴り方指導は、読み方指導に於いて養はれた文字言語の理會力を基礎として、文字言語の發表力を鍊成する國語指導の一分節であつて、読み方と密接な關係をもつものであることはいふまでもないが、しかもまた綴り方は、話し方と分離すべからざる間柄にある。即ち綴り方は、話すことの文字言語化であり、随つて話し方の延長發展と見なすことができる。特に低學年に於ける綴り方は、話し方から出發することが大切であり、ここに指導の實際に於ける話し方、綴り方の相即があることを忘れてはならない。

「綴り方は、話すことの文字言語化であるが故に、兒童の生活言語は、綴り方を通して醇化せらるべきであつて、ここでもまた當然方言訛語を矯

正し、醇正な國語による平易明白な文章を作らしむべきである。

「読み方の指導は、もちろん兒童生活を出發點とはするが、年級の進むに随つて漸く高次の國民生活、國民文化を主體とする教材に移行する。これに比べると綴り方は大體に於いて兒童生活に終始する國語指導である。いはゆる國語に於ける生活指導は、読み方よりも寧ろ綴り方に於いていひ得ることである。そこで綴り方に於いては、兒童生活そのものを適正に指導することが大切になつて來る。換言すればその生活に即して物の見方考へ方を適正に指導することが大切なのである。この方面の指導が在來教育的に考慮されなかつたために綴り方指導は或程度の發達を遂げながらも不幸にして不健全な思想を醸成しないでもなかつた。殊に文學の自然主義的な傾向から物の眞を描かしめようとして道を逸脱し、生活の物的方面に捕はれて理想を失ひ、甚だしきは現實生活の缺陷にさへ兒童の眼を向けさせようとした。「眞を描く前に先づ如何なるものを書くべきかを指導する必要があり、道に照らして心にうつり行

く情意を表はさしめることが大切であらう。換言すれば教育の立場から要求される倫理性は、綴り方に於いても例外なく要求されるのである。しかも綴り方は國語による生活の表現であるが故に、そこには絶え間なき創造の営みがあることを忘れてはならない。國民學校の教育は兒童の創造力を育成することを念とするものであり、この觀點からすれば、國民科に於いてこれを擔當するものは國語を措いて外になく、しかもその最も積極的なものが綴り方である。即ち兒童の見方考へ方の指導は常に新しいものを創造して行くことに努力せしめ、創造力に培ふことが大切なのである。

書き方

「読み方」「綴り方」に於ける文字書寫の基礎として「書き方」がある。國民學校の制度では在來の「書き方」の一部が「習字」として藝能科におかれたのであるから、國語の「書き方」は殆ど「読み方」に包攝されることになる。即ち「書

き方」は初等科一二年に於ける文字練習の基礎をなすもので、「読み方」の書取と相俟つて明確端正に書くことを指導するものである。

話し方

音聲言語指導としての「話し方」の意義と、その重要性に就いては、既に述べたところであるが、しかも「話し方」指導の實際に就いては將來の攻究に俟つべきものが頗る多い。

音聲言語は、文字言語に先だつものであるから、「話し方」は文字言語から離れた自由な立場から指導すべきものとする考は一面の理であつて、實際的效果も甚だ疑問である。國民科國語に於いては、「話し方」の時間を特設しないのを建前とし、「読み方」「綴り方」等と密接に關聯してその基礎練習を行ひ、更に他科目他教科に於いて常に「話し方」指導の擴充を期することとしたのは、専ら音聲言語と文字言語との關係に鑑みて實際指導に意義あらしめ、實績を收めんがためである。

即ち先づ讀み方に即して兒童に自由簡明に發表させる機會を與へ話す心構を作らせることを手始として一面にはこれをことばの躰や讀み方の文章に即應しつつ次第に醇化し他面に綴り方に延長して文字言語化しつつ統制しその間絶えず兒童の音聲言語を指導して不完全より完全へ正確へ雅馴へと進展させることを心掛くべきである。在來話し方と稱して兒童にお伽話や體験を語らせそれが言語發表として不完全であつても何等指導に工夫しないやうなだらしない話し方でなく躰を中心とした齒ぎれのよい話し方に導くことが大切である。

もとより時宜に應じて時間の特設し感興深き兒童の共通話題を中心として談話させ進んでは多數の面前で演述させることも大切であるが、しかも絶えず醇正なる言語の指導をすることを忘れてはならない。

話し方の半面たる聴き方に至つては更に將來の研究を要するのであるが、先づ人のことばを落着いて聞く習慣を早くから養ひ進んでは聴いた話の要領を語らせ感想を述べさせる等發表の進展と相即してその實

際を工夫すべきである。

なほ話し方の指導は常に修身の禮法と結び禮の精神を言語の上に體現せしめる指導が大切である。他人の感情を害し他人の非を擧げて快しとするやうな言動を戒むべきはもちろん口先のみ巧みで然諾を重んじない氣風をなさしめるのは更に禁物である。如何なる場合に如何に言ひ如何に言ふべからざるかをわきまへしめ進んでは巧みに語る人に對してはよき聴き手となりことば少き人に對してはよき話し手となる等の社交上の心構をも一應は指導すべきである。

(3) 國語愛護と國語の醇化

國語が單なる思想發表の具でなく國民的思考感動の結晶體であり國民の思想精神と不可分のものであることを考へるとき我々は今更に國語の重大な意義を知るとともに如何にこれを尊重愛護しなければならぬかを痛感する。随つて國語指導は國民をして國語の重大性に目醒

めしめ、國語尊重愛護の念を啓培することに徹しなければならなくなつて来る。

國語の尊重愛護は、國語に對する道を闡明し、これを實踐することである。さうして國民學校に於ける國語指導は、先づその實踐によつて國語の規準法則を體得させ、進んで國語の特質を知らしめ、國語を醇化愛護するの念に培ふことを任とすべきである。

即ち國民學校に於いては、先づ發音を正し、抑揚に注意することによつて國語の道の實踐に入らしめる。發音を正しくすることは、在來既に久しく唱道せられ、一部教育の實績に見るべきものがないではないが、國內全般としては前途なほ甚だ遼遠の感がある。抑揚には、いはゆるアクセントをも含めていふのであるが、これが實際指導は更に多難であることを思はせる。しかし今日、國語が東亞共通語として重大な役割をなさんとしつつあるを見れば、その發音なりアクセントなりは、在來の如く方言的に放置せらるべきでなく、話しことばとしての標準語の指導とともに、

發音アクセントの醇化統一を徹底し、以て東亞共通語として更に進んでは世界語としての文化的資質を備へしめることが今日の急務であり、しかもそれが専ら教育によつて果されることを考へなければならぬ。

發音アクセントばかりでなく、國語はなほそれ自體の法則を有する。我々が日常使用する國語が、この法則に支配されてゐればこそ、我々はその意義を解し、又誤なく傳へることができるのである。國語の法則は即ち語法であるが、我が國語の語法は、所謂文法として一見簡單であるやうであつて、その實運用の上に甚だ微妙性があり、それがことばの選びや、言ひまはしにまで延長して修辭法に密接なつながりを持つてゐる。國語指導はこの點に鑑み、適宜語法修辭に注意し、無意識的な使用を意識化し、法則の體得實踐に導くことが大切である。國民學校に於いては、敢へてそれを系統的知的に授けることを期するものでなく、重點的に指導し、しかも常に實踐的に導くことをなさなければならぬ。

かくの如くして國語指導は、音聲言語に於ける標準語の使用のみなら

ず、文字言語に於いても常に醇正なる國語の使用に留意し、これを他科目他教科の指導に擴充するはもちろん、兒童の生活の上にまで體現させることを目指さなければならぬ。そこには非常の困難があり、在來の國語指導はこの困難を克服することに於いて甚だ不徹底であつた。しかし試みに臺灣朝鮮南洋に於いて正しい國語の普及徹底を期し、その他外地に於いても、この理想の實現に努力しつつある今日であることを思へば、國語指導は正に在來の墮眠から目醒めなければならぬ時である。

國語愛護の精神に培ふためには、以上の如き實踐的指導と共に、なほ理念として國語の特質をも或程度認識させることが大切である。

例へば我が國語はこれを歴史的に見るとき、未だかつて外國語に征服されたことのない國語であり、肇國以來連綿として傳統し、發展し來つた國語である。よし多數の漢語及び漢語法を取入れ、又近世歐米語に若干の影響を受けたとはいへ、國語の生命は脉々として連なり、生々發展し來つたのである。この歴史面から見て我が國語は、一面に包容性に富むと

ともに他面に儼として純粹性を保つてゐる。あはれ、うれし、かなし、等多數のやまとことばが、殆ど上代そのまゝの姿で、今日の生活語に用ゐられてゐることや、純粹なやまとことばによつて表現される和歌の如き文學が、國初以來傳統し來り、しかも現代に於いていよいよ盛に行はれてゐることなどにそれを見ることが出来る。しかも我が國語は前述の如く歴史的に外國語の影響を受けたことも多大であつて、そこに包容性のあることは見通し得ないところである。この點から往々國語の混亂を來たすのであるが、そこに又我が國語が世界語として發展すべき素質を藏してゐることも見ることが出来るのである。

又我が國語をその表現に即して特質を考へるとき、和歌俳句の如き短い文の中に豊富な意味感情を盛り得る含蓄性があり、しかも又物語文學の發達に見る生活の精細な描寫をなし得る描寫性を併せ具へてゐることが、何よりも著しい特徴として考へられる。

かくの如き國語の特質を知らしめることは、やがて國語愛護の念に培

ふゆゑんであり、更にその尊重愛護が一面の理に走つたり、末梢に流れたり乃至頑迷固陋に陥つたりせしめないゆゑんになるのである。

國語は生命體であり、常に生動し發展するものである。随つてこれを使用する國民の心掛如何によつて國語はよくもなればわるくもなるのである。我々が發音を正しくすれば、國語そのものの發音が醇化される。我々が醇正な國語を使用して話し、又文章を書けば、國語そのものが次第に醇化される。ここに國民として國語に對する實踐道があるのである。されば醇正な國語とは、決して固定した觀念のものでなく、將來の國語に對する理想をもつて考ふべきものである。即ち國語の醇化は、單なる外國語の排斥でもなく、翻譯語の忌避でもない。要は國語の法則に基づき、特質に鑑み、又その傳統と實際に照らしつつ、音聲言語に於いても文字言語に於いても、平明雅馴を保ち、文化性創造性を賦與することに努力することに外ならないのである。

三 國民科國語教科書

(1) 編纂方針

國民科國語教科書は、國民科の教科書であり、随つて國民科全般に通ずる教科書の編纂方針に基づき、これを國語の立場から具體化することによつて編纂される。

先づ國語教科書の教材は、醇正なる國語を通じて國民精神を涵養し、情操の醇化創造力の啓發に資し、併せて國語愛護の念に培ふものであることを期する。

さうして、これらの教材は第一期乃至第四期の段階に即して排列されるのであるが、國語教材はその表現面たる文章と素材たる表現對象との二つの方面から排列を考慮し、系統を樹立しなければならない。

文章の系統 第一期は言語の發生系統を考慮して叫び聲獨言對話その他専ら主體的な敘述を按配し、第二期に入つて次第に客觀的な敘述に移り、第三期に至つて口語文、文語文に分化する。第四期には更に文語の書簡文や名家の作品をも採擇する。なほ韻文としては第一期の叫び聲から出發して、第一期第二期を通じて童謡童詩の類を排列し、第三期に入つて現代詩和歌俳句等に分化せしめる。

表現對象の系統 表現の對象は兒童の生活から出發して國民生活の諸相に分化展開させる。即ち第一期は専ら遊戲童話等を中心とする兒童生活を表現の對象とし、これを以て第二期以降の教材の母胎たらしめる。童話は傳説寓話等を経て、第二期に於いて神話英雄物語に移行し、第三四期に於いて更に歴史物語、歴史的文化財に發展させる。遊戲は模倣作業運動觀察等を経て、次第に現代の國民生活文化の諸相に展開させる。特に第一期第二期に於いては修身教科書と相俟ち、國史及び地理の教材の萌芽を啓培して、第三期にそれぞれ科目を分ける母胎たらしめる。

以上は第一期乃至第四期の國語教科書の教材の體系であるが、なほ文字語彙語法の提出も亦右體系と相俟つて自ら基準が定まるのである。今その提出の基準を極めて概括的にいへば次のやうである。

- (1) 簡單にして、基本的なものから始め、次第に複雑なものに及ぶ。
- (2) 兒童の生活や心情に關係の深いものから始める。
- (3) 具體的意義を有するものを先にし、抽象的意義を有するものを後にする。

(2) 第一期の國語教科書

第一期の國語教科書として「ヨミカタ」と稱する國語讀本と、これを言語的作業的に展開する「コトバノオケイコ」と、更にこれを國語指導の全分野に擴充する「ヨミカタ教師用書」の三種を編纂する。いふまでもなく前二者は兒童用書であり、後者は教師用書である。
なほ第一期に於いては掛圖をも編纂する。

在來の國語讀本に該當するもので、卷一から卷四まで之を一聯として見るべき組織を有する。

特に卷一は第一部乃至第三部から成り、専ら言語の發生系統を考慮してこれを具象化した形にできてゐる。即ち第一部は兒童の主體的な叫び聲及びそれからやや發展した韻律的言語を教材とするもので、その排列は發音指導の展開に即せしめたものが多く、随つてこれをできるだけ大きく叫ばせることによつて發音の基礎練習をなさしめ、且訛音の矯正につとめしむべきものである。第二部に入つて先づ喉の言語を與へ、これを手がかりとして教養ある言語への關心を高め、教養ある話しことばを基礎として兒童の生活を表現するとともに、旁ら第一部の素朴な韻律的叫聲を調へて次第に童謠童詩に展開し、第三部に入つて童話的敘述に移行する。

卷二以降卷四に至る教材の文章は、専ら卷一のそれを母胎として展開し、次第に複雑と深みとを加へて行くのであるが、しかもこの四卷を通じて注意すべきは表現が常に兒童の主體的態度に即してあるが、まゝに客觀的に敘述されてゐないことである。動物はもとより、心なき自然物が多かれ少かれ擬人化され、童話化されてゐる。更にこれと同じ立場から、敬語の使ひ方にも略一貫してゐるものがある。即ち、おとうさん、おかさん、おぢいさん、おばあさん等の言動を敘述する場合常に敬語的に表現されてゐる。これら目上の人の行動は、オッシャイマシタであり、イラッシャイマシタであり、ホメテクダサイマシタであつて、オトウサンガイヒマシタ、オカアサンガイキマシタなどいふ言ひ方は、モモトラウ「花サカヂヂイ」の如き説話的敘述の外には全くないのである。これが第二期以降に於いて、徐ろに「オトウサンガイヒマシタ」「父ガイッタ」といふやうな敘述の客觀性へ進展するのである。

しかも第一期は國語指導上、話しことばの基礎練習をなさしめる重要

な時期であるに鑑み、この期に於ける散文教材は敬體口語文を以て建前とし、僅かに韻文の一部に常體口語文を用ひた。これは大體在來と同じ行き方ではあるが、しかも在來以上に音聲言語を重視する立場から、卷一巻頭の二教材は文字を用ゐず、専ら兒童の話し合のための教材とした。僅か二教材に過ぎないのではあるが、これによつて先づ文字以外に國語指導が存在することを宣言するとともに、この精神は「ヨミカタ」の教材のすべてに亘つて音聲言語指導の重要性を物語るものであることを忘れてはならない。

なほ、音聲言語指導を重視する立場から、「ヨミカタ」に對話教材、劇教材を多く挿入したばかりでなく、すべての教材を音聲言語として取扱ふべき手がかりを「コトバノオケイコ」に示し、教師用書に於いて更にこれを擴充した。

第一期に於いては、全教科の教科書に亘つて、童心を重んじ、躰及び初步訓練を重視すること、全國に共通な兒童生活に取材し、生活曆に隨つて教

材を排列すること、各教科に亘り或程度共通な事項に主題を求めて教材を作成すること、兒童用書に登場する兒童人物の名性質等なるべく一致させること等、細心の注意の下に編纂されてゐるのであるが、これらは兒童生活の全體的表現を期する「ヨミカタ」に於いて最もよく體現されてをり、單に國民科教科書として「ヨイコドモ」と一體たる關係にあるばかりでなく、理數科、藝能科の各教科書と殆ど餘すところなきまでに連絡相即してゐるのである。けだしこの期に於ける兒童は、見方、感じ方、理解の仕方、に於いて未分化的であり、全體的直觀的である關係上、これによつて學習を未分化的全體的ならしめることを期するものである。

しかもかくの如く兒童心身の發達に即應して細心の考慮をなすことは、決してかつての兒童中心主義の如く、兒童のために兒童を開放せんとする自由主義からなされるのではなく、どこまでも兒童を皇國民として鍊成するための過程として教育的方法の遺憾なきを期する立場からなされてゐるのである。隨つてこの第一期と雖も、兒童の生活に即し、その心

情理解に適應する限りに於いて國體の尊嚴にめざめしめ、敬神崇祖の念に培ひ、高度國防國家體制の確立に資するやうな事項はつとめてこれを採擇し、「ヨイコドモ」「ヨミカタ」一體たる立場に於いて、互に提携し相補ひつつ國民科教科書たるの面目を發揮してゐるのである。

しかも、「ヨミカタ」教材の特色は、かくの如き事項を決して理念的に注入するものでなく、どこまでも國語の力を通じて感動的に與へようとするものである。即ち國語の教材は、その表現をはなれて成立するものでなく、教材の精神は表現の進展と相俟つて次第に擴充し、浸潤するのである。かくの如くにして、「ヨミカタ」四卷を通じ教材は彼此關聯し相互に展開發展しつつ、殆ど網の目の如く相結んでゐるのである。

先づ「アカイアサヒ」「ヒノマルノハタ」(卷二)「日本ノシルシ」(卷三)「富士の山」(卷四)に國土の誇が漸層し、これらが「二重橋」(卷三)「菊の花」「金しくんしやう」(卷四)を中核として國體の尊嚴を具象化し、これらと結んで「ハトコイ」と呼び、「コマイヌサン」と呼びかけ、「オミヤノ石ダシ」を登り、「オハカノサウヂ」を

し、(以上卷二)「お祭」に参拜し、(卷三)「神だな」卷四を飾る一聯が敬神崇祖の精神を目ざめさせ、祖父の父を見る「ユメ」や「机」としかけの話や(以上卷二)祖父の語る「川」の話(卷三)が、兒童の生活を過去の傳統に結び、「シタキリスズメ」や「モモタラウ」や(以上卷二)「サルトカニ」「花サカヂヂイ」(以上卷二)の童話から、「うらしま太郎」(卷三)「早鳥」「羽衣」(以上卷四)の傳説、「國引き」(卷三)「白兔」(卷四)の神話への連繋が、歴史的色彩を次第に濃厚にする。あらゆる自然教材がこの國土の美しさをたたへて文學を育てるとともに、地理や理科を育てるのである。しかも、「ユフヤケコヤケ」を歌ひ、「カクレンボスルモノ」を叫び、「ココハドコノホソミチダ」に遊び暮らし(以上卷二)「ねんねんころりよ」(卷三)の歌に夜の夢を結ぶ古謡の魅力が、今も兒童を健やかに育くんでゆくのである。

尊い國柄美しい國土の四面は海である。「イケニフネ」を浮かべ、日本ハウミノクニとたたへ(以上卷二)「山ノ上」はるかに海を眺め(卷二)遂に「海」へ來てその躍動の姿に驚喜する(卷三)。この海を越えて「ラジオノコトバ」が世界に擴がり、「西ハタヤケ」の滿洲をしのび(以上卷二)「滿洲の冬」を眺め、「金の牛」の物

語を聞き、支那の子ども以上巻四を讀んで東亞新建設の相をまざまざと見る。そこで子どもらは「ラジオ體操」をし、校庭の遊戲をし、「ヘイタイサン」の畫をかき、「キヲツケ」の號令で兵隊ごっこをし、(以上巻二)「兵タイゴッゴ」の劇を演じ(巻二)、「ヒカウキ」(巻二)や、「らくかさん」(巻三)に夢中になり、あつばれ「軍かん通」となり(巻三)、「こうあほう」(こう日)に感激し(巻三)、「海軍」のいさんを喜び迎へ、いさんの入營を送り、病院の兵たいさんを見舞つて、(以上巻四)やがては自分も大君の御楯と立ち、科學國防の戦士となり、銃後のまもりを堅くする心構をつくりつつあるのである。

かく觀じ來れば、「ヨミカタ」の教材はその一つ一つが、それぞれの意義と感動を有するばかりでなく、それらが相即展開するところにいはゆる高度國防國家體制をさながらに具現し、意義と感激をいよいよ深からしめるものがある。指導者はこの點に留意し、徒らに一教材に踟躕して抽象的理念を注入することなく、常に全般の教材を見通し、表現の具體に即し、連絡の絲をたどりつつ取扱ふことが大切である。

なほ文字の提出に就いて在來の方法を改めた點を述べると、大體次のやうである。

(1) 新出讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げなかつたこと

新出並びに讀替の文字を兒童用書の欄外に掲げることは國語讀本の長い傳統であるが、これがためにややもすれば國語指導即文字教授の感を抱かしめ、指導方針を誤る向がないでもなかつた。殊に音聲言語の重要性を認め、音聲言語文字言語兩面に亘つての理會力發表力を修練する國民科國語の立場からすれば、この方法は絶對に改める必要がある。よつて在來の方法を變更し、兒童用書の欄外に文字を掲げないこととしたのであるが、しかし兒童用書の卷末及び教師用書の各課に於いて仔細に指摘し、以て指導上の手がかりとした。もちろんかくの如き方法の變更は、決して文字の意義を軽く視たのでなく、國民科國語に於いては、國語そのものの指導を徹底せしめる點からして、ことばとともに文字指導の任務は寧ろ一層重要である。

ことを考ふべきである。

(ロ) ひらがな初歩の練習を専らコトバノオケイコに譲つたこと

カタカナによる教材に習熟してから、これをひらがなに置きかへることに就いての在來の方法は、合理に偏して一時教材の質を低調ならしめ、却つて學習の實際に即しないものがあつた。よつてひらがなの提出及び初歩練習は専らコトバノオケイコに譲り、ヨミカタと相俟つて習熟せしめることを期した。

(ハ) 漢字の提出

教材が單純で、しかも兒童の器械的記憶力の旺盛な時期に漢字を多く提出することが適切であることは、教育の實際に於いて意見の一致するところである。小學國語讀本が既にこれを或程度實行して來たのであるが、國民科國語教科書に於いては一層その程度を進め、第一期及び第二期に於ける漢字數を在來よりも多くし、第三期第四期に於いてはこれを減少して専ら漢字使用の應用を自在ならしめ

ることを期した。

コトバノオケイコ

「コトバノオケイコ」は「ヨミカタ」に相即して、兒童に國語活動をなさしめるための編纂物である。「ヨミカタ」と一體のものであり、「ヨミカタ」と同時にこれを使用せしめるものであるから、「ヨミカタ」の一課毎に「コトバノオケイコ」もこれに應じて課が設けられてある。

その内容は、「ヨミカタ」の教材の特質に應じてそれぞれ變化はあるが、大體に於いて「ヨミカタ」の教材を話すことに發展させる部分、發音語法・カナヅカヒに注意せしめる部分、綴り方へ橋渡しをする部分、書き方を修練せしめる部分等から成立し、時に教材を劇化し、補充的な教材を挿入した部分などもある。

要するに「コトバノオケイコ」は、兒童が「ヨミカタ」を理解する手がかりとなるものであるとともに、これにすがつて働くことによつて、自ら國語の

道を實踐するものである。又これを指導する側からいへば、読み方指導の指針となり、その擴充ともなるのである。随つて「コトバノオケイコ」の存在は、別段兒童の負擔を重くするものでもなければ、授業の時間に影響を與へるものでもないのである。

兒童にいろいろな言語活動をさせて、言語文字を身につけさせることは、低學年の國語指導として極めて大切なことであるが、しかしそれは實際指導に於ける生きた問題によつてこそ生きた指導が行はれるのであつて、これを豫め教科書の上に規定することは、ややもすれば教材を死物たらしめ、指導を固定せしめる結果に陥りがちである。随つて「コトバノオケイコ」は、問題を極めて重點的に選り、取扱の基準と方向を暗示することに止めた。指導者はこの精神に鑑み、つとめて指導の實際に即して問題を生かすことにとめることが大切であり、特に煩瑣に陥るが如きは絶対に戒むべきである。

教師用書

「ヨミカタ」は國語教科書の中軸であり、これを兒童の國語活動にほぐしたのが「コトバノオケイコ」であるが、更にこの二者を包括して國語指導の全分野に擴充するのが、この「ヨミカタ教師用書」である。名は「ヨミカタ教師用書」であるが、實は國語教師用書なのである。

「ヨミカタ教師用書」は、「ヨミカタ」の教材に即して教材の趣旨、文章、取扱の要點、注意すべき發音、文字、語句、語法等備考の五項に分つて説明し、更に附録及び綴り方指導要項、話し方指導要項が併せ掲げてある。今これらの項目に即して簡単に説明と注意とを加へておく。

(イ) 教材の趣旨

主として教材を採擇した意義を説き、随つて教材の目的を述べる部分であるが、読み方教材の意義や目的は決して一言で盡くせるものではなく、見方によつていろいろの面に擴げて考へられるのが常であり、又或

程度それが當然でもある。大體教材の思想感情に即して解説したのがこの項で、それは専ら指導の心構ともなり注意ともなる部分である。決してそのままを兒童に與ふべきものではない。なほ卷一に限り次の文章に關することもこの項に簡単に述べてある。

(ロ) 文章

教材を表現面に即して説明した部分で、これも亦主として指導の用意として掲げたものであり、そのまま兒童に與へるものと考へてはならない。

(ハ) 取扱の要點

教材の如何なる點を如何に兒童に與へるかに就いて重點的に示したもので、卷一ではそれをやや順序的に説き、卷二以降は「讀むこと」「話すこと」「書くこと」「文字の指導」ことばの仕事等に別けて項目的に列擧してある。しかし何れにせよ取扱の重點を示すのが本旨であり、順序を説くのが本旨ではない。元來取扱の順序の如きは指導の實際に即して

きまることであり、又指導者の好む方法によつてもきまることであるから、卷一と雖も決してその順序に従ふべきものと考へなくてよい。今、更にこれらの細目に就いて一通り説明する。

讀むことは朗讀を主體とし、齊讀、微音讀、默讀等、或はその場合に應じ、或は兒童心身の發達の程度に應じて適宜採用するべきであるが、要するに讀むのは文字言語を理解し、それを通して兒童の體驗や思想を豊富ならしめるのが目的である。随つて讀むことは決して直接に實物によつて理解させることなく、文章を通すことによつて理解させるのが本體である。もちろん文章の理解を助けるために説明を加へ、又實物を觀察させることも或程度大切であらうが、それはどこまでも文章理解の手段であることを忘れてはならない。

なほ「讀むこと」は反復的に習慣づけることによつて正しくも讀み、理解に到達し得るのであるから、何れの兒童にも反復して讀ませるやうにすることが大切である。

しかも音聲言語指導の立場から先づ「讀むこと」に於いて正しい發音の練習をさせ、訛音方言を矯正することが極めて肝要であり、それもできるだけ早期に於いて基準を示し、これによつて習慣づけるやうにすべきであるから、卷一に於いては特に發音上の注意が具體的に示してある。

「讀むこと」には當然解釋を伴ふ。いはゆるセンテンスメソッドの觀點から、最近語句の解釋を等閑視する傾向があるが、兒童の理解力を向上せしめるには、何を措いても反復朗讀させることと、語句を適切に解釋することが大切である。解釋はできるだけ具體的になすべきであり、低學年に於いては、ことばの仕事と相俟つて動作に訴へさせ、又必要に應じては方言と比較して意味を把握させることも機宜を得た處置であらう。

「話すこと」「讀み方指導」に於ける「話すこと」は極めて簡単な發表をさせることを目標とする。即ち教材を共通な話題として兒童と問答し、簡明

な話をさせることを意味するのであつて、指導者は絶えずその話に留意しながら、よきことばを取上げ、誤れることばを正し、つとめてことばとしてよき發表に導くやうにし、これによつて「話し方」の基礎練習をなさしめるとともに、「ヨミカタ」教材の理解に資するものである。しかも「バイ」「イイエ」「何々デス」「何々ダト思ヒマス」「サウデハアリマセン」「マチガヒマシタ」「ヨクワカリマシタ」の如き發表を絶えず練習させ、これを身につけさせることが最も大切である。

在來も「讀み方指導」に於いて種々問答や話合は行はれたが、それは多く教材の意義に踴躍し、甚だしきは教材から或種の理念や思想を導き出さうとする底のものであつた。兒童の理解に負擔のある話題では、言語練習には役立たない。ここに「話すこと」といふのは、専ら兒童に言語の躰をなすとともに、教材に即して兒童の心情を明瞭に端的に發表させることを期するものである。

書くこと「コトバノオケイコ」に鉛筆による「書き方」手本が示されてある。

のでもわかるやうに、この「書くこと」は、書き方指導を主體とするが、更に
 なほ適當な書寫及び書取の指導をも含むものである。卷一、卷二に於
 いて手本に點線の文字が併記してあるのは、いふまでもなくそれをな
 ぞらせることを意味するが、ただそれだけで終るのでなく、更に筆記帳
 に反復して書かすべきである。すべて手本の分量は最少限度に止め
 てあるから、指導者はつとめて、ヨミカタの中から適當の教材を選び書
 寫又は書取を行はせ書くことによつて文章を理解させるとともに、文
 字の記憶を確實にし、又筆寫力を養成すべきである。なほ書き方指導
 に關する注意が附録に掲げてあるから、藝能科習字と相俟つて適切な
 指導をなすことが大切である。

文字の指導 新出並に讀替文字を中心として指導することは、いふまで
 もなく、常に書くことと關聯して文字の記憶を確實にすべきである。
 次にカナヅカヒに就いては、主として「コトバノオケイコ」に掲げられ
 たものに就いて適切な指導をする。

元來カナヅカヒの學習に關しては、これを非常に困難なものとして最
 初からその指導を放棄するものと、又反對に字音ガナの末に至るまで
 強制して兒童を無用に苦しめるものがある。
 カナヅカヒの指導に際し特に重視すべきは、それが我が國語の法則に
 關係し、隨つて廣く國民生活、國民感情にまで喰入つてゐる部分であつ
 て、兒童にとつて將來漢字の中にかくれるやうな字音ガナの如きは、大
 部分讀ませる程度に止むべきであり、國語カナヅカヒと雖もカナ書に
 する習慣の少ないものは、強ひてこれを穿鑿すべきでない。故にカナヅ
 カヒの指導に當つて最も大切なのは、助詞と用言の語尾と、その他極め
 て少數のものに限られることになる。「コトバノオケイコ」には、今日實
 際生活上極めて必要な部分を選択し、法則的に關係あるもの使用上極
 めて誤られ易いものを、或は類別的に、或は對照的に排列して、兒童の理
 解と直觀に訴へ、且同じ種類のものを幾度か反復することによつて記
 憶の手がかりとした。指導者はこの點に留意して、適切な指導をなす

ことが大切である。

ことばの仕事 言語を動作にあらはすことによつてその意味を理解させることは低學年の指導に於いて極めて適切なことである。「コトバノオケイコ」には、「ヨミカタ」の教材中から動作にあらはし易い短文を選んで掲げてあるが、敢へてこれに限らず適當の語句文章を選んで隨時動作化させるがよい。兒童劇はいはば全文を動作にあらはさしめるものである。なほこの外に、文章中に語句を記入させたり、語彙語句によつて文章を作らせたりすることも、「コトバノオケイコ」にその例が多いのであるが、これらは「読み方」指導の擴充であるとともに、一面、綴り方への橋渡しをするものである。

(二) 注意すべきことば 文字 語句 語法等

地方的に誤られがちな發音訛音方言等を指摘して矯正の手がかりとし、新出讀替の文字を掲げて文字指導の便りとし、又注意すべき語彙語句語法修辭等を重點的に掲げて指導上の参考としたのがこの項であ

る。特に卷一に於いては訛音方言等に関し、やや詳細に引用注意して發音の基礎練習に資してある。

アクセントに就いては、特に誤られ易いもの、同音異語に関するものに就いて注意を促す程度に留めてある。

(ホ) 備考

教材相互の連絡、「ヨイコドモ」の教材との連絡、他教科の教材との連絡を指摘して取扱上の考慮を促し、又極めて必要と思惟せられるものに限り、教材の参考資料出典等を掲げたのがこの項である。

元來「読み方」教材は文章そのものが教材であつて資料や原據は單なる素材に過ぎないのであるから、これによつてみだりに教材を補充したり、殊に單純化することによつて始めて教材となつたものを逆に複雑にしたりして、兒童を困惑せしめ、況んや資料原據によつて教材を變更するが如きは最も戒むべきである。かかる見地から、資料や出典の掲載はできるだけ少數の限度に於いてなしたのである。

附 録

附録として次の四つのものが掲げてある。いづれも指導上の参考に資するものである。

新出讀替文字一覽

運筆順序

鉛筆による書き方指導上の注意

「ヨミカタ」の發音

右に就いては一々説明するまでもないが、ただ「ヨミカタ」の發音に就いては一言を要する。これはカタカナを發音符號的に使用し、「ヨミカタ」教材全部をこれによつて表記し、ガ行鼻濁音に記號を附したものである。

綴り方指導要項

話し方指導要項

「綴り方」話し方ともに教師の實際指導に俟つて始めて生かされるのであるから、特に教科書は編纂しないのである。しかも大切なことは、どこまでも國語指導の精神に鑑み、各分節が密接に提携して行はるべきことであり、話し方の如きは施行規則にも時間を特設しないことが建前となつてゐる。

この見地から新たに「綴り方」話し方ともに要項を定め、第一期乃至第四期に即する指導段階を設け、更に各學年の指導に就いてその大綱を定めた。

なほ「綴り方」は右大綱の外に、參考として各學年の文題をも併せ掲げた。これら文題は廣く「ヨイコドモ」「カズノホン」「自然の觀察」「ウタノホン」「エノホン」等の教材と連絡を取り、兒童生活の實際を考慮して選んだもので、かくの如くして「綴り方」に於いても亦國語表現の全體性の發揮を期するのである。

「話し方」はこの要項に定めたところに随つて、一面には「讀み方」指導に即

して基礎練習をなさしめ、一面には兒童の自由な發表を「綴り方」と結んで音聲言語の醇化をはかり、更に各教科の指導及び兒童の生活に即して絶えずよき言語を躰けることを心掛くべきである。なほ時に時間の特設する場合には、「綴り方」指導要項に掲げた文題を参考とし、これを話題として指導することも可能であらう。

掛圖

第一期に於いては「讀むこと」「話すこと」一體たる立場から掛圖は「讀み方」教材の一部として、文章挿畫と一體的に取扱ふやうにすべきである。「ヨミカタ」から離れてこれと無關係に掛圖のみを取扱ふ弊におちいらない注意が肝要である。

各

説

一 春

教材の趣旨

再び春がめぐつて來て、兒童は二年生になる。既に卷二の「ウグヒス」や「つくし」などに、二年生になる豫想の喜びや、早春のうれしさなどが表現されてゐたが、いよいよ四月になつて豫想は實現し、春は莊嚴具足の姿を以て家庭にも學窓にも街路にも、田園にも訪れて來る。

ヨイコドモ下の巻頭の教材は、主として「二年生」になつた喜びからその責任感を誘ひ起して、いろいろな實踐の指導をするのであるが、よみかたはそれと關聯しながら、ことばを通して國土自然の喜びに感激させようとするものである。

しかし同じ四月といつても、南西の地方は既に櫻も散つて若葉に近く、東北地方以北は殘雪にとざされ花信も遠いのであるから、教材は寫

實を避けて、ただ心に映ずる春を感激的に叫ぶ程度の韻文にしてある。
——残雪のなほ深い地方でも、雪の下には春が芽ぐんでをり、人の心は
専ら春を思うてやまないものであつて、そこにわが國民としてのほほ共
通な季節感があることを考へ、その郷土郷土に即してかうした教材を
生かすことが大切である。

春の喜びの一つとして、この頃の行事である、花まつりの韻文を併せ
掲げ、ややこまやかな敘述を用ひた。四月八日の灌佛會は、早く推古天
皇の御代に行はれたといひ、平安時代には朝廷で行はせられた程の傳
統的な行事で、爾來種々の變遷もあるが、今日では、花まつりとも稱して、
佛教行事中最も童心の豊かな、しかもわが國土の春の自然を巧みに具
象化した姿で行はれる。昔は陰曆で行はれ、今は地方によつて陽曆陰
曆まちまちである。かうした民間的年中行事が、陰陽二様の曆によつ
て行はれることは、教材として悩みとするところであるが、それらは指
導上末節に拘泥しない心構で感情情緒を生かす工夫が大切である。

文章

なほ教材としては信仰的意義からでなく、主として宗教的感情情緒に
培ふ意義に於いて取扱ふべきである。

韻文で、二年生は八五七七の形であり、花まつりは七五である。どち
らも二拍子によつて調子よく讀むことができる。

二年生は、二年生になつた喜びと、春の自然に對する喜びとを配合し
て主體的に表現されてゐる。

「花まつり」も主體的表現であるが、それにはややこまやかな觀察や行
動が織りこまれてゐる。

第一聯は美しく飾られた花の御堂をあらはしたもので、御堂の前に
立つて、一ばん目についた美しい屋根をとほして全體的な感じをあら
はしたものである。

第二聯は御堂の中の小さな誕生釋迦をあらはしたので、甘茶の中に
立つてゐる釋迦を、甘茶の中からひよつこりと浮かび出したといふ空

想によつて書かれてゐる。そこに誕生釋迦の心も働いてゐる。

第三聯は釋迦像の姿そのものの表現で、右手をあげて天上を指さし、左手を下げて地上を指さしながら立つてゐる姿をあらはしたものである。生まれ落ちると立つて天上天下を指さし、七歩あるいたといふ傳説が織りこまれてゐる。

第四聯はお参りしたものが、小さな竹のひしやくで甘茶を汲んで釋迦像に注ぎかけることを、兒童の心になつてあらはしてゐる。

第五聯は花まつりの喜びで、第一聯のすみれたんばほとともに春の自然によつてそれが表現されてゐる。

取扱の要點

讀むこと 韻文であるから發音を正しく指導するとともに、讀みの上に韻律をあらはすことが大切である。齊讀の際などは拍子を取つてきちんと揃へて讀ませるがよい。

文字語句の指導をなし、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと ことばのおけいこ三頁(一)によつて話合に入る。

「二年生になつてうれしいでせう。どんなことがうれしいか、話してごらんなさい。」

これは専らヨイコドモ下の二年生の學習と相俟つて話させる。

「春になつてうれしいでせう。どんなことがうれしいか、話してごらんなさい。」

ヨイコドモからやや方向をかへて、春の自然に對するうれしさを語らせる。「二年生になつたこともうれしい。」「春になつたこともうれしい。」「大人にはそれが二つのこととして考へられるが、兒童には寧ろ一つのこととして感じられるであらう。その二つを一つに歌つたものが、よみかた「春の二年生」である。

さて春になつてうれしいと思ふことを話させながら、そのうれしいことのひとつとして「花まつり」を結んで行く。例へば次のやうな問によつて、話合を進めて行く。

「おしやかさまは四月八日にお生まれになつたさうです。この日お寺ではどんなことがあるか知つてゐますか。」

「お寺の花まつりを見たことがありますか。」

「おしやかさまの小さなお堂のやねは何でかざつてありますか。」

「かはいらしいおしやかさまが甘茶の中で立つていらつしやるでせう。手はどうしていらつしやいますか。」

「おまわりをした時、おしやかさまにどうしてあげますか。」

ことばの仕事 ことばのおけいこ五頁(四)の、

小さなひしやくでお茶くんで、

かけてあげましよおしやかさま。

の一節をどう動作にあらはすかを兒童に考へさせてやらせて見る。

ことばを動作にあらはすことは、理知的方面のまだ十分に發達してゐないこの期の兒童に、一番よく語句の意味感情を理解させる方法であることに留意し、その動作を意味感情に即應してあらはすやうに指導する。

書くこと ことばのおけいこ三頁(二)によつて先づ文字を正確に書かせ、更に時間に餘裕があれば全文書寫又は適當に書取をさせる。

文字の指導 漢字は新字讀替等を中心として指導し、なほことばのおけいこ四頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。カナヅカヒは掲げられた例に就いて理解することを主眼とし、讀むこと書くことによつて習慣づけられて行く文字の視覺像と

結んで、次第に確實に記憶させるやうにする。

注意すべきことば 文字 語句語法等

矯正すべき訛音方言

春だ——「春ジャ」といふ地方がある。

小鳥——「ユドリ」と發音しないやうに注意する。

すみれ たんぽぽ れんげ草——いづれも方言が多い。「タンポコ」「ゲンゲ」などの訛音を矯正する。

ひしやく——訛音が多い。發音に注意を要する。

あなた——「アంత」といはいないやうに注意する。

文字

新字——鳥 野 美しい あま茶

讀替——れんげ草(ソ) 天上(ジョ) 天下 今(キョ)

語句語法

うれしいうれしい二年生——「二年生になつてうれしいな」といつた文的發表である。

お出になつたか——「お出になる」といふ敬語的語法。

お立ちになつていらつしやる——敬語的語法。

あけましよ——正しくは、あけませうであるが韻文的制約によつて許容的に用ひてある。

備考

ヨイコドモ下二年生と密接な連絡のもとに取扱ふ。

ヨミカタニ「ウグヒス」つくしの發展として取扱に考慮する。

カスノホン三「四月の雑題」中の「二年生になつて、自然の觀察三、季節だより」春の種まき、うたのぼん下「春が来た」さくらさくら、エノホン三「春が来た」と連絡して取扱に考慮する。

参考資料

灌佛會——毎年四月八日（釋迦牟尼佛降生の日）に佛像を灌浴する行事をいふ。佛生會龍華會誕生會等の稱あり。眞宗を除き餘の諸宗にては此の日高さ一尺五寸乃至二尺ばかりの假堂を設け季節の花にて屋根を飾り之を花御堂又は花亭と稱し佛降生の像を安置す。像は銅鑿の中央に安き鉢には甘茶を湛へ、參詣者は小柄杓を以て像の頭上より灌沐す。又小器を携へて參詣し甘茶を請ひ歸りて之を盥に和し、千早ふる卯月八日は吉日よかみさげ蟲を成敗とするの歌を書き屋内に貼り置かば蜈蚣等の害を避くるものとせり。是等は後世にありて行はるる風習に過ぎずと雖佛生日に關する行事は經典に其の説ありて印度支那等にも之を修せり。摩訶利頭經には四月八日夜半明星出づる時を以て生じ地に墮ちて行くこと七歩右手を擧げて言く天上天下に我當に人民の爲めに師となるべし。太子生ずる

時天地皆大動をなす第二刹天王釋及第一四天王皆來下し十二種の香湯雜華を持し用ひて太子の身に浴す。（下略）——佛經大辭彙

二 らくかさ

教材の趣旨

春の遊びとして風あげ、羽根つきの外にまりつきや紙風船がある。らくかささんもその類と考へてよからう。落下傘は近代語で、ラシュート^{ラッシュ}の譯語として用ひられてゐるが元來この種のものは、わが國で昔から花火に用ひられ、風船とか風袋とかいつて兒童の玩具にもなつてゐた。同じ形のものが飛行機に利用されるに至つて、落下傘の語が次第に優勢になつて來た。

本教材は、自然の觀察に於ける落下傘の製作と關聯して兒童の遊戲生活を表現し、遊戲に即して理科的な工夫と科學國防を示唆せんとす

るものである。

文章

人物は卷一以降おなじみの勇と正男と春枝の生活としてあらはされてゐる。勇は常に積極的であり、正男は内省的で思考工夫をこらす性向を持つてゐるが、ここでは正男のさうした方面はさう判然と出てはゐない。

文章は落下傘を作つて揚げてみることに始り、小さな失敗と工夫とによつて成功し満足する順序にあらはされてゐる。

落下傘を揚げるに際してのおもりの輕重は理科的な考察と處理とを含んでゐる。成功に至るには春枝といふ援助者があり、南風にあふられて北へ飛ぶといふところも理科的な叙述である。「らくかささんぶたいだ」と叫び、ぐんよう犬もとつげきといふに至つて、一轉して科學國防の注意を喚起する。しかし全體が兒童の無邪氣な遊戲生活の主體的な表現であることはいふまでもない。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導する。文は對話によつて發展する兒童生活の表現であるから、劇的に讀ませることも大切である。

文字語句等の指導をし、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 主として挿畫掛圖文章を中心とし、兒童の體驗と關聯して話させる。

ことばのおけいこ五頁(一)によつて對話を讀ませ、それが誰のことばであるかを話させ、兒童を指名して對話を劇的に讀ませる。

書くこと ことばのおけいこ七頁(二)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば更に書取を行ふ。

文字の指導 新字讀替の文字を中心として確實に指導し、ことばのおけいこ八頁(三)によつて、カナヅカヒの誤に氣づかせ、訂正をさせる。

注意すべきことは 文字 語句語法等

アクセント

かみ(紙)―カミ かみ(神)―カミ

矯正すべき訛言方言

らくかさんを——「ラッカサンバ」「ラッカサン」などといふ方言的な言ひ方を注意して矯正する。

野原へ——「野原サ」「野原サ」などといふ方言的な言ひ方を注意して矯正する。とばさう——「とばせよ」などいろいろ言ひ方がある。「とばさう」(トバソー)を標準とする。

かるいのだね——東京では「かるい」だねが普通で、それは話しことばとして許容し得る。「のを脱落して「かるい」だねなどといふのは矯正すべきである。「さがしてゐるのです」を「さがしてゐるです」などといふも同様である。

ぼくのを——地方により「のをを」「ンオ」「ナオ」「ガオ」「ガンオ」「トオ」などといふところがある。いづれも指導に注意を要する。

さがしてゐるのです——「ですを」「ス」「ダス」などといふ地方では矯正すべきである。あそびに來ました——東京方言では「アソビ」といふ傾向がある。目的を示す「に」を地方によつて「ク」といふところもある。いづれも注意して指導することが大切である。

文字

新字——野原 向かつて 力

南 北

開かないで 落ちて 同じ 重すぎる 何を ガラス五

讀替——春枝 ぐんよう犬

語句語法

次の如き語句はその意味をよくわからせる必要がある。

開かないでそのまま落ちて來ました

開くには開きました

正男さんが同じやうに空へなげました

これは重すぎる

よささうな石をあちこちとさがしました

でんでに大きなこゑでいふと

「らくかさふた」と「落下傘部隊」「ぐんよう犬」「軍用犬」とつけぎ(突撃)——これらは軍事上の術語であるが現に兒童の生活語としてはいりこんでゐる。もちろん知らない兒童も多からうが話合や簡単な説明で具體的に指導する。「軍用犬」は昔のことばで、今は「軍犬」といはれてゐるが一般的には「軍用犬」の方がしたしきがあるので暫く後者を用ひたのである。

備考

連絡

自然の觀察三「らくかさ」と連絡して取扱に考慮する。

三 國引き

教材の趣旨

出雲風土記に有名な國引きの神話を教材化したもので、ヨミカタにあらはれた最初の神話教材である。太古の簡樸にして雄大な殊に生發展の氣象をさながらに具體化した説話であることに留意し、その點を専ら兒童に感得せしむべきであるが、いつてそれを觀念的に注入すべきでなく、どこまでも文章の興味を通して自ら感銘させることが大切である。

かかる種の説話に對して、ややもすれば侵略主義呼ばはりをして教育的に否定せんとする者もあるが、この神話のどこにさういつた意味があるであらうか。原文に「國之餘有耶見者國之餘有詔而」とあるやうに、捨てて顧みられない邊土の餘を引寄せてそれを經營し、そこに獨自の文化をうち立てようといふのである。もしそこに侵略的な心があるならば、一體誰に遠慮をして、國の餘ありや」とことわる必要があらう。國際關係のやかましい近代ならばともかく、悠々漠々たる太古に於いて、

て、なほ「國の餘を採さうとする謙虛な心を見るべきである。八紘一字もかくてこそ世界を光被すべき道なのである。

文章

原文は頗る莊重な文章であつて、その趣をこの時期の兒童の讀む現代文に移すことはできないのであるが、その精神の一端は説話として與へることができ、し、文字やことばに於いても、「國」「神」「土地」「東」「太い」「力」「舟」「西」といふやうな偉大性空間性をあらはすものが中心となつて表現されてゐる。原話は同じ叙述を四回くりかへす形の上になり立ち、そこに童話の反復形式と共通のものがある。本教材は、四回の反復を二回とし、神の名も土地の名もすべて省略して單純化されてゐる。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導するとともに、神話の性質に鑑み十分落ちついて讀ませ、範讀は莊重に讀んで聞かせる。

文字語句の指導をし、特に「神さま」の叙述に伴なふ敬語的語法に注意させる。

読むこと、話すこと、書くこと相俟つて読みを確實にする。

話すこと 挿畫(掛圖)文章等を中心に、順次説話の内容を話させる。

「このお話はいつのことですか。」

「神さまはどうお考へになりましたか。」

「神さまが海の上をお見わたしになると、どういふことがありましたか。」

「神さまはその土地をどうなさいましたか。」

「その土地をどういふ風にお引きになりましたか。」

「するとその土地はどうなりましたか。」

「そこで神さまはどうなさいましたか。」

「……………」

次にこの説話の最初から終までを、まとめて簡単に話させる。數人に話させてからことばのおけいこ九頁(二)を読ませ、それが説話の要約として書かれてあることに注意させ、要約のしかたを會得させる。

更にことばのおけいこ九頁(一)の「かけこゑ勇ましくお引きになりました。」といふこ

とを動作にあらはさせ、「こつちへ来い、えんやらや」を叫ばせながら、綱を引く様子をさせる。

書くこと ことばのおけいこ十頁(三)の文によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕が

あれば適當に書取をさせる。

文字の指導 新字讀替の文字を中心に正確に指導する。特に本課の新字や讀替文字が、偉大性空間性をあらはす性質の文字であることに注意し、文の莊重と交渉するところの多いことを考へさせつつ指導する。

ことばのおけいこ十頁(四)によつてカナヅカヒに注意させる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

矯正すべき訛音方言

廣くしたい——「ヒロシタイ」といふ地方が多い。

見えました——東京方言で「メーヤシタ」と訛る傾向がある。

太いつな——地方によつて「大きい」と「太い」とを混同し、「大きい犬を、ふとい犬など」といふところがある。注意して指導する。

力を出して——「カラダイテ」といふ地方がある。音便に讀まないやう注意する。

こつちへ来い——「コッチェコ」といふ地方が多い。
動きだして——東京方言その他に「イゴキ」と詛るのがある。正しく發音するやうに指導す
る。

廣くなさつた——「ナスッタ」と詛る地方が多い。

文字

新字——國こくに引きひ昔こ神かみ廣ひろく土地ち動うごきだして

讀替——土地ち太ふい

語句語法

敬語法に注意させる。敬語をはぶいたものと比較してその差異に氣づかせる。

國を廣くしたいとお考へになりました。

國を廣くしたいと考へました。

海の上をお見わたしになりました。

海の上を見わたししました。

ありつたけの力を出してお引きになりました。

ありつたけの力を出して引きました。

かけこゑ勇ましくお引きになりました。

かけこゑ勇ましく引きました。

國を廣くなさつたといふことです。
國を廣くしたといふことです。

備考

連絡

うたのほん下「國引き」と連絡して取扱に考慮する。

參考資料

本課の出典は出雲國意宇郡の郡名由來として出雲風土記に出てゐる。

意宇と號くる所以は國引きませる八束水臣津野命詔りたまはく八雲立つ出雲の國は狹布之稚國なるかも初國小さく作らせり。故作り縫はな。と詔りたまひて柊はな衣え志し羅ら紀きの三埼を國の餘ありやと見れば國の餘あり。と詔りたまひて童女の胸鉤取らして大魚の鱗うろこ衝つき別けて幅薄穗振り別けて三搓の綱打ち掛けて霜黒葛繰るや繰るやに河船のもそろもそこに國來國來と引き來縫へる國は去豆の打絶よりして八穗米杵築の御埼なり。かくて堅め立てし加志は石見國と出雲國との堺なる名は佐比賣山なり。亦持ち引ける綱は齒長濱なり。亦北門の佐伎國を國の餘ありやと見れば國の餘あり。と詔りたまひて童女の胸鉤取らして大魚の鱗衝つき別けて幅薄穗振り別けて三搓の綱打ち掛けて霜黒葛繰るや繰るやに河船のもそろもそこに國來國來と引き來縫へる國は多久の打絶より

して狭田國なり。亦北門の良波國を國の餘ありやと見れば國の餘ありと詔りたまひて、童女の胸組取らして大魚の鰭衝き別けて、幡薄穗振り別けて、三搓の綱打ち掛けて、霜黒葛繰るや繰るやに河船のもそもそに國來國來と引き來縫へる國は手縫の打絶よりして、間見國なり。亦高志の都都の三埼を國の餘ありやと見れば國の餘ありと詔りたまひて、童女の胸組取らして大魚の鰭衝き別けて、幡薄穗振り別けて、三搓の綱打ち掛けて、霜黒葛繰るや繰るやに河船のもそもそに國來國來と引き來縫へる國は三穗埼なり。持ち引ける綱は夜見島なり。固堅め立てし加志は、伯耆國なる大神岳なり。今は國引き訖へつと詔りたまひて、意宇の杜に御杖衝き立てて、意恵と詔りたまひき。故意宇といふ。

四 二重橋

教材の趣旨

ヨイコドモの「サイケイレイ」と聯關して、天長節祝日の行事に因んだ教材であり、遙かに宮城二重橋をしのばせ、皇室の尊嚴に感激させ、萬邦無比の國體にめざめしめようとする教材である。

二重橋そのものを實際に拜んだ兒童はいくらないのであるが、ヨイコドモ上の巻頭に掲げられてある宮城の御寫眞及びよみかた掛圖の畫に基づき、學校に於いて行はれる四大節の儀式や、宮城遙拜の體驗によつて、全國兒童の心に描かれた映像を、更に國語の表現によつて具象化し、印象を深からしめるものである。

文章

形式にこだはらない詩で、四聯から成つてゐる。

第一聯は眼前に拜する二重橋のけだかさ、美しさに打たれた心の緊張感の表現である。

第二聯は拜禮をして持つ心の餘裕から、恭しく拜觀する印象の具象的な、しかし簡素な表現で、おほりの水、白いやぐら、しげつた松、皇居の「おやね」と、眼は次第にこなたからかなたへ引かれて行つてゐることがわかる。

第三聯は折から參拜した女學生(多分修學旅行の)の拜禮が描き出さ

れ、これによつて皇室に對する國民的感情が一層具體化されてゐる。女學生が最敬禮をし、君が代を唱へる敬虔な態度は、とりもなほさず國民的感情の具體化に外ならない。

第四聯はただ一行であるが、女學生の敬虔な態度、殊に彼等の唱へる「君が代」に共鳴共感して、作者「私」たちも一緒に歌つたといふのであつて、ここに皇室を中心とする一億一心の具體化があり、しかも「君が代」といふ歌のことは（國語）と旋律（音樂）とがその契機となつてゐることに注意すべきである。

「私」たちの「私」は國民學校二年生の兒童と見るべきで、それは先生に引率されて來た一團と見ても、又父兄などにつれられて來た子どもと見てもよい。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導する。形式にこだはらぬ詩ではあるが、一種の韻律があることに留意し、莊重に讀むやうに導く。

文字語句に就き指導し、讀むこと、話すこと、書くことと相俟つて讀みを確實にする。
話すこと 天長節の儀式やヨイコドモの「サイケイレイ」と聯關して例へば次のやうな問により話をさせる。

「二重橋はどこにありますか。」

「宮城にはどういふお方がいらつしやいますか。」

「二重橋のお寫眞を見たことがありますね。それを見て、どういふきもちになりますか。」

「あなたが二重橋の前へ行つた時、どうしようと思ひますか。」

ことばのおけいこ（十二頁一）によつて、數入づつ兒童を指名し、

きちんと並びました。

さいけいれいをしました。

の文章に就き實際の動作作法を行はせる。

書くこと ことばのおけいこ（十二頁二）によつて、文字を正確に書かせる。時間に餘裕があれば更に全文又は一部の書寫、又は書取をさせる。

文字の指導 新字及び讀替の文字を中心として、文字を正確に指導し、又ことばのおけ

いこ十三頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ十四頁(四)によつて、 の中にことばを選んで

記入させ、をがむ「けだかい」「しづか」「くつきり」等の意味語感を會得させる。

注意すべきことば文字 語句語法等

文字

新字

二重構、明かるく、白い、女メジシ學校、並んで、歌ウタひました

讀替

二重ニヘジシ橋

語句語法

韻文である關係上、話しことばとしては用ひられない語法があることに注意して取扱ふべきである。例へば、

目の前にをがむ二重橋

しづかに明かるく

くつきりとそびえ

の如きがそれで特に明かるく、そびえの如き中止形は文語法から來た語法である。

備考

連絡

ヨイコドモ下「サイケイレイ」と密接な連絡のもとに取扱ふ。

ヨミカタ一「ヒノマルノハタ」ヨミカタ二「日本のしろしよみかた三「國引き」の發展として取扱に考慮する。

カズノホン三「天長節と連絡して取扱に考慮する。

五 鯉のぼり

教材の趣旨

鯉のぼりの活躍を力強く叙した教材で、ヨイコドモの「五月ノセツク」と關聯し、殆どこれと一體的に取扱ふべきである。

短い教材ではあるが、力強い叙述によつて、兒童に鯉のぼりの感銘を深からしめ、ヨイコドモの「五月ノセツク」と結んで傳統的な行事に對する感興により、國民的感情を陶冶する。

文章

ヨイコドモの「五月ノセツク」に「鯉ノポリガイキホヒヨクヲドツテキ

マス」と書かれてあるのを、もつと情景的に活寫したのが、この教材であるといつてよい。

ゆうべの雨がはれて、日が氣持よく照つてゐる。初夏の色、矢車が五月の風に吹かれてからからと鳴る高い音、大きな口で思ふぞんぶん風をのむ鯉の活動等、簡潔な中に力強さのある文章である。殊に空中の鯉の活躍と地上のかげの動きとの一體的擬人的敘述に、この文の特色がある。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導する。輕快で、活躍的な短い文の趣を讀みの上にあらはすやうに範讀して、讀みを練習させる。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

「からからとなると、思ふぞんぶん風をのんで、」さをつけるかと思ふと、鯉のかげが地の上をおよぎますの如き、力強い擬人的な表現語句に就いては、話合その他によつて、その意味や感情を理解させるやうにとめる。

話すこと 例へば次のやうな問によつて、ヨイコドモの「五月ノセツク」で習得したこと

や、生活的體驗などを結んで話合をさせる。

「鯉のぼりはいつ立てますか。」

「五月の節供にはどんなことをしますか。」

「鯉はどんな魚ですか。」

「鯉のぼりは何のために立てますか。」

特にヨイコドモの「五月ノセツク」に

「鯉ノボリガイキホヒヨクヲドシテキマス。」

の文のあることを思ひ出させ、鯉のぼりの勢よくをどつてゐる情景を、この「鯉のぼり」の教材によつて話させ、又讀みとらせる。

書くこと ことばのおけいこ十四頁(一)によつて文字を正確に書かせ更に全文書寫、又は適宜書取をさせる。

文字の指導 新字讀替を中心に、文字を的確に指導し、ことばのおけいこ十五頁(二)によつて、カナヅカヒに注意させる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ十五頁(三)にある「からから」「思ふぞんぶん」「かと思ふと」

「そのたびに」の如き語句を用ひて短い文章を書かせ、それによつてことばの理解と發表の力を養ふ。

なほ適宜「鯉のぼり」「五月の節供等」に就いて、話し方や綴り方をやらせる。

注意すべきことは文字語句語法等

アクセント

あめ(雨)——アメ あめ(飴)——アメ

はれて(晴)——ハレテ はれて(腫)——ハレテ

なると(鳴)——ナルト なると(生)——ナルト

はら(腹)——ハリ はら(原)——ハラ

文字

新字——鯉、矢車、尾オ

讀替——先、地シ

語句語法

「矢車がからから」となると「さをつけるかと思ふ」と等の接續的助詞によつて連ねられた語法に注意させる。

備考

連絡

ヨイコドモ下「五月ノセツク」と密接な連絡のもとに取扱ふ。

(以上四月)

六 牛わか丸

教材の趣旨

牛若丸の傳説を主題とした教材で、鯉のぼりの發展である。

牛若丸が京都の五條の橋の上で辨慶と戦ひ、その結果辨慶が牛若丸の家來となつたといふことは、義經記や辨慶物語に始り、謡曲その他の文學を賑はした有名な傳説であるが、特に九百九十九本の刀を取つて千本目に失敗したといふいはゆる九十九傳説の形式や、一寸法師その他のあらゆる童話に見る、小さい者が大きい者に勝つ形式を具備してゐる點で、この期の兒童に對する童話として好當のものである。

強さうな辨慶が負けて子どものやうな牛若丸が勝つたことは、義經といふ歴史的英雄の偉大なことを物語るものであるが、といつて、それをあまりに英雄化して取扱ふことは、この時期の兒童に適切でない。

この時期の兒童は、まだ自己の環境から外へ出ようとしないのであつて、彼等の相手は自分の友だち、兩親をぢさんをばさんの範圍を出ず、お話の中の人物でも、桃太郎とか一寸法師とか浦島太郎とかさういふ類の延長であるべきである。牛若丸もかうした兒童の心理に即して、どこまでも童話の主人公として取扱ふべきであつて、偉大な英雄として取扱ふべきでない。

文章

教材は、五條の橋に於ける思ひがけない邂逅から戦鬪への發展が劇的に表現されてゐる。随つて文章は非常に具體的であり、活動的であつて、兒童にとつて感興の深いものであるが、一面叙述に精粗曲折があることに留意し、指導上の工夫をなすことが大切である。

取扱の要點

読むこと 發音を正しく指導する。物語であり殊に劇的な表現であることに留意し、その氣持を讀みの上にあらはすことによつて、文章の意味感情をとらへさせる。

やうにすることが大切である。

文字語句を指導し、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀み、確實にする。
話すこと 挿畫(掛圖)文章等を中心として左の如き間によつて話合をさせる。

「月のよい晩に牛若丸はどうしてゐましたか。」

「五條の橋はどこにあるか知つてゐますか。」

「待てといつたのはどんな男でしたか。」

「その時牛若丸はどうしましたか。」

「べんけいはどういひましたか。」

「べんけいがなぎなたをふりまはして切つてかかると牛若丸はどうしましたか。」

「それからどうなりましたか。」

「べんけいがへとへにつかれた時牛若丸はどうしましたか。」

「べんけいはおしまひにどうなりましたか。」

ことばのおけいこ十六頁(一)によつて對話を讀ませ更に兒童を指名して對話を劇的に話させる。

書くこと ことばのおけいこ十六頁(二)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があ

れば適當に書取をさせる。

文字の指導 新字を中心として文字の指導をなし、ことばのおけいこ十七頁(三)によつてカナヅカヒに留意させる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ十八頁(四)の にことばを記入させ、語句の意味を確實にさせる。

注意すべきことば 文字 語句語法等

矯正すべき訛音方言

よい——「エイ」「エー」「ヨカ」などの訛音方言を正す。

待てといふもの——「と」を脱落する地方では待ていふものとなる傾向がある。注意を要する。

だれだ べんけいだ 千本だ——「ダレジャ」「ベンケイジャ」「千本ジャ」の如き方言を正す。
らんかん——「ランカン」の如き訛音を矯正する。

文字

新字——待て 用、千、百、取つた 切つて 右、左

語句語法

「ふえを吹きながら」「五でうの橋に來ますと」「見ると」「上を切ると」「右を切ると」の如き接續的

助詞が多く用ひられ、これを受けて下の叙述は現在形になつてゐる。いはゆる歴史的現在に属するもので、そこに叙述の躍如性があることに注意して取扱ふがよい。

備考

連絡

『ヨイコドモ』下「五月ノセック」よみかた三「鯉のぼり」の發展として取扱に考慮する。

七 ささ舟

教材の趣旨

自然の觀察では四月の末から五月にかけて、「春の野」や「五月の島」を觀察させる。この「ささ舟」と次の「蛙」は、それらと聯關して、「春の小川」に遊ぶ兒童の生活を表現し、「一は小川や田園にそろそろ鳴き出す蛙に關する物語を掲げた。

本教材はささ舟の製作から、それを競争させる遊戲を主題としたも

ので、兄弟が仲よく遊ぶ中に軽い意味の工作があり、競争にからむスポーツ精神もあらはされ、しかもそれら全體を春のやはらかな自然が快く包んでゐる。もとより未分化的な兒童生活の表現であるから、かうした要素を分析し強調すべきでなく、全文を読むことによつて感動せしめ、反省もさせることが大切である。

文章

四人の兄弟が、春の小川のほとりで仲よく遊ぶ生活の表現である。

太郎は卷二以降おなじみの名前、勇正男と同じく教科書中の主人公であり、彼等の級友である。次郎三郎はその弟、みよ子は姉で、みよ子は太郎より二つくらゐ年上と見るがよからう。

春の日があたりたかく野原の草を照らし、小川の水がたのしさうに流れ、小鳥が木の上で歌を歌つてゐる。自然は兒童の心情と相映じて頗る主體的にあらはされてゐる。蝶が三郎の舟に止り、三郎の舟が一着となるあたり決して客觀的な事實として描かれたのではなく、かうもあ

りたいと思ふ子どもらしい主観のあらはれである。

子どももまた兄は兄らしく、姉は姉らしく、弟は弟らしく活動してゐる。殊にささ舟の競争を中心としての活動で、そこにはいはゆるスポーツ精神もからまつて、三郎の勝利に兄たちは負けをしみをいはいで萬歳を唱へてゐる。しかしかうした倫理性は、何等兒童の自然を歪めてゐないのであつて、あたかも春の自然がかうもありたいやうに展開してゐる中に、子どもも亦かうもありたいやうに活動してゐるのである。

取扱の要點

読むこと 發音を正しく指導する。文は對話によつて展開する劇的な表現であるから、前課とはは同様の氣持を讀みの上にあらはすことによつて、文の意味感情をとらへさせる。

文字語句を指導し讀むこと 話すこと 書くこと 相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 挿畫掛圖を中心し、左の如き話をさせる。

「太郎さんのきやうだいは何人ゐますか。」

「その名まへは何といひますか。」

「ささ舟のきやうさうをさせようといつたのはだれですか。」

「だれがしんばんをしましたか。」

「てふてふはだれの舟にとまりましたか。」

「着になつたのはだれの舟でしたか。」

「だれがばんざいといひましたか。」

「自分たちがまけたのに、太郎さんたちはなせばんざいといひましたか。」

「みよ子さんはどういひましたか。」

「あなたがたはささ舟を作つてきやうさうをさせたことがありますか。」

「ささ舟はどういふ風に作りますか。」

ことばのおけいこ二十九頁(一)によつて對話を讀ませ、更に兒童を四人づつ指名して劇的に讀ませる。

書くこと ことばのおけいこ二十頁(二)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書取をさせる。

文字の指導 新字讀替等を中心として文字の指導をする。

注意すべきことは文字 語句語法等

アクセント

はし橋——ハシ はし箸——ハシ はし端——ハシ
 「ハシ」を複合する場合には次のやうになる。

ハシ(橋)ハシ(箸)ハシ(端)

矯正すべき訛音方言

春の日——「日」を「シ」又は「ヒ」「フ」と發音する地方では矯正する。

あたたかく——東京方言では「アツタカイ」といふことが多い。ここでは正しく發音させる。

「ヌクイ」「ヌクトイ」など方言が多い。

木の上——「キ」と發音する地方では矯正する。

歌つてゐます——「ウトータイマス」といはいやうに注意をする。

ささの葉——「葉」を「ハ」と發音する地方では矯正する。

させよう——「サショ」と訛る地方では矯正する。

しんばんをしてください——「クダサイ」には地方的に種々の方言がある。標準語を用ひるやうに指導する。

てふてふ——東京では「チョーチョー」といふのが普通で、韻文又は對話の場合には許容し得る。

もうちきだ——「ジキジャ」と訛る地方では矯正する。

のつたから——「から」を「サカイ」「ヨツテ」「キニ」「ケン」など種々の方言がある。矯正すべきである。

文字

新字——流れて葉作り岸止つて近づき

讀替——小川(オガワ)三郎(サブロー)

語句語法

「野原の草をてらしてゐます」だのしやうに流れて行きます。歌を歌つてゐます。流れて行きます。走つて行きます。橋へ近づきます。の如き現在の叙述は主として動作の進行性をあらはすもので他の瞬間的活動が完了形で叙述されてゐるのと互に交錯してゐるのに注意を要する。國語の語法はかの西洋文法のテンスの制約に一致するものではないことに注意して、この文章を考へることが大切である。

備考

連絡

ヨイコドモ下、カミノ舟の序として取扱に考慮する。

よみかた三「らくかさん」の發展として取扱に考慮する。

八 蛙

教材の趣旨

イソップの話を童話的にあらはした教材である。これを原話に比較すると、内容表現ともに相違するものがあり、そこにまた教育的な留意があることを知るべきである。

原話は、元來大人に讀ませる寓話であるから、文章は簡潔であり寓意を強く利かせるやうにできてゐる。しかしこの教材は、蛙の動作なり對話なりを具體的に表現し、そのため文章も長くなつてゐる。活動的具體的といふことは、童話に缺くべからざる要件であつて、かくして、いはば大人の讀む寓話を兒童の讀む童話に書きかへたわけである。

次に、話の内容にも幾分の變更が加へてある。原話では、最初數匹の

子蛙の中一匹が牛に踏み殺されることになつてゐるが、數匹を一匹にし、牛に踏み殺されることは一切省略した。小さい者に味方する兒童の心情に對して、子蛙の死は殘酷だからである。更に原話の母蛙が、近所の大蛙に代へてあるが、これはこの身の程を知らぬ愚を演ずべき役者を、子蛙の母であらせたくないからである。よし話は蛙のことであつても、いやしくも母と名のつく以上、兒童は全幅の信頼と愛とを持つのであつて、讀む兒童の心情を考慮においた變更であることに注意すべきである。

最後に、大蛙の死は殘酷だといふやうに考へる人もあるやうであるが、しかしそれは敢へて穿つべきことでない。元來この愚を演ずべき役者としての大蛙は、最初から終りまで笑はるべき役を引受けてゐるのであつて、その失敗は殆ど同情に値しないからである。いはんや本教材は、ただ「おなががやぶれてしまひました」とあるだけで、死んだとは書いてない。それを氣にするやうな兒童には、なに、おなががやぶれて

文章

もすぐなほるでせう」くらゐに軽く受流すがよい。

對話を中心として、頗る劇的に表現されてゐる。しかもその對話には、子蛙なり大蛙なりの性情や態度があらはれてをり、全體として感興の深い文章である。随つて原話の寓意は著しく内面に潜み、その力が弱いものになつてゐるが、それが却つてこの時期の兒童の心情には適切といへる。

文章の興味として特に注意すべきものは全文にみなざる滑稽味である。牛に驚いて「大きな大きな水」の水をのみに來ましたよと報告した子蛙の狼狽ぶりが既に滑稽であるが、それを聞いた大蛙が「その大きなものは、わたしくらゐもあつたかね」といふに至つては殆ど噴飯に値する。この愚かな自信を破摧しようとする子蛙、それを遂に悟り得ない大蛙——兩者の言動が交錯進展して、ふうせん玉のやうにふくれるおなかとともに滑稽も高まるのである。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく讀ませる。説話で劇的に表現され、又滑稽味を有する文であることに留意して、讀みの指導をすることが大切である。

讀むこと 話すこと 書くこと 相俟つて文章の意味感情をとらへさせ讀みを確實にする。

話すこと 文章や挿畫(掛圖)に就いて適宜話合をさせる。

ことばのおけいこ 二十頁(一)によつて對話を讀ませ、更に兒童二名づつを指名して劇的に對話させる。抑揚身振等を適宜に行はせて、この教材の滑稽味を會得させる。なほこの教材が持つ寓意に就いても話合をさせる。兒童には最初から寓意をきめてしまはずに兒童の話合を生かすやうに導く。

書くこと ことばのおけいこ 二十一頁(二)によつて文字を正確に書かせ、なほ時間に餘裕があれば適當に書取をさせる。

文字の指導 新字を中心として指導し、ことばのおけいこ 二十二頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。

注意すべきことは文字 語句 語法等

矯正すべき訛音方言

蛙——方言の多いことばであることに注意して指導する。

そんな——「ソナイナ」「ソガイナ」「ソゲナ」「ソギン」等の方言を矯正する。

そんなものでは——「では」「ではを」「ジャ」といふのは話しことばとして或程度許容し得る。

どんなに——「ドナイニ」「ドガイニ」「ドゲニ」「ドゲン」「ドギン」等の方言を矯正する。

やぶれて——東京方言では「ヤブケテ」といふことが多い。矯正すべきである。

文字

新字——蛙、遊んで、聞いて、答へ、吸ひこんで

語句語法

「どうして」どうして「今まで見たこともないほど」「どんなに……ふくらましても」「こんどこそと」「まるでふうせん玉のやうに」等の副詞的修飾語「大きいのがじまんの」の形容詞的修飾語等に注意する。

備考

連絡

ヨイコドモ下「ヤナギニ蛙」の序として取扱に考慮する。

自然の観察三「春の野」「五月の鳥」の發展として取扱に考慮する。

九 軍かん

教材の趣旨

春の小川の「ささ舟」や「蛙」の話から發展して海上に浮かぶ軍艦を主題とする教材に移る。

飛行機や軍艦や戦車や、何れも兒童の夢中になつて喜ぶものである。かうした興味を手がかりに、軍艦のお話によつてその認識を深め、兒童相應に海國日本の國防精神を喚起しようとするものである。

本教材では軍艦の種類とその性能の一端が述べられてゐる。こゝで注意すべきことは、専門的にいへば戦艦巡洋艦航空母艦は軍艦であるが、驅逐艦潜水艦は軍艦でないのである。そこで本教材にも春雄さんは、せんかんや、じゅんやうかんや、くちくかんや、せんすゐかんなどのことをよく知つてゐます。

と書いてあるが決して

軍艦に戦艦や巡洋艦や驅逐艦や潜水艦などがあることを知つてゐます。

と書いてないのである。しかしこの期の兒童に對し、かうした専門的な區別を知らせることは適當でない。既に題を「軍かん」としたのは、これらをすべて軍艦として取扱つた形で、強ひてこの區別に拘泥すれば「海軍の船」とでもせざるを得ない。しかし、それではあまりにも兒童から離れた抽象概念に陥つてしまふであらう。

文章

繪本や寫眞で軍艦のことを知つてゐる兒童はあらうが、實物を見たものは殆どないと思はれる。そこで、本教材は軍艦の實見記でなく、どこまでもお話としての表現になつてゐる。そのお話も立てつづけに述べられるのでなく、對話の形式をかりてゐるのであるが、在來の形はそれを父や叔父に語らせるのが普通で、本教材のやうに、子ども自身に

語らせるのは新しい行き方である。父や叔父などに語らせるのは、ややもすると讀む兒童をして受身の態度にならせ、不自然に知識を注入する結果に陥る。本教材のやうに子ども自身に語らせ、讀む兒童をして書中の子どもに共鳴共感させることは、この弊を救ふことになるであらう。

人物は、今までに出たことのない春雄であるが、これも勇正男の級友の一人として登場したもので、書中の人物の擴充である。ただをぢさんを海軍の軍人に持ち、あつばれ小さな軍艦通としてあらはれるやや變り種の子どもで、對話にもさうした口吻を汲みとることができる。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導する。特にこの教材には、ガ行濁音とガ行鼻濁音が交錯してあらはれる。對話が主になつた教材ではあるが、それが劇的意義を持つものでなく、専ら兒童にわかりやすく説明するために用ひられた對話であることに留意し、意味を明瞭確實に讀みとらせることが大切である。讀むこと 話すこと 書

くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 例へば次のやうな問によつて話合をさせ、兒童にやや困難な術語の使用になれさせ、その意味を考へさせ、又軍艦の性能に就いて簡明に理解させる。

「戦艦はどんな軍艦ですか。」

「巡洋艦はどんな軍艦ですか。」

「驅逐艦はどんな船ですか。」

「潜水艦はどんな船ですか。」

「航空母艦はどんな軍艦ですか。」

挿畫(掛圖)と文章と相俟つて話合をさせる。挿畫は三十三頁が戦艦、三十四頁が巡洋艦、三十五頁上が驅逐艦、下が潜水艦、三十六頁が航空母艦で、船體の大きさは大體比率的にあらはされてゐるから、畫によつてその大きさを併せ考へさせる。なほ軍艦の實物の大きさを想像させるためには、校舎橋道等の長さによつて考へさせるがよい。

書くこと ことばのおけいこ二十三頁(一)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書取をさせる。

文字の指導 新字讀替を中心として文字の指導をなし、ことばのおけいこ二十五頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ二十四頁(二)の畫をなぞらせ、適當に色をぬらせて、それぞれ船の種類に就いて話合をさせる。

ことばのおけいこ二十五頁(四)の[]に適當なことばを記入させ、そのことばの意味を明確にする。又二十六頁(五)の「はばしら」「軍かんき」「えんとつ」「いかり」等の語を用ひて、それぞれ短い文を作らせ、ことばの擴充をする。

注意すべきことば文字語句語法等

アクセント

うみ(海)——ウミ うみ(腰)——ウミ

矯正すべき訛音方言

系——「エ」と長く發音する地方では注意して矯正する。

大きくて——東京方言では、「オーキクッテ」と訛る傾向がある。

ゆくわいな——地方により「クッ」を發音し得るところもあるが、「カ」を標準とする。

いいえ——方言の多いことばである。「はい」「いいえ」をはつきり言ひ得るやうに訓練する

上からも大切なことばである。
 小さくて かるくて——東京方言で「チーサクッテ」「チツチャクテ」「カルクッテ」と訛る傾向がある。
 せんかん せんすみかん せかい中——「を」を「シ」で訛る地方では「を」を正しく明瞭に發音するやうに指導する。

文字

新字——軍かん 春雄(オ) 知つて お城 大砲(ホー) 形 魚(ウオ)
 讀替——大すき 海軍 軍人 大砲

語句語法

「を」さんにもらつたえを見たりを「を」さんのお話を聞いたりして——二つ以上のことを述べて、これを「だり」で連ねて行く語法の指導をする。
 「じゆんやうかんはゆくわいな軍かんですよせんかんよりもずつと早く走れて形がすつきりしてゐて——逆叙的な語法であることに注意し、逆叙による輕妙な味を感得させる。
 「がつしりした」どしどしうちます「小さいくせに」やつつけます——いづれもややくだけたことばづかひであるがそれだけに一種の力強さとの確さがあることに注意して指導する。

備考

連絡

よみかた三「さ」さ舟の發展として取扱に考慮する。
 うたのほん下「軍かん」エノホン三「海のせんさう」軍かんと連絡して取扱に考慮する。

十 お話

教材の趣旨

前課軍かんから更に發展した教材である。手旗信號燈火信號電信等の通信方法を特に陸海軍の軍事に結んで具象化し、しかもそれが畢竟するところわれわれの日常に用ひる、ことば(お話)の延長であることを示唆するもので、最後に最も原始的な赤ん坊のことばにをさまつて行く形になつてゐる。手旗信號の使用はなにも水兵に限つたことではなく、燈火信號や電信の使用も、航空母艦と電信隊に限つたことではない。又逆に航空母艦が燈火信號だけを使用するものでもなければ、電

信隊が電信だけを使用するものでもない。寧ろさうした通信法を具象化して水兵と結び、航空母艦と結び、電信隊と結んだに過ぎない。

現代の通信法は實に複雑であるから、この教材の如き扱ひ方如何によつては到底この期の兒童に理解し得ないものになる。要は表現に即して、できるだけ簡明に具體的に指導し、特に國語教材として大切な「お話」の意義に重點をおいて取扱ふべきである。

文章

大體七五八七調の韻文であるが、時にそれを破つた部分もある。しかし韻律は全體を通じて變りがない。

或る一つのことを對象としてあらはした詩でなく、水兵の手旗信號、航空母艦の燈火信號、電信隊の電信、赤ん坊のことば——この四つものすべて「お話」であるとしてあらはしたところに、この詩の個性があり、表現上の妙味も畢竟そこにある。即ち「ばたばた」「ぴかぴか」「かちかち」「ああああ」の擬態語擬聲語によつて、各種の通信法、赤ん坊のことば

が簡明に具象化され、しかもそれらが各聯に於いて「お話しします」に結ばれて行くのであつて、そこにこの詩の統一感が顯著に感得される。

取扱の要點

讀むこと 韻文であるから發音を正しく指導するとともに、讀みの上に韻律をあらはすことが大切である。齊讀の際などには拍子を取つて讀ませるがよい。

讀むこと 話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 例へば左の如き間によつて話合をさせる。

「私たちは毎日お話をしますね。近いところでのお話はすぐ聞えますが、少し離れたところではどうしたらよいでせう。」

「少し離れたところへ聞えるやうにするには、メガホンを使ふでせう。もつと遠く離れたらどうですか。」

「船で行く人を見送つたり、汽車で行く人を見送つたりして、もうお話が聞えなくなつた時にはどうしますか。」

「その時ハンケチや帽子を振りますね。あれで、何とお話してゐるのですね。」
かうした間から進んで、設問又は適當な方法によつて大體次のやうな話をする。

船や汽車で行く人に、ハンケチや帽子を振つて私たちは「さやうなら、ごきげんよう」とお話してゐるのです。

海軍の水兵さんは、軍艦の高いところへ上つて白い旗と赤い旗をばたばた振りながら、他の軍艦の人と「今日は」「よいお天気ですね」「さやうなら」などお話ができるのです。

ところで夜になると旗が見えません。旗の代りに何を使つたらよいでせうか。電燈を使へばいいでせう。電燈をつけたら消したりすると「びかびかびかびか」光りますね。長くつづいて光つたり、短くきれぎれに光つたりすると、それでお話ができるのです。航空母艦では、かういふ合圖をしながら空の飛行機とお話をするのです。

しかし、もつと遠くなつてお互に見えないところになると、もう旗や電燈ではお話ができません。さういふ時、何を使つたらよいでせう。私たちは電話でお話をします。電信でもお話ができます。電信隊の兵隊さんは戦争の時電話や電信を、あつちこつちとかけて、すぐお話のできるやうにする兵隊さんです。電話はこちらでお話をすれば、すぐ向かふへそのお話が聞えますね。電信ですと、こ

ちらで「かちかち」と叩きます。すると向かふで「かちかち」と響きます。「かちかち、かちかち」といろいろな打方でお話ができるのです。

ところで、あなたの方のおうちの赤ちやんはどういつてお話しますか。「ああ、ああ」といふでせう。あれは赤ちやんのお話ですよ。あなた方が聞いても、それがよくわからないかも知れませんが、おかあさんがお聞きになると、あの「ああ、ああ」の言ひ方で、「おつぱい」がほしい「外へつれて行つて頂戴」といつてゐることが、ちやんとおわかりになるのです。

さあ、そこで、水兵さんの旗ふりも、航空母艦の電燈の「びかびか」も、電信隊の兵隊さんの「かちかち」も、赤ちやんの「ああ、ああ」も、みんな「お話をしてゐるのだ」といふことがわかつたでせう。

書くこと　ことばのおけいこ二十六頁によつて文字を正確に書かせ又書取もしくは全文を書寫させる。

文字の指導　新字讀替の文字を中心として指導する。

ことばの仕事　「ばたばた」「びかびか」「かちかち」は擬態語であるが、この教材では重要な役割を持つたことばであることに留意し、あらかじめ旗懷中電燈等を用意して

おいて實際にやつてみせ、又やらせてみるがよい。勿論本式の信號に拘泥する必要はない。「かちかち」は指で机を叩いてもよからう。さういふことから、信號を工夫するやうに示唆するがよい。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

矯正すべき訛音方言

水兵——「スイフエ」といふ地方では、「フ」音の矯正を徹底させる。

お話——「オハナス」に近く發音する地方では矯正する。

てんとう てんしんたい——「レントー」「レンシンタイ」などと發音しないやうに注意する。
かちかち——「カツカツ」に近い發音をする地方では矯正する。

文字

新字——旗

讀替——水スイ兵

備考

連絡

ヨミカタニ「ラジオノコトバ」、よみかた三「軍かんの發展として取扱に考慮する。

うたのほん下「軍かん、エノホン三「海のせんさう「軍かん」と連絡して取扱に考慮する。

參考資料

「手旗信號法」ニヨル

名 稱	形 象	作 爲	法
第一原劃	十	両手ヲ左右水平ニ出ス	
第二原劃	十	左手ヲ垂レ右手ヲ垂直ニ據ク 併シテ又之ヲ二回ラ 廻シテ三回ヲ廻シ 左右手交互ニ出ス	
第三原劃	ノ	左手ヲ左四十五度 上ニ至ラ右四十五 度下ニ出ス	
第六原劃	フ	右手ヲ右方水平ニ 左手ヲ頭上ヨリ右 方水平ニ出ス	
第九原劃	ナ	右手ヲ右方水平ニ 左手ヲ右手ノ下約 三十五度下ニ出ス	

手旗信號をするときには右手に赤旗を持ち、左手に白旗を持つ。ヨミカタの插畫の水兵は今第二原劃を示してゐるところである。即ち縦棒をあらはし又は長音をあらはす。原劃は零から第一、第二、第三と始まり、第十四原劃まである。

これらの原劃を組合はして文字をあらはす。

アは、第九原劃と第三原劃

イは、第三原劃と第二原劃

ウは、第六原劃と第九原劃

エは、第一原劃と第二原劃と第一原劃

オは、第一原劃と第二原劃と第三原劃

劃。

(以上 五月)

十一 むしば

教材の趣旨

國民體位の向上、保健衛生に關しては、國家總力戰の立場から、大いにこれが實績をあげようとつとめてゐる今日、青少年の養護鍛鍊といふことは特に意を用ひなければならぬところである。教材が、この期の兒童の齒の衛生に就いて説いてゐる所以も亦ここにある。即ちこの頃の兒童はすでに六歳臼齒が生えてゐるのであつて、乳齒にむし齒があれば、永久齒たる六歳臼齒にも影響して、むし齒になるおそれもあり、齒並が不揃になることがある。それでこの頃の兒童には、齒のことや、齒に關する衛生の正しい知識をさづけることが肝要である。ただし生理衛生の觀念としてさづけるのではなく、兒童の生活體驗をとほして、生きた知識として感得させるのである。

文章

二二六

文章は花子を中心として、母親や歯科醫の對話によつて、おのづから齒のことに就いて兒童が理解し得るやうな仕組にされてゐる。兒童たちは、ややもすると、齒の治療を受けることをこはがつたり、いやがつたりするが、「おいしやさまは、すぐ見てくださいました」とか、「おくわしをたべすぎましたね」とかいふ文章によつて、明かるい氣持や、冗談などをあらはして、齒の手當や治療をうけることをいやがらせないやうに考慮を拂つた。初めは、「はが痛いので、ひとばん中苦しみました」とか、朝になつても、まだ痛いのがなほりません」といふやうに、多少暗くて重い感じはするが、手當をしてもらつてから、痛いのが少しなほつたやうに思ひました」となり、もうはの痛みを忘れてにこにこしてゐました」となつて、「おいしやさまのおうちを出た時、花子さんは、もうはの痛みを忘れてにこにこしてゐました」とすつかり愉快になり、子どもらしい安心さへ表現されてゐる。

このやうに文章は、つねに希望をもち、ほがらかさや明かるさを示すやうに工夫され、兒童の主觀に即して、かうもありたいと思ふやうに表現されてゐる。

取扱の要點

讀むこと 地の文と對話の文と交つた文章であるから、その氣持を讀みの上にあらはすやうに指導する。發音を正し、語句に就いて指導し、讀むこと、話すこと、書くことと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫掛圖等を中心として、兒童の體驗と結んで話をさせる。例へば、齒痛で困つたことがあるかどうか、その時にどうしたか、今でもむし齒があるか、何本あるか、歯科醫に行つたことがあるか、朝齒をみがくか、夜もみがくか、このやうなことを主題にして話させる。さうして、めいめいが齒を大切にすべきこととよく手入をすることなどに氣づかせるやうに話を進める。

文字の指導 新字讀替を中心として、文字の指導をなし、ことばのおけいこ二十八頁(二)

二二七

によつてカナヅカヒに注意させる。

注意すべきことは文字語句語法等

アクセント

は齒——ハ　　は葉——ハ

あさ朝——アサ　　あさ座——アサ

矯正すべき訛音方言

痛いので——「イテノデ」の如き訛音を矯正する。

むしばができてゐる——「デキトル」の如き訛音を矯正する。

といつて——「ドユーテ」といはいやうに指導する。

洗つたり——「アロータリ」といはいやうに指導する。

みがくといひのですがね——「の」を落して「イデス」といはいやうにする。

文字

新字——痛い　苦しみ　洗つたり　使ふ　毎朝　夜　忘れて

讀替——生えかはる　一生(シヨ)

語句語法

次の如き敬語に注意する。

見てくださいました

つけたりしてくださいました

おつしやいました

お聞きになりました

次の如きたりの用法に注意する。

くすりで洗つたりくすりをつけたりしてくださいました。

備考

連絡

自然の觀察三むし齒と連絡して取扱に考慮する。

なほヨイコドモ上、タベモノ、ヨイコドモ下、タンジャウ日等と教材上の連絡がある。

参考資料

六歳臼齒——人の齒には乳齒と永久齒とがあつて、乳齒は二十本あり永久齒は三十二本である。乳齒が生え揃つてからある一定の時期になると、永久齒と乳齒とが生えかはるのであるが永久齒で最も早く生えるのは上顎と下顎の第一大臼齒で、その生えるのが六七歳頃であるので、この上顎と下顎の第二大臼齒を六歳臼齒といふ。この前の方のむしばと云ふのは乳齒であり、おくの方のはと云ふのが六歳臼齒をさしてゐる。

この六歳臼歯は永久歯中最も早く生えると同時に、咀嚼力が大で永久歯が全部生え揃つてゐる時この歯が一本喪失すれば二〇%左右二本喪失すれば四〇%咀嚼率を減ずるといはれるが二年生の頃には乳歯と永久歯が生え代りかけてゐるのでこの頃の咀嚼は六歳臼歯に大いに頼らねばならない。又六歳臼歯は咬み合はせの大黒柱となる重要な位置にあるので顎の發育咬み合はせから云つてもまことに重要な歯である。

ところがこの歯はむし歯にかかる率がまことに多く二年生で既に半数近くがむし歯にかかつてゐるといはれてゐる。

歯の中むし歯になる場所は多くは咬み合はせ面の溝か歯と歯の隣り合つたところであつてこのところに食べかす特に甘い物などが附着しそれが夜間口中の細菌のため酸にかへられ歯質を溶かしむし歯を作るのである。

随つて夜ねる時食べかすのつき易い歯の咬み合はせ面や隣り合つたところを磨く必要がある。

しかし一旦むし歯になつてしまへばもはや自身では治し得ないのであるからできるだけ早く歯科醫に行き充填してもらふことが必要である。

十二 ねずみのちゑ

教材の趣旨

出所はイソップ物語である。机上の空論は一見魅力があつても結局實行の伴はないことを諷する寓話である。

ヨイコードモ下「カミノ舟」は、正男の工夫によつてりつぱに作り上げられた。ところでこの子ねずみのいはゆるよい工夫はどうであるか、それを考へさせるところにこの教材の意義があり、そこにヨイコードモと密接な關係がある。

紙の船を水上に浮かべることも工夫努力がなければ子ねずみのちゑと同じやうに一片の空想に終つてしまふかも知れない。實踐の努力があつてこそ工夫といへるのである。子ねずみの工夫に至つてはただ一片の考へに過ぎず空想に過ぎない。何等の努力もなく實踐性もないものを彼はよい工夫がありますといったところに失敗がある。しかし、かうした寓意はこの頃の兒童に最初から分るものではない。あるひは鼠たちのあさはかな智慧を笑つたお話だといふものもあら

う。あるひは猫におそはれながらそれをどうすることもできない鼠たちがかはいさうだといふ兒童もあらう。さうした話合を適當に導いて、正しく理解させることが大切である。この期の兒童はまだ主客未分化の時期であるから、彼等の持つ想像力を豊かに伸ばすことが大切である。しかし一面には、日常の生活に於ける實行力を養ふことが肝要であり、本教材は、さうした反省を與へる契機となるであらう。

文章

劇的に表現されてをり、對話が主で、叙述はただそれをつなぐ役を勤めてゐる。元來寓話であるから、對話も叙述も極めて簡潔であり、それだけに寓意は極めてはつきりと出てゐる。これを前出の蛙の文、又はことばのおけいこ二十九頁の文に比較すれば、自らうなづかれるものがあるであらう。しかも兒童に對する興味はむしろことばのおけいこのやうに對話風にあらはしたものに、あることはいふまでもない。

取扱の要點

讀むこと 短い文であるが、劇的に表現されてゐるから、それを讀みの上にあらはすやうに指導する。發音を正し、語句の指導をなし、讀むこと、話すこと、書くこと、相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章や挿畫掛圖に就いて適宜話合をさせる。ことにこの話の寓意に就いてもいろいろ考へさせ、發表させる。教材に即して、年よりの鼠のいつたこと、若い鼠のいつたことなどに就いて話合をさせる。

書くこと ことばのおけいこ二十八頁(一)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に、書寫又は書取をさせる。

文字の指導 新字讀替を中心として文字の指導をする。

ことばの仕事 ことばのおけいこ二十九頁(二)によつて對話を劇的に讀ませる。

注意すべきことば、文字、語句、語法等

矯正すべき訛音方言

取られない あるまい 若い 前——「ラレネー」「アルメー」「ワケー」「メー」などの訛音を矯正する。

なほ、あるまいを「ナカルマイ」といふ地方では矯正すべきである。
すず——「シジ」などといはぬやうに注意する。

文字

新字——若い 首 逃げる
讀替——年よりの

語句語法

次のやうな語句は多少兒童の生活から離れたことばであるから適當に文例を示して理解させるがよい。

「なんとかして」なるほど「それもよいが」だまつてしまひました

對話の中に常體と敬體と兩様あることに注意し、目上目下の關係を考へさせる。又常體を敬體になほさせてみることも大切であらう。

備考

連絡

ヨイコドモ下「カミノ舟」と連絡して取扱に考慮する。

十三、川

教材の趣旨

教材は川に就いて地理的理科的な理解を與へるとともに、川をとほして兒童の未知の世界への憧憬と求知心を誘ひつつ、一面兒童の生活を家の傳統に結びつけることを暗示してゐる。かうした物心一如の見方考へ方こそ眞の科學を生む所以であるといへる。

すでにヨミカタ二に於いて「山ノ上」「ユメ」「机」としかけ「汽車」などの教材が排列されてをり、その學習によつて兒童は生活に即しつつ次第に時間と空間との觀念が深められてきたのである。かかる時間的空間的連續發展は、なほよみかた三の「海」「子馬」にいたり、「自動車」「長い道」などに具象化されて、ゆくゆくは郷土の觀察へたどりつく方向を示すものである。

文章

文章は、正男が川を見てその發する源を思ひ、川の末を思つて遠き世界を心に想像し、川の水が日夜流れて涸れないことに不思議を感じたことに始る。

内省的であり思考工夫をする正男だけに、その不思議に就いてまづ兄にたづねてみた。兄は手短かに答へてくれたが、それだけでは十分理解ができなかつた。川は山と海とをつなぐ帶のやうなものだといふことはわかつたが、正男の疑問はなほ疑問として残つてゐる。雨が降るから川の水はなくならないといふが、お天氣のいい日も川の水は流れてゐるではないか。そこでこんどは、父にたづねてみる。父は、川の發する源のことや、川が海へ流れこむことなどに就いて、かなり詳しく話をしてくれた。

正男は川の經路に就いてひと通りわかつたが、經驗が乏しいだけに正男には具體的なものがつかめてゐない。父もそれを知つてゐて、お

まへも、いまにその山や海へ行つてみると、よくわかるだらうとつけ加へて教へてくれた。

ところで川の水のなくならないわけはまだ解けてゐない。そこでおしまひにそのことを祖父にたづねた。祖父はそのわけをかなりこまかに話してくれた。理科的な説明を一通りしてから、祖父は巧みな比喩をもちだした。それは家といふことであつた。昔から傳つて來て現在にいたり未來いつまでもつづいていく家の姿を川の流と結びあはせて、正男にわかるやうに説いた。

このやうに全文は、正男の疑問とその解答とによつて組立てられてをり、兄のことばと、父のことばと、祖父のことばと、それぞれ特色をもつて記述されてゐる。

なほ、ここで注意すべきは、正男の態度に就いてである。同じ質問を兄に聞き、父に聞き、祖父に聞くのは、一見さも兄を輕んじ、父を信じないやうに見えるが、これは同じことをくりかへして誰にでも聞くといふ

子どもの心理のあらはれだを見るべきである。理知的で考へ深い正男を、温かくつつんでゐる家庭風景もうかがはれ、理と情とが渾然と一つになつて表現された文章である。

取扱の要點

讀むこと かなり長文であり、しかも内容の深い教材であるから、何度も讀ませながら全體が大體三段になつてゐることを示唆し、兄のことは父のことは祖父のことはそれぞれの意味を考へさせる。さうして發音を正し、語句の指導をなし、讀むことと話すこと、書くことと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 川や山や海のことについての子どもの體驗を挿畫(掛圖)文章等と結んで話をさせる。

なほ、本課のやうな長い文章は、これをまとめるやうな話合も大切である。例へば、左の如き問によつて話をさせる。

「正男さんは川を見てどんなことを考へましたか。」

「正男さんの考へたことは、いくつありましたか。」

「にいさんは、なんといつて教へてくれましたか。」

「正男さんは、おとうさんになんといつてたづねましたか。」

「おとうさんは、それになんといつて答へましたか。」

「正男さんは、おちいさんになんたことをたづねましたか。」

「おちいさんは、正男さんになんといつて教へましたか。」

「川と家とは、どのやうなところが似てゐますか。」

書くこと ことばのおけいこ三十二頁(一)によつて、正確に文字を書かせ、時間に餘裕があれば書寫又は書取をさせる。兄のことは父のことは祖父のことはなどをぬき書させるのもよいであらう。

文字の指導 新字讀替を中心として文字を指導し、ことばのおけいこ三十三頁(二)によつてカナヅカヒに注意する。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

矯正すべき訛音方言

すくつたり——「スグータリ」といはいやうに指導する。

行くんだらう——「ユクノヤロ」「ユクンジャロ」などの方言を矯正する。

行くんだ——「イクノダ」を標準とするが、ここでは話しことばとして許容的に用ひた。廣い——「シロイ」といはいやうに指導する。

けれども——種々の方言がある。「クードモ」「クッドン」などと訛るのを矯正する。
「行くのだらう」なくならないのでせう「流れて来るのだが」「流れてなくならないのが」「つづいていくのと」——これらの「の」を脱落しないやうに注意する。

文字

新字——寒イニ 遠い(トイ) 谷 根
讀替——次

語句語法

敬語の使ひ方に注意する。目上目下の關係で對話が常體と敬體とに分れてゐることに注意させる。例へば、この中の父又は祖父のことばを敬體で話させてみる。なほ、おとうさん、おちいさんの叙述には敬語が使つてあるが、にいさんの叙述には敬語がつかつてない。これはこの位の年齢の差の兄弟は、大體同等と見なして敬語を略するのが自然だからである。生まれる——普通の文章ならば、生まれと中止形で重ねていくのであるが、話しことばでは終止形で重ねることに注意する。

備考

連絡

よみかた三、海の序として取扱に考慮する。

ヨミカタニ「ユメ」机とこしかけの發展として取扱に考慮する。

十四 一寸ばふし

教材の趣旨

お伽草子の一寸法師から取材したものである。一寸法師の活躍を簡明に、しかも如實にあらはし、物語の推移に興味を持たせつつ理解せしめ、自由奔放な空想の世界に遊ばせ、兒童の豊かな想像性を養はうとするものである。元來が小人説話であるから、その持つ諸謔性も見のがすべからざるものである。

教材は五節よりなり、一節ごとに挿畫をかがげ、文と繪との調和によつて、一寸法師の活動を二層具象化して、物語の讀解力を深めるものである。なほ前課「川」をうけ、それと關聯して、お碗の舟に乗つて川をのぼる一寸法師の物語を排列した。

文章

文章は五章に分れ、一寸法師の物語から五つの場面をとつて簡潔に表現し、これを連續的に展開させた。即ち第一は一寸法師の希望とその出發の様子を描き、第二は都に出て侍となりお姫さまのおともをして鬼と戦ふところ、第三は鬼の腹の中で立ちまはつてゐるところ、第四は鬼の體から地面へとびおりたところ最後はお姫さまが打出の小槌をふつたので、一寸法師がりつばな侍になるところである。

日本古來の繪卷物の形式をとり、文と繪とを組みあはせることによつて、物語を主體的に鮮明に表現した。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導し、元氣に話すやうな氣持を讀みの上にあらはさせる。文字語句の指導をなし讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 挿畫並びに文章に即して話合をさせる。

「打出の小槌」に就いて、いろいろ考へさせ、話させてみるのもおもしろからう。又お

もしろい小人の話に發展して話合をさせるのもよい。

書くこと ことばのおけいこ三十四頁(二)によつて文字を正確に練習させ、時間に餘裕があれば適當に書取をさせる。

文字の指導 新字を中心として文字の指導をなし、ことばのおけいこ三十五頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ三十四頁(一)の文をそれぞれ動作であらはさせる。

このほか「おには、一寸ばふしをつまんで、一口にのんでしまひました」「一寸ばふしは、おにのおなかの中を、針の刀でちぐりちぐりとつづきました」「あわてて逃げだしましたなどを動作化させるのもよい。このやうな動作によつて、本教材に滑稽味のあることを、兒童に感得させる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

アクセント

はな(鼻)——ハナ はな(花)——ハナ はな端——ハナ

矯正すべき訛音方言

針——「ハリ」の「リ」を明瞭に發音すること。

たべよう——「タビヨ」とならぬやうに注意する。

刀をぬいて——「カタナオメイデ」とならないやうに注意する。

つつきました——「ツツキマシタ」「ツツキマシタ」とならぬやうに注意する。

痛い痛い——「イターイター」の訛音を矯正する。

文字

新字——一寸ばふし（イッスンボーシ） 都 針 鼻 高く

語句語法

「都さむらひ」どのさま「けらい」おひめさま「たび」うち出の小づち等は古いことばで、児童の生活語にはないが、お話の中に生きてゐることはである。或程度の説明が必要であらう。

十五 つ ゆ

教材の趣旨

日本の四季のうつりかはりには外國には見られない趣があり、たのしさがあ、美しさがある。教材は、このうつりかはりの中で特色のあ

る梅雨をとりあげた。梅雨は儼陶しい季節であるが、田園生活には大切な時期であり、輝かしい夏にいたる序幕ともいふべき時期である。

この時期に就いて児童生活に即し、素朴な觀察をなさしめるとともに、田植の大切なことを知らしめ、自然と人生の關係を示唆し、且季節に對する愛着の念を養ふものである。

本課にひきつづき夏の點景として「金魚」があり、「火花」があり、「お祭」があり、「海」があつて、わが國の季節感が漸層的に高まつて行くやうに排列されてゐる。

ヨイコドモの「ヤナギニ蛙」は、本課と聯關して梅雨期に於ける一挿話として取扱ふがよい。

文章

梅雨期は、一般に暗くて憂鬱な氣分をかもしだすものとされてゐるが、本教材は、できるだけ明かるさをもたせ希望をあらはし、美しさをえらんで描いてある。

例へば「空が明かるくなり、かつと強い日がさして來ます」庭のあちさるの花がほんたうにきれい、です」梅の實が黄色くなりました」はれまに小川でどぎやうをすくひます」からりとした夏が來る」せみがなく、水遊びができる」海海早く海へ行きたいと思ひました」などの文は、いづれもさうした心持をもちこんだものである。

文章は、兒童が自分で書いたものではなく、太郎とその周圍のことを第三者が眺めて描いたのであるが、子どもの心情をつねに明かるくのばすやうに表現に工夫がしてある。

取扱の要領

讀むこと 季節に對する感じを味はひながら讀むやうに指導する。發音を正し、語句文字の指導をなし、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 梅雨期に於ける兒童各自の経験と結んで、挿畫・掛圖・文章等に就いて話合をさせる。理科その他であらかじめ觀察させ、それに就いて話させるがよい。例へば、左の如き問によつて話合をさせる。

「太郎さんの家の庭には、どんな花が咲いてゐますか。」

「太郎さんの家の庭で明かるく見えるものにどんなのがありますか。」

「田植といふのは、どんなことをするのですか。」

「雨のはれまに、太郎さんは何をしておそびますか。」

「つゆがあげると、どうなりませう。」

「太郎さんは夏と聞いて、なぜあんなに喜んだのでせう。」

書くこと ことばのおけいこ三十六頁(一)によつて文字を正確に練習させ、時間に餘裕があれば適當に書取をさせる。

文字の指導 新字・讀替を中心として文字の指導をなし、ことばのおけいこ三十七頁(二)によつてカナ・ヅカヒに注意させる。

注意すべきことは文字・語句・語法等

アクセント

つゆ(梅雨)——ツユ つゆ(露)——ツユ

矯正すべき訛音方言

いやだなあと思ひます——い、とを省く地方があるから注意をする。

つゆの雨がふるのて——のを省かないやうに注意する。つゆの、ゆを明瞭に發音させる。

文字

新字——強い 梅 實 黃色 田 苗ナエ 夏
讀替——二日 今年

語句語法

空が明かるくなり、かつと強い日がさして來ます——話しことばであれば、明かるくなつとなるのが普通であるが、ここは叙述の文としての形である。

せみがなく、水遊びができる——終止形をたたみかけた語法で、意味は連續してゐることに注意する。

「かつと」は「はれま」つゆがあける、からりとした等のことばの意味を注意して指導する。

備考

連絡

ヨイコドモ下「ヤナギニ蛙」と連絡して取扱ふ。

ヨイコドモ下「チヂサントラバサシ」とも田植に關して連絡がある。

よみかた三川「の發展として取扱に留意する。

自然の觀察三の「田植、うたのぼん下「雨ふり」と連絡して取扱に考慮する。

十六 金 魚

教材の趣旨

夏になつて子どもたちは野に山に川に海に出かけて、元氣に遊びまはる。子どもの周圍には虫が飛び草が茂り、魚がをどり、雲が湧く。教材は夏の情景にふさはしい金魚をとりあげ、それを主題として正男の生活斷片が描かれてある。

正男は、十二三歳になる姉といつしよに金魚を買ひに行つて、きれいな金魚をガラス鉢に入れて家にかへつて來る。家では、父も母もみんな金魚の美しさ、涼しさに見とれるのである。自然の觀察に於ける「私たちの研究」と聯關して金魚の形態や習性などを話し合ひ、そのかはいらしさを思はせ、家庭のたのしいありさまを味ははせ、夏の涼味を感得させる。

文章

一五〇

文章は二章からなつてゐて、一章は金魚屋の店さきで正男が金魚を買ひ、それを持ちかへることを書き、二章は家で金魚をみんなが眺めて、その美しさを味はひ、特に正男の熱心に金魚の動くところを眺める様子が、かなりこまかに表現されてゐる。

正男の生活文であるから、正男らしいところが随所にあらはれてゐる。例へば、金魚をえらぶとき、じつと金魚を見ました。どれもどれかはいくてきれいで」と書いてあるところや、おしまひの方で、金魚の動きをあまり熱心に見てゐるので、ねえさんに「正男さんは、金魚とにらめっこをしてゐるのね」と笑はれたりするのがそれである。

赤や赤白のぶちの金魚が泳いでゐるガラス鉢に緑色の藻がひろがるあたりや、父のことばなどに、夏らしい涼しさがあらはれてゐるのが、この文の一つの味はひである。

又文章の終りにいたつて、金魚がいろいろな泳ぎかたをしたり、外か

ら見るとさまざまな形になつて見えたりすることが、かなりこまかに描寫されてゐる。しかも、それが姉の諧謔的なことばによつてをさめられてゐるのもおもしろいところである。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導する。五人の人物があらはれ、それぞれの感じのこもつた對話をふくんでゐるから、それを生かして讀むやうに指導する。

文字語句の指導をなし、讀むこと、話すこと、書くこと、相俟つて讀み、確實にする。話すこと 兒童は、たいいてい金魚のことを知つてゐるから、金魚に就いての體驗を挿

畫掛圖文章等と結んで話をさせる。又劇的に讀ませる。例へば、左の如き問によつて話をさせる。

「正男さんは、だれと金魚を買ひに行きましたか。」

「なせ正男さんは、すぐ金魚をすくはなかつたのでせう。」

「どんな金魚をすくひましたか。」

「金魚屋さんは、ガラスばちの中に何を入れてくれましたか。」

「おかあさんは、金魚を見て何とおつしやいましたか。」

「おとうさんは何とおつしやいましたか。」

「金魚は、どのやうにしておよぎましたか。」

「ねえさんは何といひましたか。」

書くこと ことばのおけいこ三十八頁(二)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば對話をぬき書させ、又は適當に書取をさせる。

文字の指導 新字・讀替を中心として指導し、ことばのおけいこ三十九頁(三)によつてカナヅカヒに注意させる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ四十頁(四)にはとり大うさぎ牛馬すすめとんばに就いて、あらかじめ兒童によく觀察させておいて、どれか一つを文章に書かせる。あまりくはしいことを求めたり、正確なことを強ひないで、その特徴をあらはすやうにさせる。

ことばのおけいこ四十頁(五)の空欄に語をえらんで記入させる。即ち上欄の「くだものむし花遊びけしき」等に就いて、それぞれ夏にふさはしいものをその中で考へさせて記入させる。例へば「くだもの」ならいちじくびはいちごなどいふ類である。

注意すべきことば 文字 語句語法等

矯正すべき訛音方言

どれにしよう——「ドレニショ」といふ地方では矯正する。

赤いのを——「赤イガオ」「赤イナオ」「赤イソオ」「赤イトオ」などと方言的な言ひ方を矯正する。

持つてかへるよ——「かへるよ」を「ケールヨ」と訛らぬやうにする。

きれいな金魚——「キレイダ金魚」といはないやうに注意する。

文字

新字——金魚 買ひに 兩手 涼しさう 浮かんで 沈んだり(シズンダリ)

讀替——金魚

語句語法

次の如き敬語的語法に注意する。

すきなのおおすくひなさい。

早くおきめなさいよ。

これを少しあげませう。

だいを持つて來てくさいました。

おつしやいました。

「およぎぬけたり」「浮かんで行つたり」「沈んだり」「大きく見えたり」「ぼそ長くなつて見えたり」

などの「たりの用法」を注意する。

備考

連絡

自然の観察三「私たちの研究と連絡して取扱に考慮する。」

(以上 六月)

十七 花 火

教材の趣旨

前課にひき續き、夏の情趣の豊かなし、かも兒童の心に鮮明な印象を與へる花火をとりあげ、これを韻文のかたちとして教材にした。晝の暑さもやうやくをさまつた夜の空に時をおいて打ちあげられる花火は、見るからに美しく、涼しく、鮮やかで日本に於ける夏の夜の風景としてまさに代表的なものといつてよからう。瞬時にして空いつばいに開き、瞬時にして全く消え失せる花火のすがたは、散文の世界ではなく、やはり詩の世界にふさはしい。この韻文の表現をとほして、夏の夜に咲く花火のありさまを心に描かせ、日本の情味ゆたかな季節感を味はせようとするものである。

文章

韻文で二節から構成されてゐる。第一節と第二節とは、字脚がかならずしもそろつてゐないが七五調を基礎としたリズムがおのづから全體の調子を統一してゐる。それで二拍子に讀むことができる。

第一節は、非常に大きなしだれやなぎの花火を目のあたり見上げてゐる驚嘆であり、第二節は花火の光彩が刻々にかはりゆく様子がうたつてある。「ひろがつた」「ひろがつた」とくりかへしてあるところに、大きなしだれやなぎのひろがつたことが感ぜられ、「赤い星」「青い星」「金の星」と名詞どめにしてあるところに花火の華やかさと一瞬々々變つて行く光彩がまざまざと感得される。

取扱の要點

讀むこと 韻文であるから發音を正しく指導するとともに韻律を生かし讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 時局から花火らしい花火を見てゐる兒童は少いかもしれない。しかし夏の宵など子どもたちが線香花火に類する花火をあげて楽しむことは知つてゐる。

る。さうした體驗を挿畫掛圖文章等と結んで語合をさせ、空に大きくひろがる花火の情景を思はせるやうにする。

書くこと ことばのおけいこ四十一頁(一)によつて文字を正確に書かせ、なほ時間があれば全文を書寫させる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ四十一頁(二)によつて上欄の語句を下欄の□中に入して、左の如く文章にまとめさせる。

どんとなつた花火だきれいだ

しだれやなぎにとびつく蛙

花火が空いつばいにひろがつた

何十何百赤い星

も一どかはつて金の星

注意すべきことば 文字 語句 語法等

矯正すべき訛音方言

ひろがつた——「フロガッタ」などと訛らないやうにする。

「しだれやなぎ——」スングレヤナギなどと詠らないやうにする。

何十——「ナシズ」と詠らないやうにする。

文字

新字——星

語句語法

「どん」となつた花火だ、きれいだとたたみかけた叙述に、瞬間的な花火の動きがあらはれてゐる。「赤い星」「青い星」「金の星」と名詞句をたたみかけたところにも、刻々かはる色彩があらはされてゐる。

備考

連絡

うたのほん下「花火」と連絡して取扱ふ。

十八 お 祭

教材の趣旨

「金魚」を読み、「花火」を読んで、夏の季節的感情はこの「お祭」に至つて更に高まる。ヨイコードモの「ウヂガミサマ」への伏線として、特に夏祭がここにとりあげられたのである。

教材として天神様をえらんだのは、天神様が子どもたちに縁の深い神様であり、學問の神様として祀られ、日常生活に親しみが多いからである。

夏祭のたのしさに、ぎやかさを感じさせながら、兒童の生活に即した郷土に即して、敬神の念に培ふべきである。

文章

天神様のお祭の夜家を出る時のことから書きはじめ、町のありさまを描き、拜殿の前で拜んだことから、歸りにお土産を買つてもらつたこと、家についてからのことなどが、印象的にしかも簡潔にまとめられてゐる。

「梅ばちの紋」といふわづかのことで、具體的に天神様をあらはし、人

形を買つてもらつたことで、作者が女の子であることをあらはし、一郎の動作によつて、それがまだ幼い弟であることをあらはすとともに、作者が花子であることさへ間接的に知らせるやうな筆致である。もちろん文を書いたのは、お祭の後日であらう。しかも、當夜の氣持をありありと描くために、あたかもお祭の當夜にかいたやうなかたちに表示されてゐるのである。書き始めが現在形になつてゐるのも、そのためである。

取扱の要點

讀むこと 對話は挿入されてないが子どもらしい氣持の出た文であるから、さうした感情を讀みとらせるやうに指導する。
發音を正し、語句の指導をなし、讀むこと、話すこと、書くことと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 夏祭や縁日などに就いて兒童の體驗を話させ、又挿畫・掛圖・文章等に即して話合をさせる。例へば

「その日は、なんのお祭でしたか。」

「花子さんは、誰とお参りに行きましたか。」

「町はどのやうににぎやかでしたか。」

「はいでんの前に何がありましたか。」

「お参りをして、そのかへりには、何を買つてもらいましたか。」

「一郎さんは、いくつぐらゐの弟だと思ひますか。」

書くこと ことばのおけいこ四十二頁(二)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば書取をさせる。

文字の指導 新字・讀替を中心として文字を指導し、ことばのおけいこ四十三頁(三)によつてカナ・ツカヒに注意させる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ四十二頁(一)によつて、おかあさんも、私も、一郎も、いっしよに拜みましたを動作にあらはさせる。なほ、「おかあさんに手を引かれながら」「おじぎをしたり、小さい手をたたいたりしては、たいごをならしましたなども動作させるがよい。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

矯正すべき訛音方言

買つて——「コト」といはいやうにする。
うちへかへる——「ウチエケール」などと訛らないやうに注意する。

文字

新字——祭^{マツリ} 町^{チヨウ} 歩いて^{イッテ} 買^カつて お宮^{ミヤ} 拜^{イハス}み(オガミ)
讀替——今夜^{コンヤ} 天神^{テンシン} 人形^{ギョウジ}(ギョー)

語句語法

「天神さまはいでん、梅ばちのもん等の語句に就いては、話合その他の方法で適當に指導する。

備考

連絡

ヨイコドモ下^{シタ}、ウヂガミサマ^{秋祭の序として取扱に考慮する。}

よみかた三^{金魚}、花火^{花火にも季節的連絡がある。}

カズノホン三^{七月の雜題中の「線香花火」すまふ、エノホン三「すまふ」等とも連絡がある。}

十九 きりぎりす

教材の趣旨

夏期、児童にとつて、蟬取りや虫取りは、最も興味を引くことである。そこをねらつて、この教材は草むらで鳴いてゐる、きりぎりすを取らうと思つて、二足三足息をこらして近寄り、つひにそのきりぎりすをつかまへるまでの児童の動作や心持や自然の様子を寫し出したものである。随つて文章はかなり如實に精細に描かれてゐるが、かうした文章を讀むことによつて、極めてありふれた児童の生活の斷片が、如何にももしろく活き活きと書けるものであるかを感得させるとともに、一面遊びの間に自然に親しみ、自然を觀察し、自然から學ぶ態度を養はうとするものである。

この時期の児童の書く文章に比較して、本教材の文章は程度がかな

り高いと思はれる。しかし主題が純粹素朴な兒童の生活に取つてあるから、決して理解に困難を感じることはないであらう。

竹の先にねぎをつけてきりぎりすを取ることはある地方に於いて行はれる方法であるが、このほか地方によつてきりぎりすの種類や取り方にいろいろあるであらうから、それらと連絡して、本教材を生かして取扱ふべきである。

文章

文章の主體は「私」といふ一人稱が用ひてある。これは兒童一人一人が本課中の主人公たり得る親しさと、「私」と「きりぎりす」とが正面からしつかり組合つて、一呼吸一呼吸息もつかせないやうな逼迫感を盛上がらせたためとである。

この文は相當長い副詞的修飾語が隨所に用ひられてあつて、文章そのものとしては、陰影の多い、味はひの深いものであるが、常に兒童の動作を軸として、順序よく極めて自然に書かれてあるので、この期の兒童

にも容易に理解されるであらう。特に「チョンギース」といふきりぎりすの鳴聲を契機として、漸層的に事件が進展して行き、つひに「うまく取れますやうに」から「きりぎりすは、びつくりしたやうに、かごの中ではねましたの頂點に自然に導かれて行く。さうして最後の「私は、またほかのきりぎりすをさがさうと、草を分けて行きました」が、おちついた締めくくりをなしてゐる。

取扱の要點

讀むこと 發音に留意して、正しく指導する。文は「きりぎりす」を取る「私」の動作の進行に伴ひ、漸層的に發展して行く表現であるから、常に「私は」といふ語句に焦點を置いて讀ませるやうにする。その際また、

「チョンギース」

「ゐるぞ」

「チョンギース」

「ゐた」

からだ——「カダラ」と訛り易い。矯正を要する。

文字

新字——足、進み、一枚、表、心、虫かご、分けて

語句語法

本課の文章に陰影があり深みのある所以は副詞句と副詞の用法が巧みであるからである。それで次の如き副詞をその述語と呼應してよく把握させることが大切である。

さつきから……じつと立つてゐます。

氣持よくゆれます。

そつと……進みました。

もうついそこです。

いくらがしても。

さつと吹いて。

ちらと……見えます。

すれすれになると。

ひよつこり動いて。

すばやく……のりうつつて。

備考

連絡

カスノホン三「七月の雑題」中の「虫」自然の觀察三「私たちの研究」エノホン三「むしのちやう」と連絡して取扱に考慮する。

二十 海

教材の趣旨

「トビトカメ」「山ノ上」「川」「つゆ」等で海への憧憬に燃えてゐる兒童が、本教材に於いて始めて海へ來、海を見ることになる。「海へ來て」は夢寐にも忘れ得なかつた海へ來て始めて海を見て心に感ずる驚異と感動とをそのまま表現したものであり、砂の山は兄弟で海濱の波とたはむれ、砂の山を築いて遊ぶ興味を叙したもので、本教材はいはば海二題ともいふべき仕組になつてゐる。

「チョンギース」。

「うまく取れますやうに」。

「しめた」。

といふやうな……この部分を中心に常に事件が進展して行つてゐることを知らしめて特にその個所を注意させて讀ますやうにする。

文字語句等の指導をなし、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。話すこと、先づ兒童の「きりぎりす」を取つた體驗を話させて、本教材の理解に資する。例へば、

「きりぎりすを見たことがありますか」。

「きりぎりすはどんな聲でなきますか」。

「きりぎりすはどんなところにゐますか」。

等の問を發して、きりぎりすに對する兒童の體驗を想起させる。さうして挿畫掛圖文章等と結んで、おもむろに例へば、

「きりぎりすを取らうと思つてどうしましたか」。

「きりぎりすはなせ葉の表へ出て來たのでせう」。

「きりぎりすが竹の先にのりうつたときどんな氣持がしましたか」。

「きりぎりすは虫かごの中でどうしましたか」。

等、この課の内容に即した話合をさせ最後に最初からの話をまとめて簡単に話させることもよい。

書くこと ことばのおけいこ四十三頁(一)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書取を行ふ。

文字の指導 新字を中心として指導し、ことばのおけいこ四十五頁(二)によつてカナヅカヒの誤に氣づかせ、訂正をさせる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ四十五頁(三)によつて、簡単な文を書かせる。

注意すべきことば文字 語句語法等

矯正すべき訛音方言

きりぎりす——地方によつて方言が多いが、「キリギリス」を標準とする。

あるぞ——「オルゾ」といふ地方があるが、「イルゾ」を標準とする。

かぞへるやうに——「カズエル」と訛る地方があるから注意が必要である。

いいこゑで——「いいを」エエと訛る地方がある。「イー」を標準として讀ますやうにする。

からだ——「カグラ」と訛り易い。矯正を要する。

文字

新字——足、進み、一枚、表、心、虫が、分けて

語句語法

本課の文章に陰影があり深みのある所以は副詞句と副詞の用法が巧みであるからである。それで次の如き副詞をその述語と呼應してよく把握させることが大切である。

さつきから……じつと立つてゐます。

氣持よくゆれます。

そつと……進みました。

もうついそこです。

いくらさがしても

さつと吹いて

ちらと……見えます。

すれすれになると

ひよつこり動いて

すばやく……のりうつつて

備考

連絡

カスノホン三「七月の雑題中の「虫、自然の觀察三」私たちの研究「エノホン三」むしのもやうと連絡して取扱に考慮する。

二十 海

教材の趣旨

「トビトカメ」「山ノ上」「川」「つゆ」等で海への憧憬に燃えてゐる兒童が、本教材に於いて始めて海へ來、海を見ることになる。「海へ來ては夢寐にも忘れ得なかつた海へ來て始めて海を見て心に感ずる驚異と感動とを、そのまま表現したものであり、砂の山は兄弟で海濱の波とたはむれ、砂の山を築いて遊ぶ興味を叙したもので、本教材はいはば「海」二題ともいふべき仕組になつてゐる。

「海へ来ては、女の子が海濱近くに住むをばさんを訪れ、をばさんにつれられて海岸へ来て海を眺め、それをおかあさんに報告した文のかたち」にできてゐる。

「砂の山は、おかあさんといさんと一緒に濱邊に行つて経験したことを、男の子が書き綴つたかたち」になつてゐる。

即ちこの教材は兒童の生活そのものの中から生まれて來たものとしての表現であり、これを通して専ら海に親しませ、自然を觀察する契機とするものである。

この期の兒童で、全國的にいつて、まだ海を見ない者が相當の數にのぼるであらう。これらの兒童に、この教材を如何に理解さすかといふことは苦心の存するところであらうが、文章や挿畫(掛圖)によつて海の理解を深めるやうにする。もちろん海岸近くの學校や臨海授業や、遠足等の機會に恵まれるところでは、實際の觀察と結んで、本教材の趣旨を徹底させることが必要である。

文章

「海へ来て」の文章は、おかあさんに送る子どもの手紙文であるが、普通の手紙文ではなく、母に呼びかけて話す形の文であり、いはば手紙文の萌芽であつて、やがては手紙文に分化發展すべきものである。

始めて海を見た子どもにとつて、海は思つたよりも廣く、水はまつさをで、白帆や汽船が通つてゐることも珍しいが、波が規則正しく海岸に打寄せて、白い布をひろげたやうに眞白く碎けるのは、なほさらの驚異である。又海岸でかはい貝がらを見つけて喜びを感じるのも自然であり、更に海の中へはいつて行つたり、海岸で泳いだり、濱邊の砂で小山を作つて、寄せて來た波とたはむれて遊ぶことは、子どもにとつては、何よりも楽しいことである。特に波がうねつて來ては、まべでどつと音をたててくれます。そのたびに、白い布をひろげたやうにひろがります。海は、いつも動いてゐます。海は、生きてゐると思ひましたに、海を始めて見る女の子らしい驚異があらはれてをり、まけるものか、ま

けるものか」といひながら波と闘ふところに男の子らしい言動が寫されてゐる。この文章は、直ちに兒童の綴り方の模範文となり得る性質のものである。

取扱の要點

讀むこと 「海へ來ては、おかあさんに呼びかけて、おかあさんに報告するやうな心もちがあらはれるやうに又、砂の山は男らしく元氣に讀みを指導する。

發音を正し、文字語句等の指導をなし、讀むこと、話すこと、書くこと、相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 「トビトカノ」「山ノ上」「川」つゆ等を思ひ起させながら、海に對する觀念を整理し、挿畫(掛圖)文章等を中心として、兒童の體驗と結んで話合をさせる。

書くこと ことばのおけいこ四十六頁(二)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、書寫又は書取をさせる。

文字の指導 新字讀替を中心として指導し、ことばのおけいこ四十七頁(三)によつてカナツカヒに注意させる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ四十五頁(一)によつて、

手をつなぐ

手をはなす

手でさはる

手でつかむ

の文章を實際の動作にあらはさせる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

矯正すべき訛音 方言

おかあさん——「オッカー」「オカカ」等種々の方言がある。「オカーサン」を標準とする。

きのふ——「キンニョ」と訛らないやうにする。

廣い——「イロイ」「ヒレ」と訛らないやうにする。

ひろつて——「ヒラッテ」を訛らないやうにする。

はいりました——「ヘーリマシタ」といはないやうに注意する。

はまべ——「ハマベタ」といふ地方があるから注意する。

文字

新字 帆、汽船、沖、波、布、砂、貝、深い、浅い、
讀替——生きて

語句語法

「海は生きてゐると思ひましたといふことばの意味をよく理解させるやうにする。
 「おさらのやうなのや、かたつむりのやうなのや、いろいろあります」の文に於いて、並列の意
 をあらはす「や」の使用に注意させる。

「おかあさんに見せてあげると、おつしやいました」等の敬語に留意させる。

備考

連絡

ヨミカタ一「イケニフネ」付ビトカニヨミカタ二「山ノ上よみかた三」國引き「ささ舟」軍かん

「お話」川「つゆ」等何れもこの海に至る伏線であることに留意する。

カズノホン三七月の雑誌中の「海岸」貝殻と連絡して取扱に考慮する。

(以上 七月)

二十一 子 馬

教材の趣旨

ひよこ子犬子猫子豚等すべて動物の子は兒童にとつては愛すべき
 親しい友だちである。子馬も同様であるが親しんでゐない子どもに
 はそれが理解されないことも多いから、つとめて子馬に親しませて動
 物愛護の念に培ふのである。特に馬は國防上大切なものであつて、國
 民全般に愛馬心が行きわたつてゐるかどうかは重大な問題である。
 この點に留意してこの教材を取扱ふことが肝要である。挿畫にもあ
 るやうに、女の子が子馬に對して「子馬よ」と親愛の情をこめて呼びかけ
 る自然のことばを三聯の詩に結晶させ、その無邪氣な童詩の表現を通
 して、兒童一人一人の心に愛馬の念を深からしめんとするのである。

文章

この詩の第一聯は、子馬に對する愛情を最も端的にあらはしたもので、かはい子馬のおつむをそつと撫でてやるところに、子どもと子馬と一體になつた境地を見せてゐる。そつと撫でることは馬にやさしくしてやる心持で、決して馬を恐れる氣持ではない。

第二聯は、更に第一聯の感情を深化し、からだは大きくても、おまへはまだ赤ちやんだねと感じて、自分と同等否、自分よりも年下の赤ちやんだとしてゐる。以下漸層的に、「おかあさんのあとをおつかけて行つて」とか、「おちちをさがすのでせう」とか、いかにも、女の子らしい愛撫の心があらはれてゐる。

第三聯は、子馬に向かつて希望を述べてゐるが、同時に自分自身の希望をもあらはしてゐる。即ち早く大きくなつて、りつばな軍馬になりなさいといふことは、自分も早く大きくなつて、りつばな皇國民になりたいといふことと同じである。自分と子馬とは一體であり、子馬に對する希望は即ち自分の希望なのである。

取扱の要點

讀むこと 韻文であるから、殊に發音を正しく指導する。形式にこだはらぬ詩であるが、一種の韻律のあることに留意し、かつ詩の感情を讀みの上にあらはすやうに導く。

讀むこと 話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 主として挿畫(掛圖)文章を中心とし、兒童の體驗と關聯して話させる。例へば左の如き問によつて、話合に導く。

「子馬を見たことがありますか。」

「かはい子馬が居たら、みなさんはどうしてやりたいと思ひますか。」

「子馬は、よくおかあさん馬と一緒にゐて、ときどきおちちを探します。かはいでせう。まるで赤ちやんですね。それが大きくなるとどんなになるでせう。」

書くこと ことばのおけいこ四十八頁(二)によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、全文を書かせる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ四十八頁(一)のおつむをそつとなでてあげませう。

からだは大きくても、おまへはまだ赤ちやんだね。

等の文章を動作や身振にあらはすやうにさせる。

ことばのおけいこ四十九頁(三)の歌を讀ませ、本教材の味讀を助けるやうに工夫する。

注意すべきことば 文字 語句語法等

矯正すべき訛音方言

おまへ——「オノ」・「デメ」等の訛音方言を矯正する。

からだ——「カダラ」と訛らないやうに注意する。

大きくても——東京方言では「大キクッテモ」と發音する傾向がある。

おなりなさい——「オナンナサイ」「オナリナセ」などといはないやうに注意する。

文字

讀替——「軍」

語句語法

「からだは大きくても」の「ても」の用法を文例に就いて指導する。

備考

連絡

ヨイコドモ下「ニバシヤ」と密接に連絡して取扱ふ。

エノホン三「どうぶつ」と連絡して取扱に考慮する。

ことばのおけいこ四十九頁(三)の歌は新訂尋常小學唱歌第二學年用から引用した。

一十二 うさぎとたぬき

教材の趣旨

本教材は兒童の作業遊戲を劇に導くことを主眼としたもので、かち
かち山の童話は副次的な要素であるに過ぎない。即ち「デンワアソビ」
「ゴメンクダサイ」「オイシヤサマ」等の如き模倣遊戲を一方に於いて受け
てゐると同時に、「らくかさん」や「ささ舟」の如き工作と遊戲とを結んだ
ものをも受け、更に文學的要素を加へて劇へ進展せしめたのである。
随つて、本教材に至つて始めて作業と遊戲と文學とが綜合され、所謂遊
戲の劇化がほぼ完全な姿を體現したのである。しかもその作業には、
圖畫と工作の要素があり、遊戲は模倣遊戲であり、文學は説話と詩と音

樂の要素を包含してゐる。更に劇的要素としては樂屋と舞臺と扮装と道具と俳優と観客とあらゆるものを具備してゐる。

登場人物は正男と共に落下傘をこしらへた勇と姉や弟たちと笹舟を作つた太郎とを活躍させてゐる。勇と太郎が面を作つた動機は最初から「かちかち山」ごつこをするために兎と狸の面を計畫的にこしらへたのではない。ただ面を作つて遊戲でもしようといふ漠然たる意識に始つたのである。その際特に兎と狸の面を作つたことは「かちかち山」の童話から暗示を受けてゐたと見てもよいし、又單に兎と狸といふ動物の對照的な感じから出發したと見てもよい。

さて今日の作業教育は、ややもすると最初から一定の計畫をきちんとたてさせることを第一條件としてゐるが、それは寧ろ共同教育の立場がさうさせるのであつて、子どもの實際は、もつと漠然たる潜在感から働く場合が多い。子どものみならず、大人の實際の創作活動も潜在意識から受ける暗示が寧ろ大きいやうである。眞の創造創作は、最初

文章

からの計畫以外にはみ出るものであり、そこにこそ本當の創作としての價值があるのである。計畫通りに物ができるとすればそれは事務であつて本當の創作ではない。殊に本能的直感的な子どもにとつては、その傾きが強い。随つてあまり計畫攻めにするとかへつて子どもの創作を束縛して模倣に陥らせてしまふ怖れがある。その點を警戒して、本教材の精神を正しく生かすことが必要である。

本教材は、劇的な仕組になつてゐるから、殆ど對話の部分から成立つてゐる。随つて、いつも對話が中心となつて事件が發展してゐる。全體の書き方は、兎と狸の劇の部分を中心にして、その前後を散文で描き、劇の部分のみは現在形であらはし、他の部分は完了形で書かれてゐる。又臺詞の頭に「うさぎ」「たぬき」と書いてあつて、勇太郎とは書いてない。以上のやうな形式で書かれてゐるのは、本教材の趣旨を表現するに最もふさはしいからである。

「勇さんと太郎さんは、ぐわようしでめんを作つて遊びました」と書き出し、勇が兎太郎が狸の顔を描きそれを切りぬいて面をつけてみた。すると、さうだ、君、かちかち山ごつこをしようよ」と遊戯を思ひつき、それから二人は、あつい紙で舟を二つ作り、長いひもをつけて首へかけたのである。これまでは圖畫と工作とが遊びによつて結びつけられ、それがやがて劇へと發展するのであるが、既に劇として見れば、これは樂屋で小さな俳優たちが道具を整へ、扮装をこらし、これから舞臺に立たんとする場面である。随つて普通の散文で叙述されるのが當然である。次はいよいよ舞臺に出て劇を演ずる臺詞の部分で随つて表現もそれに適合した形式を取り、文も現在形を以つて書かれてゐる。その場合、うさぎが、

うさぎ、うさぎの舟は、

木のお舟

たぬきの舟は、

どろの舟。

と歌ふところに詩と音樂の要素が挿入されてゐるのは、注意すべきである。更に劇は進展して行つて、

たぬき、やあ、たいへん、たいへん。ぼくの舟に、水がはいつて來た。あ、舟

が沈む、沈む。うさぎ君助けてくれ。

といふ頂點に達する。すると、いつのまにか、となりのへやに、勇のおかあさんとねえさんが來て見てゐたので、それに氣づいて勇と太郎の演技は終るのである。この場合、母と姉は觀覽席から見物してゐる觀客の役割を果すもので、ほんたうにじやうずです、ね、といふ觀客としての母の賞讃の辭で最後の幕を閉ぢてゐる。かくの如く、本課の文章は、その場合場合に應じて、それを表すに最もふさはしい、それぞれ異なつた表現をとつてゐるのである。

取扱の要點

讀むこと 對話文が殆ど大部分を占めるから、特に發音アクセント等に注意して正

しく指導する。又「うさぎの舟は、木のお舟、たぬきの舟は、どろの舟」の部分と、ことばのおけいこ五十二頁(三)の劇の中の「ぎつちらこ、ぎつちらこ、お舟はぎつちらこ」等は、韻律を生かして朗讀するやうにする。文字語句の指導をなし、讀むこと、話すこと、書くことと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 主として挿畫(掛圖)文章等を中心として話させる。その場合あらかじめ「かちかち山のお話を整理しておく必要がある。

書くこと ことばのおけいこ五十頁(一)によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば更に書取をさせる。

文字の指導 新字讀替を中心として文字の指導をなし、ことばのおけいこ五十一頁(二)によつてカナヅカヒに注意させる。

ことばの仕事 ことばのおけいこ五十二頁(三)を劇的に話させる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

アクセント

あつ(厚) — アツイ あつ(熱) — アツイ

矯正すべき訛音方言

長いひも — 「ひも」を「ヒボ」といふ地方が多いから氣をつける。
うまいうまい — 「ウメー、ウメー」と訛らないやうに注意する。

よしやらう — 「やらう」といふ意志を表はす言ひ方は、「ヤルベー」「ヤンベ」「ヤラズ」「ヤラ」等地方によつていろいろある。矯正を要する。

重くて — 東京方言では「オモクッテ」といふ傾向がある。

進まないやうだ — 「ススマネーヨ」だと訛らないやうにする。

そんなことはないよ — 「ソナナコトツネーヨ」と訛らないやうに注意する。

さうかね — 「ソーキヤーネ」「ソーダカネ」「ソーケー」等の方言を矯正する。

たいへん — 「デーヘン」とならないやうにする。

はいつて来た — 「ヘーッテキタ」と訛らないやうにする。

助けてくれ — 「くれ」の意味を表はす言ひ方は地方によつて「クンネー」「クレー」「クンロ」「ク

レヤ」「グロイ」等種々あるから矯正につとめる。

文字

新字 — 顔(カモ) 耳 紙 助けて

讀替 — たぬき君

語句語法

「木のお舟」どろの舟 — 韻文的制約から一方は「お舟」、一方はただ「舟」となつてゐる。しか

し、どの舟には輕蔑的な心持も出てゐる。

次の如き敬語の用法には注意させ、ことばづかひを練習させる。

「おかあさんとねえさんが来て見ていらつしやいました」

「おほめになりました」

備考

連絡

うたのほんだうさぎとの連絡に考慮する。

二十三 自動車

教材の趣旨

パンクした自動車を見て兒童が起す好奇心を科學的な觀察へ導き、科學的な考へ方を指導するとともに運轉手とをびさんたちと、私と、正男との間に醸し出される人情の美しさをわからせる點に、本教材のねらひどころがある。日常兒童の身邊に起り得る平凡な事柄をとらへ、

それを知的に高め、情的に醇化して渾然一體たる教材として示したものである。故に本教材はただ單に自動車の説明をなすことが目的でなければ、人と人との接觸によつて起る人情の美しさを描いてゐる後半の部分のみを特に強調することをもつて満足するものでもない。二者渾然たる状態に於いて兒童に理解させるところに、本教材は眞面目を發揮し得るのである。

本教材は、卷二の「汽車」に聯關を有してゐる。貨物列車の數を數へながら、一つ一つの貨車を觀察した、また、車中の牛を發見して牛に對する好奇心と愛着心とを喚起しつつ、通過して行つた汽車に對する憧憬の感情を、更に一段と高めた教材である。

文章

初秋の午後、正男のうちへ遊びに行かうと思つて途中まで來ると、正男の家の前で自動車が止つて、四五人の人が立つてゐる。「なんだらう」といふ好奇心は眞先に誰でもが起すことであるが、この子どもの好奇

心を觀察へ導き、科學へと高めて行くものとして以下の叙述は發展する。

自動車のかたはらに居た正男に、「どうしたのです」と聞くと、正男は「自動車のこしやう」と答へる。その答に満足ができないで、「どんなこしやう」と聞きかへす。この子どもの眞摯な探求心に動かされてか、親切などこかのをぢさんが自動車の停車してゐる理由を親切に説明してやるのである。

「あの左がはの後の車をごらんさい。」

といつて、まづ子どもによく觀察させ、その上で、

「タイヤの中のチューブにあながあいて、空氣がぬけてしまつたのです。」

と、タイヤのひしやげてゐる理由を解き、子どもに知的な眼を開いてやる。かうしてだんだん科學的に開かれて來た子どもの眼は、運轉手の後輪の修繕を觀察することによつて更に進んだ知識をとらへ得るの

である。

「お待ちどほさまでした。どうぞお乗りください。」

「やあ、ごくらうでした。」

といふ運轉手とをぢさんたちの對話の中には、謙讓な美しい人情が表出されてゐる。更に自動車がうなりだした時をぢさんは、「さやうなら」と子どもたちにやさしく挨拶のことばを投げかける。わざとらしくあらぬ愛情の中に、禮讓をもつて人を導くゆかしいこのをぢさんのことばに、自動車にのみ心をうばはれてゐた子どもたちは、突如としてをぢさんとの別れを意識する。さうして心の底から、「さやうなら」と呼ぶのである。やがて自動車は動き始める。さうして勢よく「ブツ、ブツ」と警笛を響かせて子どもたちからだんだん遠ざかつて行つた時、親切に子どもたちにいろいろ説明してくれたをぢさんに對する思慕の念で、子どもたちの心がいつぱいになる。その結果子どもたちは、自動車が見えなくなるまでいつまでもその行方を見守つて、じつと立つてゐるの

である。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導する。對話が此の文の軸をなしてゐることに留意し、それを生かすとともに、文の意味感情を讀みの上にあらはすやうにさせる。

文字・語句の指導をなし讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。話すこと 主として挿畫(掛圖)文章を中心とし、自動車に關する兒童の體驗と關聯して話させる。

ことばのおけいこ五十六頁(一)によつて對話を讀ませ、それが誰のことばであるかを話させ、兒童を指名して對話を劇的に話させる。

書くこと ことばのおけいこ五十七頁(二)によつて、文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば、更に適當に書取をさせる。

文字の指導 新字・讀替の文字を中心として文字の指導をなし、ことばのおけいこ五十八頁(三)によつてカナヅカヒの誤に氣づかせ、訂正させる。

注意すべきことば 文字 語句語法等

矯正すべき訛音方言

ひしやけて——「へしゃゲテ」と訛らないやうにする。

さやうなら——「サヨナラ」「サイナラ」といふ地方がある。「サヨーナラ」を標準とする。

文字

新字——自動車 後 破れた 乗りました

讀替——自動「ド」車 空「ク」氣

語句語法

「ふと見ると」と「見ると」——文例を示してその用法を會得させる。

「自動車のこしやう」どんなこしやう——一は斷定であり、一は疑問である。「です」「ですか」の略された形であることに注意させる。

二十四 長い道

教材の趣旨

どこまで行つても、先へ先へと續いてゐる長い道、その長い道の端はどうなつてゐるのであらう。子どもは、道の彼方へのあこがれを抱い

てあゆみを運んで行く。ふと氣がつくと、子どもにとつては随分遠く来たので、急に家のことが思ひ出されて歸りたくなる。かういつた子どもの心持を取りあげて二句三聯の詩にしたものである。随つてこの詩は、あくまでも子どもの童心から流露する自然の感情の表出だと見なければならぬ。(その上で、この教材が、人生の行路を暗示するが如き奥行をも同時に持つことを認めるべきである。)さうして、それは又汽車の行方を眺め、自動車の後姿を見まもる子どもとの心と相通するものである。この純一無垢な子どものあこがれの心に培ひ、しみじみとした詩情を味讀させるところに、本教材の眼目がある。

文章

表現形式は、ごく簡單である。七五調二句が一聯で、しかも毎聯どこまで行つても、長い道を繰り返してをり、その反復によつて詩形が整へられてゐる。随つてこの反復句の後に續く句だけで三聯の内容が發展して行くのである。

さうして、この詩を表現するために選ばれた材料は、極度にまで少數であり、單純で、「長い道」「夕日の森」「お寺」の「かねの三つ」に過ぎない。第一聯の「夕日が赤い森の上は見た景色に就いていひあらはし」、第二聯の「うんとお寺のかねがなるは聞いた鐘の音に就いて書きあらはし」、この兩方面から夕暮の長い道の情景を描き出してゐる。さうして、第三聯に於いて、「もうかへらうよ、日がくれる」といふ心理の轉換を自然にあらはしてゐるのである。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導し、讀みの上に韻律感情をあらはすやうにする。文字、語句の指導をなし、讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 文章挿畫と聯關させて話合をさせ、ことばのおけいこ五十九頁(二)の韻文を讀ませなどしつつ、本教材の味讀を助けるやうに工夫する。

書くこと ことばのおけいこ五十八頁(一)によつて、文字を正確に書かせ、更に時間に餘裕があれば全文を書かせる。

文字の指導 新字を中心として文字を指導する。

注意すべきことは文字 語句語法等

矯正すべき訛音方言

長い 赤い——「ナゲイ」「アケイ」の訛音を矯正する。

かへらう——「ケーロー」「キヤーロー」等と訛らないやうに注意して指導する。なほ、かへる

といふところを「もどる」といふ地方があるが、この二つには用法に差異がある。

文字

新字——道 等

語句語法

「夕日」が赤い森の上は「森」の上に「夕日」が赤い意。又「もうかへらうよ」日にくれるは「日」にくれるから「もうかへらうよ」の意味である。韻文であるから倒置法が用ひてある。

備考

連絡

よみかた三「自動車」の發展として教材排列上の連絡がある。

うたのほんだ「長い道」と連絡して取扱ふ。

ことばのおけいこ五十九頁(二)の韻文は、中村雨紅の作詞である。

二十五 日曜日の朝

教材の趣旨

興亞奉公日に取材した。ちやうど日曜日と興亞奉公日とが重った朝國旗を掲揚し宮城を遙拜し戦歿將士ならびに戦線の將兵に對して感謝の心を表し、一家總動員でめいめい持場持場に於いて働き朝食をすまして後、戦地の兵たいさんへ慰問文を書いたことの生活記録を教材としたのである。随つて、本教材を通して、この期の兒童に理解の行く程度に、興亞奉公日の意義となぜ宮城を遙拜し戦歿ならびに戦線の勇士に感謝し、又一家一人残らず協力一致して勤勞するかを知らせ、かつこれを實踐させるやうに指導することが肝要である。

本教材は、ヨイユドモ下の「兵タイサン」へと表裏一體をなすもので、兩者相俟つて兒童の生活指導をなすものである。即ち本教材の最後の

ところで、戦地の兵たいさんに、おもん文をかきましたとあるが、その慰問文はヨイコドモ下の「兵タイサン」へとして出てゐるのである。

文章

本教材はこの期の児童の立場から、興亞奉公日に於ける實踐の姿をありのままに記述したものである。最初にいさんとともに國旗を立て、それからおとうさんのお手つだひをして庭の草をとり、最後には、今朝は一家そう動ゐんではたらいたねとあるやうに協力の範圍がだんだんと擴大されて、二人の協力から一家の協力へと向かふやうに書かれてある。ややもすれば固苦しく形式的なものになりがち、な興亞奉公日が、子どもの生活に即應して感激的に表現されてゐる。特に、私たちの立てた國旗が、風にひらひらして、いつもより勇ましく見えました、「おとうさんが、枯れかかったかきねの朝顔を、きれいに取つておしまひになつたので、そのへんが見ちがへるやうに、明かるくなりました、おかあさんは、赤ちやんをおんぶしたまま、もうすつかりおぜんのしたくを

していらつしやいました」等の箇所、子どもらしい感情なり觀察なりが躍如として出てゐる。

取扱の要點

讀むこと 發音を正しく指導する。文字語句等の指導をなし、讀むこと、話すこと、書くこと、相俟つて讀みを確實にする。

話すこと 挿畫・掛圖、文章等を中心とし、興亞奉公日に於ける児童の生活體驗と結んで話をさせる。

書くこと ことばのおけいこ六十一頁(一)によつて文字を正確に書かせ、時間に餘裕があれば適當に書取をさせる。

文字の指導 新字讀替を中心として文字を指導する。

ことばの仕事 ことばのおけいこ六十二頁(二)(三)によつて文章を書かせる。

注意すべきことは文字語句語法等

アクセント

はし(箸)——ハシ はし橋——ハシ はし端——ハシ

矯正すべき訛言方言

勇ましく見えました——東京方言では「見えました」を「メーマシタ」といふ傾向がある。嬌正すべきである。

見ちがへるやうに——「見ちがへる」を「ミチゲール」と訛らないやうにする。

一家そう動めん めもん文——「エッカソードーエン」「エモンブン」と訛らないやうにする。

文字

新字——日曜日(ヨ) 起きて 戦地 枯れ ごみ箱 お喜び めもん文

讀聲——國旗(コッキ) 宮城(キョージョー) 今朝(アサ) 一家(いっか) そう動めん

語句語法

敬語法に注意させる。敬語を用ひないものと比較してその差異に氣づかせる。

なくなられた兵たいさん

なくなつた兵たいさん

はたらいていらつしやる兵たいさん

はたらいてゐる兵たいさん

きれいに取つておしまひになつたので

きれいに取つてしまつたので

お喜びになりました

喜びました

したくをしていらつしやいました

したくをしてゐました

おつしやいました

いひました

備考

連絡

ヨイコドモ下「兵タイサン」へと密接に連絡して取扱ふ。

カズノホン三十月の雑誌「中」のお宮の掃除と連絡して取扱に考慮する。

(以上 九月)

二十六 うらしま太郎

教材の趣旨

浦島太郎の傳説を五場の劇に仕組んだものである。純粹な劇形式は、從來卷三までにはなかつたのであるが、話し方の重要性が認められた今日に於いては、劇的教材は必要かくべからざるものとなつた。浦島太郎の傳説は、お伽噺として兒童には最も親しみが多く、話の筋もよく理解されてゐる。これを劇化して與へることによつて一層興味を増し、架空的な話の筋からうける不合理を除去してこの説話の眞の精神を體得させることができるのである。

文章

第一場は、浦島が子どもにいちめられてゐる龜を助けて海へ放つ場面であるが、浦島の慈悲心を説くことに急であつて、子どもを悪人扱に

するのはよろしくない。無邪氣な子どもたちにとつて、たまたま海岸で見つけた龜は、彼等の遊びの最もよき對象であるからである。

第二場は、助けられた龜が浦島を龍宮へ案内する場面である。龜としては、お禮にりゆうぐうへおつれしようと思つたに違ひないのであるが、浦島は、それはおもしろい。行つてみませうといつてゐるやうに、まだ見ぬ龍宮へのあこがれに心を動かされて、龜の申し出を受け入れたのである。

第三場は、浦島が龍宮で弟姪から手厚い歓待を受ける場面であつて、浦島はただ呆然と幸福感到酔つてゐるのである。

第四場は、三年後龍宮を辭して玉手箱を貰つて我が家へ歸る場面である。浦島は何故家へ歸りたくなつたか。そこでうらしまは、父や母のことを思ひ出して、急に家へかへりたくなりましたといふト書が、非常に大きな意味を持つて来る。

第五場は、生まれた村に歸つて、玉手箱をあけると、白髪のお翁となつ

た説話の終末を、二聯の韻文によつて表現したものである。

取扱の要點

讀むこと 全文が劇であるから劇らしく讀ませ、ト書の部分と對話の部分との區別をはつきりさせ、對話の部分に於いても、浦島龜弟姫を讀みの上にあらはすやうに指導する。しかしそれはわざとらしい臺詞口調に陥らないでどこまでも兒童の讀みの自然に即することを忘れてはならない。

發音を正し、文字語句等の指導をなし讀むこと、話すこと、書くこと相俟つて讀みを確實にする。

話すこと あらかじめ挿畫掛圖等を中心として話合によつて浦島太郎のお話を整理しておく。なほ、かうした劇教材は讀むこと自身が話すことの練習になるのであるから、兒童を指名して讀ませ、又劇的に話させる。

書くこと ことばのおけいこ六十三頁(二)によつて、文字を正確に書かせる。

文字の指導 新字讀替を中心として文字の指導をする。

ことばの仕事 ことばのおけいこ六十二頁(一)によつて、

ていねいにおじぎをしました。

先生をおつれしました。

これをさしあげませう。

では、おいとまいたします。

ごきげんよう、さやうなら。

とほうにくれました。

等のことばを、動作身振にあらはさせる。

注意すべきことば 文字 語句 語法等

アクセント

かめ(龜)——カメ かめ(塞)——カメ

矯正すべき訛音方言

おもしろい——「オモシレー」「オモロイ」等と訛らないやうにする。

ころがしてゐるのです——東京では「ゐるんです」が普通で話しことばとしては許容し得る。

『を脱落してゐるです』といふのは矯正すべきである。「つかまへたのだもの」の場合も同様である。

ありがたうございます——ございますをゴゼーマス、ゴザイス等と訛らないやうに注意する。

いらつしやいます くださいませ——方言が多いからつとめて矯正する。

文字

新字——禮、父、母

讀替——お金、後、十分

語句語法

左の文例に就いて適當に敬語法に注意させ、疑のことばとして練習させる。

お助けくださいますして……ありがたうございます。

おつれしようと思つてまゐりました。

ごあんないいたします。

どうぞそこへおかけください。

うらしまさんでいらつしやいますか。

ゆつくり遊んでいつてくださいます。

ごゑんりやなくめしあがつてください。

ごらんにいれます。

おなぐさめいたします。

おいとまいたします。

まあよろしいではございませんか。

かへらしていただきます。

玉手箱をさしあげませう。

おあけになつてはなりません。

備考

連絡

エノホン三「うらしま太郎」と連絡して取扱ふ。

参考資料

浦島の傳説に關しては、日本書紀萬葉集丹後風土記浦島子傳續浦島子傳、お伽草紙の浦島太郎などの諸書に記載されてゐるが今日の浦島太郎の物語はお伽草紙の浦島太郎に比較的近い。

新出讀替文字一覽

〔左傍ニ一ヲ附シタルモノハ讀替文字〕

課	頁	行	新出讀替文字
一	四	六	小鳥
	五	三	野山
		五	れんげ障
		六	美しい
		七	あま茶
六	二		天止
			天下
二	一	七	今日
	八	一	野原
		四	向かつて
		五	力いつばい
			開かないで
			落ちて
		九	同じやうに

二	九	二	重すぎる
	一〇	一	ガラス玉
	一一	一	南
		四	北
	一二	五	ぐんよう伏
	一三	八	國引き
		一	大昔
		二	神さま
三	一三	二	廣くしたい
	一四	四	土地
		六	太い
	二		動きだして
	一		二重橋
		四	明かるく
	五		白い
	三		女學校
	四		並んで
	五		歌ひました

								五
								一八
三	二	一	七	二	四	七	四	一
取つた	九百九十九本	千本	何の用か	待て	地の上	尾	矢車	鯉のぼり
						七		六
二六	二五	二四				二三		二二
二	三	一	四	三		八	七	二
止つてゐた	岸	三郎さん	作りました	ささの葉	流れて	小川	左	切つて

								七
								二六
								五
								近づきます
								蛙
								遊んでゐました
								聞いて
								答へました
								吸ひこんで
								軍かん
								春雄
								大すき
								知つてゐます
								九
								三三
								三
								海軍
								軍人さん
								お城のやう
								大砲
								形
								魚
								氷兵さん
								旗
								痛いので
								苦しみました

二八	六七	三	五	六	八	七	六八	一九	七〇	七二
町	歩	賣	お	拜	人	進	一枚	表		
中	か	分	白	汽	沖	波	布	生	砂	
心	ご	け	帆	船				きて	は	
一	六	一	八	一	三	七	一	七	三	
七三	七四	七四	七四	七五				七六		
一九	二〇									

二〇	七六	三七	四	一	二	三	八	二一	八一	二二	八一	三	八七	二三
貝	深	浅	軍	顔	耳	紙	た	助	自					
後	破	空	お	道	お	日	起	國	宮					
了	れた	氣	乗り		寺	曜	きて	旗	城					
七	一	四	三	二	二	一	三	六						
八八	八九	九〇	九二	九三	九四									
二四														
二五														

二五	九四	九五	九六	九七	二六	一〇四	一〇二	一〇〇	二六	二五
七	五	一	五	一	五	三	二	四	七	七
戦地	枯れかつた	ごみ箱	お喜び	今朝	一家	おもん文	お礼	その後から	お金	お礼
二六	二〇七	二	六	十分	母	父				

運筆順序

(特に筆順の誤り易いもの、又は二様以上あるものに就いて、能科習字と連絡して統一して掲げた。)

野 原 重 何 玉 北 昔 用 鯉

甲ニマ了
一ノ白小
一ノ二、
一ノ一、
一ノ一、
一ノ一、
一ノ一、
一ノ一、

歌 右 左 葉 止 蛙 雄 城 魚

可一ノ人
一ノ口
一ノエ
一ノ一、
一ノ一、
一ノ一、
一ノ一、
一ノ一、

旗 痛 逃 都 鼻 黄 田 苗 星 祭

旗 ノノノ廿三八
 痛 广シマ月一
 逃 ノシしく
 都 ナノ日、
 鼻 自田ニ一ハ
 黄 一リ一巾ニハ
 田 田ニ
 苗 一ノ田ニ
 星 田ナニ
 祭 タノノ示

町 歩 進 表 布 耳 乘 曜 禮

町 田ニ
 歩 一ノノ
 進 一ノニ
 表 一ノニ
 布 ノ一ノ
 耳 一トシ一(扁ノキハ)
 乘 一トシ一八(文)千ハ
 曜 日ヨヨ一ノ
 禮 ニ川口ニ豆

鉛筆による書き方指導上の注意

姿勢

- 一、椅子にやや浅く腰をかけ、兩脚は少し開く。
- 一、下腹を前に出し、尻を引いて脊柱を正しくする。
- 一、胸を机におしつけぬやうにする。
- 一、左手を紙上にのせ、左腕を前に張らぬやうにする。

執筆並びに運筆

- 一、右腕は軽く机の上にのせ、脇の下を開いて腕を伸ばす。
- 一、低學年では掌の右側を紙につけて書くが、高學年に及んで次第に軽くつけ、遂には手首のみをつけて運筆するやうに指導する。
- 一、四本の指は離れぬやうに密着させる。
- 一、鉛筆と紙面との角度は、右後へ六十度乃至七十度とする。
- 一、鉛筆は中指の爪のつけ根のあたりから、食指の根本にかける。

- 一、鉛筆は軽く持つて、あまり下を持たぬやうにする。
 一、運筆は毛筆の如く強弱緩急をつけず、低學年に於いては字形を主とし、上達するに随つて速度を加へ緩急をつける。

その他

- 一、鉛筆は直徑の二倍乃至三倍の斜面に削り、芯はなるべく尖らせないで使ふやうに馴れる。
 一、鉛筆の芯をなめるくせをつけないやうにする。

ヨミカタ三の發音 (ガキダケゴは)
(鼻濁音を示す。)

一 ハル

ニネンセー

ウレシー、ウレシー、ニネンセー、

ハル ダ、ハル ダト、コトリガ ウタウ。

ウレシー、ウレシー、ニネンセー、

サクラ、サクラ ダ、ノヤマワ ハナ ダ。

ハナマツリ

スマレ、タンポポ、レンゲソ、

ハナノ オヤネガ、ウツクシー。

アマチャノ ナカカラ ヒョッコリト、

オデニ ナッタカ オシヤカサマ。

テンジョー テンカオ ユビサシテ、

オタチニ ナツテ イラッシャル。

チーサナ ヒシヤクデ オチャ クンデ、
カケテ アゲマシヨ、オシヤカサマ。

チヨーモ コトリモ タノシソリ、
キヨーワ アナタノ ハナマツリ。

二、ラツカサン

イサムサント マサオサンガ、カミデ ラツカサンオ コシラエマシタ。

「サー、ノハラエ イッテ トバソー。」

フタリワ、ソレオ モツテ デカケマシタ。

イサムサンガ、ラツカサンオ タタンデ、イトオ クルクル マイテ、ソレオ ソラエ ムカッテ チカライッパイ ナゲマシタ。スル。

ト、ヒラカナイデ ソノママ オチテ キマシタ。

「オモリガ カルイノ ダネ。」

ト、イサムサンガ イーマシタ。

「コンドワ、ボクノオ トバスヨ。」

ト イッテ、マサオサンガ、オナジヨーニ ソラエ ナゲマシタ。
ヒラクニワ ヒラキマシタガ、スグニ オチテ キマシタ。

「コレワ オモスギル。」

ト、マサオサンガ イーマシタ。

フタリワ、ヨサソーナ イシオ、アチコチト サガシマシタ。
ソコエ、ハルエサンガ、イヌオ ツレテ アソビニ キマシタ。

「ナニオ サガシテ イラツシャルノ。」

「ラツカサンニ ツケル イシオ、サガシテ イルノ デス。」

ト、イサムサンガ イーマシタ。

「ジャ、コレワ ドー デシヨ。」

ト イッテ、ハルエサンワ ガラスダマオ フタツ ミセマシタ。
「コレナラ、チョード、イーカモ シレナイ。」

ソレオ オモリニ ツケカエテカラ、イサムサンガ アゲテ、ミマシタ。スルト、ラッカサンワ パット ヒライテ、フワリ フワリト オチテ キマシタ。

「シマイ、ンマイ。」

コンドワ、フタリデ イッショニ アゲマシタ。

「イチ、ニノ、サン。」デ、タカク アゲルト、ドチラモ パット ヒラキマシタ。

チョード ソノトキ、ミナミノ ホーカラ カゼガ フイテ キテ、ラッカサンガ フキアゲラレマシタ。ソーシテ、ドンドン キタノ、ホーエ トバサレテ イキマシタ。イサムサンモ マサオサンモ、ソノアトオ オツテ イキマシタ。

「ヤー、ラッカサンブタイ、ダ。ススス、ススス。」

ト、テンデニ オーキナ コエデ ユート、イヌモ ワシワント ホエテ、マッサキニ ハシッテ イキマシタ。

「グンヨーケンモ トツゲキ デス。」

ト イッテ、ハルエサンモ ツイテ イキマシタ。

ラッカサンワ、クサノ ナカエ シズカニ オチマシタ。

二 クニビキ

オームカシノ コト デス。

カミサマ**ガ** クニオ ヒロクシタイト オカン**ガ**エニ ナリマシタ。カミサマワ、ウミノ ウエオ オミワタシニ ナリマシタ。ヒ**ガ**シ

ノ ホーノ トーイ、トーイ トコロニ、アマッタ トチノ アルノ**ガ** ミエマシタ。

カミサマワ、ソノ トチニ フトイ ツナオ カケテ、アリツタケノ チカラオ ダシテ、オヒキニ ナリマシタ。

「コツチエ コイ、エンヤラヤ。
コツチエ コイ、エンヤラヤ。」

カケゴエ イサマシク オヒキニ ナリマシタ。ソノ トチガ ウゴ
キダシテ、オーキナ フネノヨーニ、グングント コツチエ ヤツテ
キマシタ。

カミサマワ、ソノ トチオ ツギアワシテ、クニオ ヒロク ナサ
イマシタ。

カミサマワ、マタ ウミノ ウエオ オミワタシニ ナリマシタ。
コンドワ、ニシノ ホーノ トーイ、トーイ トコロニ、アマツタ
トチノ アルノガ ミエマシタ。

カミサマワ、ソレニ ツナオ カケテ、

「コツチエ コイ、エンヤラヤ。」

コツチエ コイ、エンヤラヤ。」

ト、チカライッパイ オヒキニ ナリマシタ。コレモ オーキナ フ

ネノヨーニ ウゴイテ、コツチエ ヤツテ キマシタ。

カミサマワ、ゴーシテ、クニオ ヒロク ナサツタト ユーコト
デス。

四 ニジューバシ

メノ マエニ オガム ニジューバシ、
ケダカイ、ウツクシー ニジューバシ。

オホリノ ミズワ シズカニ アカルク、
シロイ ヤグラワ クツキリト ソビエ、

シゲツタ マツノ アイダニ、
オヤネガ コーゴーシク ミエマス。

サクサクト コジャリオ フンデ、

ジヨガツコーノ セートサシガ キマシタ。
キチント 大ラシデ、サイケールーオ シテ、
コエオ ソロエテ、キミガヨオ ウタイマシタ。

ワタクシタチモ、イッショニ ウタイマシタ。

五 コイノボリ

ユーベノ アメガ ハレテ、ヒガ キモチヨク、テツテ イマス。
サオノ サキノ ヤグルマガ カラカラト ナルト、コイガ、オー！
キナ クチデ オモーションブン カゼオ ノンデ、ヤネヨリモ タカ
ク オオ アゲマス。
オオ オロシテ キテ サオニ ツケルカト オモート、マタ ハ
ラオ フクラマシテ オドリアガリマス。
ソノタビニ、コイノ カゲガ ジノ ウエオ オヨギマス。

六 ウシワカマル

ツキノ ヨイ バン デシタ。
ウシワカマルガ、フエオ、フキナガラ アルイテ イマシタ。
ゴジヨノ ハシニ キマスト、
「マテ。」
ト ユー モノガ アリマス。
ミルト、オーキナ ナギナタオ モツタ、オーオトコガ タツデ
イマス。
ウシワカマルワ、
「ダレ ダ。ナンノ ヨーカ。」
ト イーマシタ。
「ベンケーダ。ソノ カタナガ モライタイ。ヨイ カタナオ セ
ンボン アツメル ツモリデ、クヒャククジュークホンワ トツタ。

モー イッボンデ センボン ダ。サー カタナオ ダセ。」

ウシワカマルワ ビクトモ シマセン。

「カタナガ ホシーカ。ホシケレバ トツテ ミヨ。」

ト イーマシタ。

ベンケーワ、ナギナタオ フリマワシテ キツテ カカリマシタ。

ウシワカマルワ、ヒラリト ランカンノ ウエエ トビアガリマシ

タ。

ベンケーガ ウエオ キルト、ウシワカマルワ シタエ トビオリ

マス。ミギオ キルト ヒダリエ トビノキ、ヒダリオ キルト ミ

ギエ トビノキマス。ベンケーワ、ヘトヘトニ ツカレテ シマイマ

シタ。

ソノトキ、ウシワカマルワ、オーギデ ベンケーノ ウデオ タタ

キマシタ。ベンケーワ、オーキナ ナギナタオ、ガラリト オトシマ

シタ。

ベンケーワ コーサンシテ、ウシワカマルノ ケライニ ナリマシ

タ。

七、ササブネ

ハルノ ヒガ アタタカク ノハラノ クサオ テラシテ イマス。

オガワノ ミズガ タノシソーニ ナガレテ イキマス。コトリガ、

キノ ウエデ ウタオ ウタツテ イマス。

タローサンワ、ネーサンヤ オトートタチト、ササノ ハオ トツ

テ、ササブネオ ツクリマシタ。

「ミンナデ、ササブネノ キョーソーオ サセヨ。ネーサンワ、ア

ノ ハシノ ウエデ シンバンオ シテ クダサイ。」

ト、タローサンガ イーマシタ。

ジローサンモ サブローサンモ ヨロコンデ、メーメーノ ササブ

ネオ モツテ、オガワノ キシニ ナラビマシタ。

ミヨコサンワ、ササノコエダオモツテ、ハシノウエニ、タチマシタ。
「ヨーイ、ドン。」

サンニンワ、イッショニ、フネオ、ダシマシタ。フネワ、スベルヨ。
「ニ、ナガレテ、イキマス。」

サンニンワ、フネト、ナランデ、カワノ、フチオ、ハシツテ、イキ
マス。

クサノ、ハニ、トマツテ、イタ、チョーチョーガ、オドロイテ、トビ
タチマシタ。

チョーチョーガ、サブローサンノ、フネニ、トマリマシタ。

フネワ、ダンダン、ハシエ、チカズキマス。

「ホーラ、モー、ジキ、ダ。」

ト、サブローサンガ、イーマシタ。

ミヨコサンワ、サツト、ササノ、コエダオ、フリアゲテ、

「サブローサン、イッチャク。」

ト、イーマシタ。

「サブローサン、バシザイ。」

ト、タローサント、ジローサンガ、イーマシタ。

「サブローサンノ、フネニワ、チョーチョーノ、センドーサンガ、ノ、

ツタカラ、カッタノ、デショ。」

ト、ミヨコサンガ、イーマシタ。

八 カエル

カエルノ、コドモガ、カワバタデ、アウンデ、イマシタ。

ソコエ、ウシガ、キテ、ミズオ、ノミマシタ。コガエルワ、ビツク。

リジテ、ウチエ、カエリマシタ。

オトーサンガエルト、オカーサンガエルニ、

「オーキナ、オーキナ、バケモノガ、ミズオ、ノミニ、キマシタヨ。」

ト、イーマシタ。

「キンジョニ、イタ、オーガエルガ、ソレオ、キーテ、
「ソノ、オーキナ、バケモノワ、ワタシクライモ、アツタカネ。」
ト、イーマシタ。

コガエルワ、

「ドーシテ、ドーシテ、イママデ、ミタ、コトモ、ナイホド、オーキ、
ーノ、デス。」

ト、コタエマシタ。

「オーキナノガ、ジマンノ、オーガエルワ、ウント、イキオ、スイコ、
ンデ、オナカオ、フクラマシマシタ。」

「ゾンナラ、コノクライモ、アツタカネ。」

「トテモ、ゾンナ、モノデワ、アリマセン。」

「デワ、コノクライカネ。」

ト、イッテ、オーガエルワ、イッソー、フクラマシマシタ。

コガエルワ、

「オジサン、オヨシナサイ。ドンナニ、オナカオ、フクラマシテモ、
カナイマセンヨ。」

ト、イーマシタ。

「シカシ、オーガエルワ、コンドコソト、チカライッパイ、イキオ、
スイコミマシタ。オナカワ、マルデ、フーセンダマノヨーニ、フクレ、
(マシタ。」

「スルト、ボン。」ト、オーキナ、オトガ、シテ、オーガエルノ、オナ、

カガ、ヤブレテ、シマイマシタ。

九、グンカン

「ハルオサシワ、グンカンガ、ダイスキ、デス。マダ、ホントーノ、
グンカンオ、ミタ、コトワ、アリマセンガ、オジサンニ、モラッタ、
エ、オ、ミタリ、オジサンノ、オハナシオ、キイタリシテ、グンカン、
ノ、コトワ、ヨク、シッテ、イマス。オジサンワ、カイゲンノ、グン、

ジンサン デス。

ハルオサンワ、センカンヤ、ジュンヨーカンヤ、クチクカンヤ、セ
ンスイカンナドノ、コトオ、ヨク、シツテ、イマス。

ハルオサンニ、センカンノ、コトオ、キクト、コー、コタエマス。

「センカンワ、イチバン、オーキクテ、イチバン、ガツシリシタ、グ、

ンカン、デス。マルデ、ウミニ、ウカンダ、オシロノヨー、デス。

オーキナ、タイホーガ、イクツモ、アツテ、テキノ、グンカンオ、

ドシドシ、ウチマス。ボクワ、センカンガ、ダイスキ、デス。」

コー、イッタ、アトデ、キツト、

「デモ、ジュンヨーカンワ、ユカイナ、グンカン、デスヨ、センカン、

ヨリモ、ズット、ハヤク、ハシレテ、カタチガ、スツキリシテ、イ、

テ、ボクワ、アレニ、ノツテ、セカイジューノ、ウミオ、ノリマワ、

シテ、ミタイ。」

ト、イーマス。

「イチバン、ハヤイノワ、ジュンヨーカン、デスカ。」
ト、タズネマス。

「イーエ、ソレワ、クチクカン、デス。チーサクテ、カルクテ、グン、

グン、ハシリマス。チーサイ、クセニ、ギョライデ、オーキナ、グ、

ンカンオ、ヤツツケマス。」

ト、コタエマス。

「モット、カワツタノワ、アリマセンカ。」

ト、キキマス。

「ソレワ、センスイカント、コークーボカン、デス。センスイカンワ、

ウオノヨーニ、ウミノ、ナカエ、モグリマス。コークーボカンワ、

ヒロイ、カンパンカラ、ヒコーキオ、イクツモ、イクツモ、トバシ、

マス。」

ト、コタエマス。

ハルオサンワ、オジサンノヨーニ、カイグンノ、グンジンサンニ

ナルト イッテ イマス。

十 オハナシ

スイヘーサンワ ハタ モツテ、
パタパタ、パタパタ、オハナシシマス。

コークーボカンワ デントーデ、
ピカピカ ピカピカ、オハナシシマス。

デンシンタイノ ヘータイサンワ、
カチカチ カチカチ、オバナシシマス。

ウチノ アカチャン オーゴエデ、
アー アー、アー、オハナシシマス。

十一 ムシバ

ハナコサンワ、ハ **ガ** イタイノデ、ヒトバンジュー クルシミマ、
シタ。アサニ ナツテモ、マダ イタイノ**ガ** ナオリマセン。ハナコ、
サンワ、オカーサント イッショニ、ハ **ノ** オイシャサマエ イキ、
マシタ。

オイシャサマワ、ス**グ** ミテ クダサイマシタ。

「ヤー、ニホン ナランド ムシバ**ガ** デキテ イル。オカジョ タ、
ベスギマシタネ。」

ト イッテ、クスリデ アラッタ、クスリオ ツケタリシテ クダ、
サイマシタ。

ハナコサンワ、イタイノ**ガ** スコシ ナオツタヨーニ オモイマシ、
タ。

オイシャサマワ、オカーサンニ、

「コノ、マエノ、ホーノ、ムシバワ、ハエカワル、ハ、デスガ、オク、
ノ、ホーノワ、イツショ、ツカウ、ダイジナ、ハ、デス。ソレガ、
コー、ムシバニ、ナツテワ、イケマセンネ。」

ト、オツシャイマシタ。

ツレカラ、

「ハナコサン、アナタワ、ハ、オ、ミガキマスカ。」

ト、オキキニ、ナリマシタ。

「マイアサ、ミガキマス。」

ト、ハナコサンワ、コタエマシタ。ホイシャサマワ、

「ヨル、ネル、マエニモ、ミガクト、イーノ、デスガネ。ソースルト、

コンナニ、ハ、ガ、ワルク、ナラナイ、デショ。」

ト、オツシャイマシタ。

オカーサント、イツショニ、オイシャサマノ、オウチオ、デタ、ト、

キ、ハナコサンワ、モ、ハ、ノ、イタミオ、ワスレテ、ニコニコシ、

テ、イマシタ。

十二 ネズミノ、チエ

「コノゴロ、ナカマノ、モノガ、ネコニ、トラレテ、ユマル。ナント、
カシテ、トラレナイ、クフーワ、アルマイカ。」

ト、トシヨリノ、ネズミガ、ナカマノ、モノニ、イトマシタ。

「イッピキノ、ワカイ、ネズミガ、マエエ、デテ、イーマシタ。」

「オーキナ、スズオ、ネコノ、クビニ、ツケテ、ソノ、オトガ、キコ、

エダラ、ニゲル、コトニ、シヨ、デワ、アリマセンカ。」

「ナルホド、ヨイ、クフー、ダ。」

ト、イツテ、ミンナワ、カンシンシマシタ。

トシヨリノ、ネズミガ、イーマシタ。

「ソレモ、ヨイガ、ダレガ、ソノ、スズオ、ツケニ、イクノカネ。」

ミンナワ、ダマツテ、シマイマシタ。

十三 カワ

マサオサンノ イエノ マエニ、カワガ アリマス。イツモ、キレ、
 ーナ、ミズガ ナガレテ、イマス。マサオサンワ、コノ カワデ、イ
 ケオ、ツクジタリ、ウオオ、スクツタリシテ、アソビマス。
 マサオサンワ、コノゴロ、イツタイ、コノ カワノ ミズワ、ドコ、
 カラ、キテ、ドコエ、イクノ、ダロ。コレホド、タクサンノ、ミズ、
 ガ、ナガレテ、ソレデ、ヨク、ナクナラナイ、モノ、ダ。ト、カンガ、
 エルヨ、ニ、ナリマシタ。
 アルヒ、ニ、サンニ、コノ、コトオ、キ、テ、ミ、マシタ。
 ニ、サンワ、
 「カワワ、ト、イ、ヤ、マカラ、ナガレテ、キテ、ウミエ、イクン、ダ、
 ト、イ、マシタ。
 「ドーシテ、ミズワ、ナクナラナイノ、デショ。」

「トキドキ、アメガ、フルカラサ。」
 「ソ、ン、チ、ラ、ウミワ、ミズデ、イッパイニ、ナツテ、コボレマセンカ。」
 「ウミワ、ヒロイヨ。コンナ、カワガ、ナンビヤク、ナガレコンデモ、
 へーキ、ダ。」

ト、イツテ、ニ、サンワ、ワライマシタ。

マサオサンワ、マダ、ヨク、ワカリマセン。ソレデ、オト、サンニ
 オナジ、コトオ、キキマシタ。

「ソレワ、ニ、サンノ、ユ、ト、リ、ダヨ。コノ、カワオ、ズツト
 ノボツテ、イクト、ヤマト、ヤマガ、チカヨツテ、セマイ、タニニ
 ナル。ソノ、タニノ、オクカラ、ナガレテ、クルノ、ダガ、ソノヘ、
 ンデワ、チ、サナ、タニガワ、ダ。マタ、コノ、カワオ、ダンダン
 クダツテ、イクト、オ、カワニ、ナツテ、オシマイニワ、ヒロイ、
 ヒロイ、ウミエ、デル。オマエモ、イマニ、ソノ、ヤマガ、ウミエ
 イツテ、ミルト、ヨク、ワカル、ダロ。」

ト オツシャイマシタ。

マサオサンワ、スコシ ワカッタヨーニ オモイマシタ。ケレドモ、
カンガエテ、ミルト、ミズガ イツモ ナガレテ ナクナラナイノガ
フシギ デシタ。

コンドワ、ソノ コトオ オジーサンニ キイテ ミマシタ。

「ホー、ヨイ トコロエ、キガ ツキマシタ。ヤマニワ、キガ アル、
ネ、クサモ アルネ。アメガ フルト、ミズワ、キノ ネヤ、クサ、
ヤ、オチバノ アイダニ タマツタリ、ジメンエ、シミコンダリシ、
テ、スコシズツ ヤマカラ タニエ、タニカラ カワエト ツタワ、
ツテ ナガレル。ソノ ミズガ マダ ナクナラナイ ウチニ、ツ、
ギハ アメガ フル。ソレワ、チヨード オジーサンノ ゲンキナ
アイダニ、オトーサンガ、ンマレル、オトーサンノ ゲンキナ ア、
イダニ、オマエタチガ、ンマレル、ソレデ、コノ ウチガ ツズイ、
テ、イクノト オナジ コト ダ。」

ト、オジーサンワ オツシャイマシタ。

十四 イッスンボーシ

一

イッスンボーシワ、ミヤコエ イツテ、リップナ サムライニ ナ、
ロート カンガエマシタ。

ソコデ、ハリノ カタナオ コシニ サシテ、オワンノ フネニ
ノリ、ハシノ カイデ コギナガラ、カワオ ノボツテ イキマシタ。

二

ミヤコニ ツイテ、トノサマノ ケライニ ナリマシタ。

アルヒ、オヒメサマノ オトモオ シテ、タビニ デカケマシタ。

スルト、オニガ デデ キテ、オヒメサマオ タペヨート シマシタ。

イッスンボーシワ、ハリノ カタナオ スイテ、オニ ニ ムカイマシタ。

三

オニワ、イッスンポーシオ、ツマシデ、ヒトクチニ、ノシマシマシタ。イッスンポーシワ、オニノ、オナカノ、ナカオ、ハリノカタナデ、チクリ、チクリト、ツツキマシタ。オニワ、
「イタイ、イタイ。」
ト、イーマシタ。

四

イッスンポーシワ、オニノ、オナカノ、ナカカラ、ノドエ、ノボリ、ハナオ、トーツテ、メエ、デテ、キマシタ。メカラ、ジメンエ、トビ、オリマシタ。
オニワ、オナカモ、ノドモ、ハナモ、メモ、イタイノデ、アワテテ、ニゲダシマシタ。ソノトギ、ダイジナ、ウチデノ、コズチオ、オキワ、スレテ、イキマシタ。

五

ウチデノ、コズチオ、フルト、イッスンポーシワ、セーガ、ダンダ、ン、タカク、ナリマシタ。ソーシテ、ダレニモ、マケナイ、リップナ、サムライニ、ナリマシタ。

十五 ツユ

ツユニ、ナツテ、マイニチノヨーニ、アメガ、フリマス。
フツカモ、ミツカモ、フリツズクト、ゲンキナ、タローサンモ、「イ、ヤ、ダナー。」ト、オモイマス。デモ、トキドキ、アメガ、ヤンデ、ソ、ラガ、アカルク、ナリ、カッ、ツヨイ、ヒガ、サシテ、キマス。ニ、ワノ、アジサイノ、ハナガ、ホントーニ、キレー、デス。ンメノ、ミ、ガ、キーロク、ナリマシタ。
イマ、タウエノ、サイチュー、デス。ニジツセンチグラライニ、ノビ、タ、イネノ、ナエオ、タニ、キチント、ウエルノ、デス。
「ツユノ、アメガ、フルノデ、タウエガ、デキルノ、ダ。」

オジーサンガ、ヨク コー オッシャイマス。

オガワノ ミズガ フエテ、オトオ タテテ ナガレマス。タロー！
サンワ、ハレマニ オガワデ ドジョーオ スクイマス。

「オジーサン、ツユワ イツマデ ツズクノ デスカ。」

「シチガツノ ハジメマデ ダネ。ツユガ アケルト、カラリトシタ
ナツガ クルヨ。」

「ナツ」ト キクト、タローサンワ、キューニ ウレシク ナリマシ
タ。セミガ ナク、ミズアソビガ デキル、ソレヨリモ、コトシワ
ウミエ ツレテ イツテ モラエル。ウミ、ウミ、ハヤク ウミエ
イキタイト オモイマシタ。

十六 キンギョ

ネーサント フタリデ、キンギョオ カイニ イキマシタ。ミセニ、

ワ、オーキナ ミズオケガ アツテ、ソノ ナカニ、キンギョガ
クサン オヨイデ イマシタ。

「マサオサン、ドレニ シマショー。」

ト、ネーサンガ イーマス、キンギョヤサンガ、

「サ、コレデ スキナノオ、オスクイナサイ。」

ト イツテ、チーサナ アミオ カシテ クレマシタ。

ボクワ ソレオ モツテ、ジツト キンギョオ ミマシタ。ドレモ

ドレモ、カワイクテ キレー デス。

「ドーシタノ。ハヤク オキメナサイヨ。」

ト、ネーサンガ イーマシタ。

「ドレニ ショーカ。ミンナ キレー ダナ。」

ト、ボクガ イッタノデ、キンギョヤサンガ ワライマシタ。

アカイノオ・サンビキ、アカシロノ ブチオ、ニヒキ スクツテ、
ガラスバチニ イレマシタ。

「コレオ スコシ アゲマシヨ。」
 キンギョヤサンワ、モ オ ガラスバチノ ナカエ イレテ クレマシ
 タ。

ミドリノ モ ワ、シズカニ ヒラキマシタ。

「ボクガ、モツテ カエルヨ。」

ガラスバチオ、リョーテニ シツカリ モツテ、ボクワ ソロソロト
 アルキダシマシタ。

二

ウチエ カエルト、オカーサンガ、

「キレーナ キンギョ デスネ。」

ト イツテ、ダイオ モツテ キテ クダサイマシタ。ボクワ、ソノ
 ダイノ ウエニ、ソツト ガラスバチオ ノセマシタ。

オトーサンガ、

「コレワ スズシツーダ。」

ト オツシャイマシタ。

キンギョワ、ヤツト オチツイタト ユーヨーニ、シバラク ジツ
 トシテ イマシタガ、ソノウチニ オヨギダシマシタ。モノ アイ
 ダオ オヨギヌケタリ、ウエノ ホーエ、ウカンデ イツタリ、シタ
 ノ ホーエ ナナメニ シズンダリシマシタ。トキニワ、ハナビラノ
 ヨーニ ヒロガツテ オーキク ミエタリ、ホソナガク ナツテ ミ
 エタリシマシタ。

ネーサンガ、

「マサオサンワ、キンギョト ニラメツコオ シテ イルノネ。」
 ト イツテ、ワライマシタ。

十七 ハナビ

ドント ナツタ。

ハナビ ダ、キレーダ。

ソライッパイニ ヒロガッタ。
シダレヤナギガ ヒロガッタ。

ドント ナッタ。

ナンジュー、ナンビヤク、アカイ ホシ、

イチドニ、カワツテ、アオイ ホシ、

モイチド カワツテ、キンノ ホシ。

十八 オマツリ

コンヤワ テンジンサマノ オマツリ デス。ワタクシワ、オトー！
トノ イチロート イツショニ、オカーサンニ ツイテ オマイリオ
シニ イキマシタ。

マチワ ニギヤカ デシタ。チョーチンノ ヒガ、キレーニ ナラ
ンデ イマシタ。アタラシー ユカタオ キタ ヒトガ、オーゼー

アルイテ、イマシタ。

リョーガワニ ミセガ ツズイテ、イロイロナ モノオ ウツテ
イマシタ。ユーリヤト キンギョヤガ、スズシソー デシタ。

オミヤニ チカク ナルト、ヒトガ イッパイ デシタ。

オカーサンニ テオ ヒカレナガラ、オサレルヨーニ シテ、ハイ
デンノ マエエ デマシタ。

ハイデンノ マエニワ、ウツクシー チョーチンガ アリマシタ。

オーキナ シメバチノ モンガ ツイテ イマシタ。

オカーサンモ、ワタクシモ、イチローモ、イツショニ、オガミマシ
タ。

カエリニ、ワタクシワ ニンギョーオ、カッテ イタダキマシタ。

イチローワ、オモチャノ タイコガ ホシート イツテ、ソレオ

カッテ イタダキマシタ。

イチローワ、オーヨロコビ デシタ。ウチエ、カエルト、スグ

イコオ ナラシマシタ。オジギオ シタリ、チーサイ テオ タダイ
タリシテワ、タイコオ ナラシマシタ。

十九 キリギリス

ワタクシワ、サツキカラ、セーヨリ ダカク ノビタ クサノ ナ
カニ、ジツト タツテ イマス。トキドキ フイテ、クル カゼノ
タメニ、クサノ ハガ キモチヨク ユレマス。

「チョン ギース。」

「イルゾ。」ト オモイナガラ、ワタクシワ、ソツト コエノ スル
ホーエ、フタアシ ミアシ ススミマシタ。モー、ニメートルトワ
ハナレテ イナイヨーデス。ワタクシワ、クサノ ハオ イチマイ
イチマイ カジエルヨーニ、メデ サガシマシタ。

「チョン ギース。」

モー、ツイ ソコ デス。シカシ、イクラ サガシテモ、ソノ スガ

タガ ミエマセン。

カゼガ サツト フイテ、クサガ イチドニ ウゴキマシタ。スル
ト、クサノ ハノ ウラニ、チラト キリギリスノ スガタガ ミエ
マシタ。

「イタ。」

ワタクシワ、テニ モツテ イタ タケオ、ソツト キリギリスノ
イル ホーエ サシダシマシタ。

ハノ ウラニ、キリギリスワ、マダ ジツトシテ イルヨーデス。
カゼガ ヤムト、

「チョン ギース。」

ト、イー コエデ マタ ナキマシタ。

タケノ サキニ ツイテ イル シロイ ネギガ、ハノ ソバニ
スレスレニ ナルト、キリギリスワ、ヒョッコリ ウゴイテ、ハノ
オモテエ デテ キマシタ。

「シマク トレマスヨーニ。」
 ココロノ ナカデ、イノリナガラ、ネギオ、キリギリスノ カラダニ
 チカズケマシタ。

スルト、キリギリスワ、スバヤク タケノ サキニ ノリウツツテ、
 ネギオ オイシソーニ タベハジメマシタ。

「シメタ。」ト オモート、ムネガ ドキドキシマス。タケノ サキオ
 ソット ヒキヨセナガラ、ムシカゴノ クチエ ハコビマシタ。キリ
 ギリスワ、ビックリシタヨーニ、カゴノ ナカデ ハネマシタ。

ワタクシワ、マタ ホカノ キリギリスオ サガソート、クサオ
 ワケテ イキマシタ。

二十 ウミ

一 ウミエ キテ
 オカトサン、ワタクシワ、キノー オバサント イッショニ、ウミ・

エ イキマシタ。

ウミワ アマリ ヒロイノデ、ビックリシマシタ。ミズワ マツサ
 オ デス。トーイ トコロデ、ミズト ソラガ イッショニ ナツテ
 イマス。シラホガ、イクツモ ウカnde イマス。キセンモ トーッ
 テ イマス。

オキノ ホーカラ、ナミガ ウネッテ キテ、ハマベデ、ドット
 オトオ タテテ クダケマス。ソノタビニ、シロイ スノオ ヒロゲ
 タヨーニ、ヒロガリマス。

ウミワ、イツモ ウゴイテ イマス。ウミワ、イキテ イルト オ
 モイマシタ。

ナミウチギワヤ スナハマデ、カイオ ミツケマシタ。オサラノ
 ヨーナノヤ、カタツムリノヨーナノヤ、イロイロ アリマス。ソノ
 ナカデ、ツメノヨーナ カタチオ シタ、ツヤツヤト サクライロニ
 ヒカッテ イルノガ、イチバン スキ デシタ。

ワタクシワ カイオ タクサン ヒロツテ、カエリタイト オモイ
マス。

二 スナノ ヤマ

ニーサント ボクガ、テオ ヅナイデ、ウミエ ハイリマシタ。ナ
ミガ、ザブン ザブント ムネニ アタリマシタ。

ニーサンワ、ボクノ テオ ハナシテ、フカイ ホーエ オヨイデ
イキマシタ。ボクワ、マダ オヨゲナイノデ、アサイ トコロデ ミ
ズオ トバシテ アソビマシタ。

ナニカ アシニ サワルノデ、ツカンド ミルト、ハマグリ デシ
タ。オカーサンニ ミセテ アゲルト。

「マー、メズラシー。イー オミヤゲガ デキマシタ。」

ト オッシャイマシタ。

ソレカラ、ハマベノ スナデ、ヤマオ ツクリマシタ。スルト、ナ
ミガ ダンダン ヨセテ キテ、セツカク ツクッタ スナノ ヤマ。

ガ、クズレダシマシタ。

「マケル モノカ、マケル モノカ。」ト イーナガラ、スナオ、ドン
ドン モリアゲマシタ。ニーサンモ、カセーシテ、クレマシタ。

ナミワ、アトカラ アトカラ ヨセテ、キマス。ボクラワ、マケズ、
ニ ドンドン スナオ、モリアゲマシタ。

三十一 コンマ

コンマヨ、

オマエワ カワイーネ。

オツムオ ソット、ナデテ アゲマシヨ！。

カラダワ オーキクテモ、

オマエワ マダ アカチャン ダネ。

オカーサンノ アトオ、オッカケテ イッテ、

トキドキ、オチチオ、サガスノ、デショ。

ハヤク、オーキク、ナツテ、

リップナ、グンバニ、オナリナサイ。

二十二 ウサギト、タヌキ

イサムサント、タローサンワ、ガヨーシデ、メンオ、ツクツテ、ア、ソビマシタ。

イサムサンワ、ガヨーシニ、ウサギノ、カオオ、カキマシタ。ミミ、オ、ナガク、カキマシタ。メオ、アカク、ヌリマシタ。

タローサンワ、ソレオ、ミテ、

「ボクワ、タヌキニ、シヨ。」

ト、イッテ、タヌキノ、カオオ、カキマシタ。ハナノ、リョーワキカ、ラ、ミミエ、カケテ、チャイロニ、ヌリマシタ。

フタリワ、ハサミデ、エ、オ、キリスイテ、メンオ、ツクリマシタ。フタリワ、メンオ、ツケマシタ。

「ソー、ダ、キミ、カチカチャマ、ゴッコオ、シヨ。」

ト、タローサンガ、イーマシタ。

ソレカラ、フタリワ、アツイ、カミデ、フネオ、フタツ、ツクリマシタ。ナガイ、ヒモオ、ツケテ、クビエ、カケルト、フネワ、オナカ、ノ、ヘンニ、カカリマス。

「ンマイ、ンマイ、ンマク、デキタ。サー、ボクワ、ウサギ、キミワ、タヌキ、ダヨ。」

ト、イサムサンガ、イーマシタ。

「ボクガ、タヌキカ、ヨシ、ヤロ。」

ウサギノ、イサムサンワ、スコシ、カンガエテカラ、イーマシタ。

ウサギ、タヌキクン、ヨ、イ、オテンキ、ダネ、コレカラ、イッショニ、フナアソビオ、シヨ。」

タヌキ「ヨカロ。」

ウサギト、タヌキワ、フネオ、コギマス。

ウサギワ、ウタイマス。

ウサギ「ウサギノ、フネワ、

キノ、オフネ、

タヌキノ、フネワ、

ドロノ、フネ。」

タヌキノ、フネガ、スコシ、オクレマス。

タヌキ「オーイ、ウサギクン、ボクノ、フネワ、ナンドカ、オモクテ

ススマナイヨ。」

ウサギ「ソシナ、コトワ、ナイヨ。キミノ、コギカタガ、ヘタナノ、ダ。」

タヌキ「ソトカネ。」

マタ、ジバラク、コギマス。タヌキワ、ダンダン、オクレマス。

タヌキ「ヤ、タイヘン、タイヘン。ボクノ、フネニ、ミズガ、ハイ、

テ、キダ。ア、フネガ、シズム、シズム。ウサギクン、タスケ、

テ、クレ。」

イツノマニカ、トナリノ、ヘヤニ、イサムサンノ、オカーサント

ネーサシガ、キテ、ミテ、イラッシャイマシタ。

イサムサンモ、タローサンモ、キガ、ツイテ、アワテテ、ヤメマシ、

タ。オカーサンワ、

「ホントーニ、ジョーズ、デスネ。」

ト、イツテ、オホメエ、ナリマシタ。

二十三 ジドーシャ

マサオサンノ、ウチエ、アツビニ、イコト、オモツテ、ソトエ

デマシタ。

トチューマデ、キテ、フト、ミルト、マサオサンノ、イエノ、マエ、

ニ、ジドーシャガ、トマツテ、イマシタ。ソバニ、ヒトガ、シゴニン

タツテ イマシタ。

「ナシ、ダロー。」ト、オモツテ、ワタクシワ、イソイデ、イッテ、ミマシタ。マサオサンガ、イマシタノデ、

「ドーシタノ、デス。」

ト、キキマスト、マサオサンワ、

「ジドーシャノ、コシヨ。」

ト、イーマシタ。

「ドンナ、コシヨ。」

ト、キキマスト、ソバニ、イタ、ドユカノ、オジサンガ、

「アノ、ヒダリガワノ、ウシロノ、クルマオ、ゴランナサイ。」

ト、イーマシタ。

ミルト、ソノ、クルマノ、タイヤガ、ヒシヤゲテ、イマシタ。

「ヤブレタノ、デシヨ。」

ト、キキマスト、オジサンワ、

「タイヤノ、ナカノ、チキープニ、アナガ、アイテ、クーキガ、ヌケテ、シマッタノ、デス。」

ト、イーマシタ。

ウンテンシュワ、ソノ、クルマオ、ハズシマシタ。ソーシテ、ジドーシャニ、ツケテ、アッタ、ホカノ、クルマオ、モツテ、キテ、トリツケマシタ。

シゴトガ、ス、ムト、ウンテンシュワ、オジサンタチニ、

「オマチドーサマ、デシタ。ドーゾ、オノリクダサイ。」

ト、イーマシタ。オジサンタチ、サンニンワ、

「ヤ、ゴクロー、デシタ。」

ト、イッテ、ジドーシャニ、ノリマシタ。

ウンテンシュモ、ノリマシタ。

「ブルブル、ブルブル。」

ト、ジドーシャガ、ウナリダシマシタ。

オジサンタチワ、ワタクシタチニ、
「サヨーナラ。」

ト イーマシタ。ワタクシモ マサオサンモ、
「サヨーナラ。」

ト イーマシタ。

ジドーシャワ ウゴキダシマシタ。

「ブッブー。」

ジドーシャワ、ハシッテ、イキマス。

ワタクシタチワ、ジドーシャガ、ミエナク ナルマデ、ミテ イマシタ。

二十四 ナガイ ミチ

ドコマデ イッテモ、ナガイ ミチ。

ユーヒガ アカイ、モリノ ウエ。

ドコマデ イッテモ、ナガイ ミチ。

ゴーン ト、オテラノ カネガ ナル。

ドコマデ イッテモ、ナガイ ミチ。

モー カエローヨ、ヒガ クレル。

二十五 ニチヨービノ アサ

キョーワ ニチヨービデ、コーアホーコービ デス。アサ、ハヤク
オキテ、ニースント、コッキオ タテマシタ。

ワタクシタチノ タテタ コッキガ、カゼニ ヒラヒラシテ、イツ、
モヨリ、オサマシク ミエマシタ。

ミンナ ニワエ デテ、キュージョーノ ホーオ、オガミマシタ。
マタ、オクニノ タメニ ナクナラレタ、ヘータイサンヤ、センチデ
ハタライテ、イラッシャル、ヘータイサンノ タメニ、モクトーオ

イタシマシタ。

ソレカラ、オトーサンノ オテツダイオ シテ、ニワノ クサオ
トリマシタ。

オトーサンガ、カレカカッタ、カキネノ アサガオオ、キレーニ
トツテ、オシマイニ、ナツタノデ、ソノヘンガ、ミチガエルヨーニ、
アカルク ナリマシタ。

ニーサンワ、コワレテ イタ、ゴミパコノ フタオ、ナオシマシタ。
オカーサンワ、

「ジョーズニ、デキタ、コト。」

ト イツテ、オヨロコビニ、ナリマシタ。

「ゴハン、デスヨ。」

ト、ヨバレテ、イツテ、ミルト、オカーサンワ、アカチャンオ、オン、
ブシタマ、モー、スツカリ、オゼンノ、シタクオ、シテ、イラッシ、
ヤイマシタ。

「ケサワ、イッカ、ソードーインデ、ハタライタネ。」
ト、オトーサンガ、オハシオ、トリナガラ、オツシャイマシタ。

ゴハンガ、スンデカラ、センチノ、ヘータイサンニ、イモンブンオ
カキマシタ。

二十六 ウラシマタロー

一

ヨニンノ、コドモガ、イッピキノ、カメオ、トリマイテ、ア、
ソンデ、イマス。

コドモ「コノ、カメオ、コロガシテ、ミヨ。」

コドモ「オモシロイ。ミシナデ、コロガソーヨ。」

ミンナ「ヨイシヨ、ヨイシヨ。」

カケゴエオ、カケナガラ、ミンナデ、カメオ、コロガシマス。
ソコエ、ウラシマタローガ、キマス。

ウラシマ「コレ、ドーシタノダ。」

コドモ三「オモシロイカラ、カメオ、コロガシテイルノデス。」

ウラシマ「ソシナ、コトオシテワ、イケナイ。カワイソー、ダカラ、ハナシテ、オヤリ。」

コドモ四「ダツテ、ボクタチガ、ツカマエタノダモノ。」

ウラシマ「デモ、カメワ、イキモノダ。ユルシテ、オヤリ。」

ソト「ダ、ワタクシニ、コノカメオ、ウツテ、クレナイカネ。」

ミシナ「ウツテ、アゲヨ。」

ウラシマワ、オカネオ、コドモタチニ、ヤリマス。

コドモ一「ヨカッタ、ヨカッタ。」

ミシナ「イコー、イコー。」

コドモタチワ、「ワー、ワー、イーナガラ、イッテ、シマイマス。」

ウラシマ「カメサン、シツカリナサイ。」

カメオ「ダキオコシテ、セナカオ、サスッテ、ヤリマス。カ、

メワ、ナミダオ、フキナガラ、テーネーニ、オジギオシマス。

ウラシマ「チヨード、ヨコオ、トーリカカツテ、ヨカッタ。ハヤク、ウチ、

エ、カエリナサイ。」

カメワ、オジギオシナガラ、ドコカエ、イキマス。

二

ウラシマ「ガ、ツリオシテ、イマス。ソコエ、カメガ、デテ、キマス。」

カメ「ウラシマサン、ウラシマサン。」

ウラシマ「オヤ、ダレカト、オモツタラ、コノアイダノ、カメサシ、ダネ。」

カメ「ハイ、コノアイダワ、オタスケクダサイマシテ、ホントーニ、

アリガトー、ゴザイマス。キョーワ、オレーニ、リユーグーエ、

オツレシヨート、オモツテ、マイリマシタ。」

ウラシマ「リユーグーエ。」

カメ「サヨ―デ ゴザイマス。ソレワ、ソレワ、キレーナ、ヨイト
コロデ ゴザイマス。」

ウラシマ「ソレワ オモシロイ。イッテ ミマショ―。」

カメ「デワ、ゴアンナイ イタシマス。」

カメワ、ウラシマノ テオ、トツテ、ソコロオ、グルグル
アルキマス。

カメ「ゴランナサイ。ムコーニ ヒカツタ ヤネガ ミエル デシヨ
―。」

ウラシマ「ア―、ミエル。アカヤ、キデ―ヌツタ モンガ ミエルネ。」

カメ「アレガ、リユーグ―ノ ゴモンデ ゴザイマス。モ― ジキデ
ゴザイマス。」

三

カメガ、ウラシマオ アンナイシナガラ、デテ キマス。

カメ「ココガ リユーグ―デ ゴザイマス。ドーゾ、ソコエ オカケ、

クダサイ。」

ウラシマワ、アタリノ ウツクシサニ オドロキナガラ、リ
ッパナ イスニ ユシオ カケマス。イロイロナ ウオガ

デテ キマス。ソノ アトカラ、オトヒメサマガ アラワレ
マス。

カメ「コノ オカダガ、ウラシマサンデ ゴザイマス。」

オトヒメ「アナタガ、ウラシマサンデ イラッシャイマスカ。ワタクシワ、
オトヒメデ ゴザイマス。コノアイダワ、カメオ、オタスケク、

ダサイマシテ アリガト― ゴザイマス。ドーゾ、ユツクリ
アソシデ、イッテ クダサイマセ。」

ウオタチワ、ゴチソーオ、ハコンデ キマス。

オトヒメ「サ―、ゴエンリヨナク、メシアガツテ クダサイ。」

ウラシマ「ドーモ、ゴチソーサマデ ゴザイマス。」

オトヒメ「デワ、ミンナニ オモシロイ オドリオ オドツテ モライマ、

「ショー」。

「ウオタチワ、ソロツテ オドリマス。」

「ウラシマ、オモシロイ、オモシロイ。」

四

「コーシテ、サンネン、タチマシタ。」

「アルヒ、ウラシマワ、チチャ、ハハノ、コトオ、オモイダシ、

デ、キューニ、イエエ、カエリダク、ナリマシタ。」

「アイ、コレワ、マダ、サシアゲタ、コトノ、ナイ、オイシー、ゴチソ、

ーデ、ゴザイマス。」

「ウラシマ、イヤ、モー、ジューブン、イタダキマシタ。」

「エ、ビ、デワ、ニギヤカナ、オドリオ、シテ、ゴランニ、イレマシヨ。」

「ウラシマ、オドリモ、タクサン、デス。」

「オトヒメ、ソレ、デワ、ナニカ、カワツタ、コトオ、シテ、オナゲサメ、イ、

タシマシヨ。」

「ウラシマ、イヤ、オトヒメサマ、ナニモカモ、モー、ジューブンデ、ゴザ、

イマス。ナガイ、アイダ、ホントーニ、オセワニ、ナリマシタ。」

「オトヒメ、ドーカ、ナサイマシタカ。」

「ウラシマ、アマリ、ナガク、ナリマスノデ、モー、オイトマ、イタシマス。」

「オトヒメ、マー、ヨロシーデワ、ゴザイマセンカ。」

「ウラシマ、デモ、ウチノ、コトモ、キニ、カカリマスカラ、カエラシテ、

イタダキマス。」

「オトヒメ、サヨーデ、ゴザイマスカ。ナンノ、オカマイモ、デキマセン、

デシタ。デワ、オミヤゲニ、タマテバコオ、サシアゲマシヨ。」

「カメガ、タマテバコオ、モツテ、キマス。」

「ウラシマ、オミヤゲマデ、イタダキマシテ、アリガトー、ゴザイマス。」

「オトヒメ、コノ、タマテ、バコワ、ドンナ、コトガ、アツデモ、オアケニ、

ナツテワ、ナリマセン。イツマデモ、ソノママニ、シテ、オイ、

テ、イタダキトー、ゴザイマス。」

ウラシマ「ヨク　ワカリマシタ。デワ、オイトマ　イタシマス。サヨーナ
ラ。」

ミンナ「サヨーナラ。」

カノ「ワタクシガ、マタ　オトモオ　イタシマシヨ。」

オトモ「ゴキゲンヨ、サヨーナラ。」

ウラシマ「サヨーナラ。」

カメガ、ウラシマノ「テオ　トツテ　デテ　イキマス。」

五

ンマレタ　ムラニ　カエツタラ、

ダレモ　シラナイ　ヒトバカリ、

トホーニ　クレテ　ウラシマワ、

アケテ　ミマシタ、タマテバコ。

シロイ　ケムリガ　タチノボリ、

ゲンギデ　ワカイ　ウラシマワ、

ミルミル　シラガノ　オジーサン、

ムカシ　ムカシノ　ハナシ　デス。

綴り方指導要項

指導の發展段階

- 第一期 兒童の生活を言語によつて發表することになれさせ、次第に素朴簡易な文章表現に進め、綴り方の基礎的態度を養ふ。
- 第二期 兒童の見聞する事象、日常の行動などに就き、見方考へ方を指導して生活を豊富にし、表現の意欲を旺盛ならしめる。
- 第三期 文の目的と用途とを明らかにして表現を的確多様ならしめ、次第に國民生活の實際に應ずる表現の力を養ふ。
- 第四期 第三期に準じてそれを發展せしめ、國民的自覺を喚起して國語の豊かな表現になれしめる。なほ實務的文章にも習熟せしめる。

初等科第二學年

一指 指導要項

○見たり、聞いたり、讀んだり、行つたり、考へたりしたことをそのままはしく話すやうに書く態度を養ふ。

- (イ) 題材を兒童の身近な具體的な事象から取り、各自が書くやうに導く。
 - (ロ) 材料の選擇がまだ十分に行へないから、思ひつくまゝを身についたことばで長く、くはしく書かせる。
 - (ハ) 一面には斷片的羅列的でもよいから、いつでも、どこからでも書き出させ、自發的に書く興味を引きだすことが大切である。
 - (ニ) 行事その他兒童にとつて大きなでき事を書く時には、めいめいが経験したことから書かせるやうにし、概念的になることを避けさせる。
- 時には綴り方のために環境をととのへてやるのもよい。

○生活を書きあらはすことの必要と価値を児童にわからせ、書いたものが役に立つ喜びを感じさせる。

- (イ) 児童の綴り方を相互に読みあひ、適當に文例を與へ、話合などして、自分にも書ける、自分も書いてみようといふやうな氣持を起させる。
- (ロ) 教師兩親友だちなどを相手として呼びかけの形で書くことになれさせる。

(ハ) 繪日記學級日記動植物の觀察日記栽培日記その外目的のきまつた日記を書かせるのもよい。

- (ニ) 感覺を自然にあらはし、自分の考へを率直に書くこと、對話を書き入れて、實況をはつきりさせることなどにつとめ、文を綴るおもしろさをわからせる。

(ホ) 他教科他科目と關聯して、取材の範圍を廣くさせる。

○まとめ方は児童各自の経験の順序想ひ起す自然の順序に従ふといふ程度でよいが、次第に筋を立てるやうに導く。

(イ) 生活経験を想ひ起す機會を與へ、それを語らせ、その順序を整へ、自然の間にまとめ方をさとらせる。

(ロ) この學年の後半期頃から、讀書欲の高まるのが普通であるから、讀んだことを思ひ出させたり話させたりする間に、おのづからまとめ方をさとらせ、又ことばに親しませるやうに導く。

(ハ) 日記手紙詩などそれぞれ目的によつて書く心持に、おのづから違ひのあることをさとらせる。

○用語の醇化をはかり、正しい國語に對する語感を養ひ、漢字交りのひらがなによつて正確に書かせる。

(イ) 話し方と關聯して、いつも相手にはつきりとわかるやうなことばづかひや、いひまはしで書くやうに工夫させる。

(ロ) 濁音促音拗音等は正しく書かせ、カナヅカヒは習慣的に正しく書くやうに氣長に導く。

(ハ) 句點讀點鈎改行などは、行ひやすいものから順次に指導して使用さ

せる。

- (二) 機会あるごとに、短文詩などの聴寫視寫を行ふ。
- (ホ) 訂正の方法を教へて、讀みかへしたり、書きなほしたりする習慣をつけ、時々書き方と關聯して本文を清書させる。

二 指導要項例

第一學期

○ 心持の表現

よみがた、ヨイコドモなどと關聯して、三年生になつた喜び、春になつた嬉しさ、遠足や運動會やお節句などを待つ喜びなど、心持を書きあらはすやうにする。

ただ嬉しいとか、楽しいとかいふだけではなく、その嬉しいわけ、楽しいわけを書かせる。

○ 順序だつた敘述

- (イ) ふだんの遊び、お手つだい、いろいろな行事などで自分のしたこと見たこと、聞いたことを順序だててくはしく書かせる。たとへ文章が長くなつても差支ない。
- (ロ) 事柄や、したことを書きながら、その間になるべく思つたこと、感じたことを書き入れるやうにする。

○ 觀察の記錄

- (イ) うちの人、友だち、近所の人などを題材として、それらに就いて書かせる。
- (ロ) 理數科、藝能科と關聯して、自然に親しませ、變化の著しいものや、興味のあるものに就いては、觀察を續けさせて、文を書かせる。
- (ハ) 必要なときには、繪を書き入れさせる。

○ 繪日記紙芝居の製作

- (イ) 樂しかつた行事や、おもしろかつた遊びなどを、繪日記として書かせ

る。
 (ロ) 読み方教材や讀物を紙芝居風に作つて演じさせ話し方の修練に資する。

○手紙の文

手紙の形式にとらはれず、相手の前で話をしてゐるやうな心持で書くやうに導く。

○用語用字符號

- (イ) 「よみかた」と關聯して漢字まじりのひらがなで書かせる。
- (ロ) 次第にことばづかひを正しく書かせる。
- (ハ) 句讀點鈎をつけさせる。

○自分でなほすことの練習

- (イ) 自分の書いた文は、かならず讀みかへさせる。
- (ロ) 書き足りないところを補ふ仕方を教へる。
- 他の人の文をよく聞くこと

- (イ) 他の人の文を讀むときは、それをよく聞いて何が書いてあるか答へられるやうに導く。
- (ロ) それに就いて、自分の思つたことをいはせ、話し方の練習に資する。

第二學期

○夏休の日記

- (イ) 日記を朗讀させ、またそれを陳列して、讀みあつたり、話しあつたりさせる。
- (ロ) その日その日の題材のとり方書きあらはし方のよいものをほめる。

○夏休中の生活記述

- (イ) 思ひ出したことを、みんなによくわかるやうに書かせる。
- (ロ) 一つのことについて、できるだけ順序だてて、くはしく書かせる。

○行動の敘述

(イ) 遊んだこと、運動をしたこと、お手傳をしたことなどを題材として、文を書かせる。

(ロ) そのときの周囲の様子や、背景などに就いて書きあらはさせる。

(ハ) 誰が何をしたか、誰がなんといつたかなど、人物の動きも書きあらはさせる。

○観察の記録

(イ) 秋から冬へかけての自然を、いろいろな角度から拾つて題材とする。

(ロ) お祭やそのほかの行事などで、見たこと、聞いたことなるべく詳しく書かせる。

○手紙の文

(イ) 相手にはつきりわかるやうに書かせる。

(ロ) 相手によつてことばづかひに注意して書かせる。

○用語用字符號

(イ) 「よみかた」と關聯して、漢字まじりのひらがなで書かせる。

(ロ) 次第にことばづかひを正しく書かせる。

(ハ) 句讀點鈎をつけさせる。

○自分でなほすことの練習

(イ) 自分で書いた文は、かならず読みかへさせる。

(ロ) 書き足りないところを補ふ仕方を教へる。

○他の人の文をよく聞くこと

(イ) 他の人の文を読むときは、それをよく聞いて、何が書いてあるか答へられるやうに導く。

(ロ) それに就いて、自分の思つたことをいはせ、話し方の練習に資する。

第二學期

○お正月の綴り方

(イ) お正月の行事や遊びの中から、興味をひかれたことを書かせる。

(ロ) お正月の繪日記を書かせる。

(ハ) 楽しい心持があらはれるやうに工夫して書かせる。

○冬の遊び

(イ) 戸外での活動的な場面を書かせる。

(ロ) いっしょに遊んだ人や、そのときの周囲の様子も書かせる。

○読み方教材を對話にする

(イ) 「よみかた」の文章を對話に書きかへさせる。

(ロ) 場面とか、トがきなどはむづかしいから、まだ書かせないでもよい。

(ハ) 書きあげられた對話を演じさせて、話し方の練習に資する。

○手紙の文

(イ) 相手にはつきりわかるやうに書かせる。

(ロ) 相手によつてことばづかひに注意して書かせる。

○用語用字符號

(イ) 「よみかた」と關聯して、漢字まじりのひらがなで書かせる。

(ロ) 次第にことばづかひを正しく書かせる。

(ハ) 句讀點鈎をつけさせる。

○自分でなほすことの練習

(イ) 自分で書いた文は、かならず読みかへさせる。

(ロ) 書き足りないところを補ふ仕方を教へる。

○他の人の文をよく聞くこと

(イ) 他の人の文を読むときは、それをよく聞いて、何が書いてあるか答へられるやうに導く。

(ロ) それに就いて、自分の思つたことをいはせ、話し方の練習に資する。

○一年間の綴り方

一年間の綴り方をまとめさせ、よく読みかへして生活を反省させる。

三 参 考 文 題

〔次に掲げた文題は指導上の参考に供するものである。それを手がかりとして題材を適當に選ぶべきである。〕

第一學期

四月

二年生になつて

〔今日から二年生など、二年生になつたうれしさ、樂しさに就いて自分の思つたこと、友だちやうちの人と話したことなどを書かせる。〕

しんたいけんさ

〔その時の様子、自分のこと、友だちのこと、身長や體重などをくらべること、うちに歸つて話したことなどをくはしく。〕

天長せつの日

〔式のこと、天長節の日にしたこと、感じたことなど。〕

花

〔好きな花庭の花、このごろのいろいろな花など、できるだけ觀察を加へて。〕

うちの小鳥

〔大猫、鶏その他の小動物でもよい。様子をよく見て書かせる。〕

五月

うんど、うくわい
ゑんそく

〔順序よく自分のしたことを中心に書かせる。〕

鯉のぼり

〔鯉のぼりを中心に、子供の日のことを書かせる。鯉のぼりを作つたこと、掲げたことなどはできるだけくはしく。〕

朝がほのたねまき

〔種子をまいた日のこと、芽が出た日のことなど、觀察を續けさせて文を書かせる。〕

このごろのうちの
しごと

〔たんはのこと、演邊のこと、籠のことなど、自然の觀察を合はせて家の生活を書かせる。〕

ささ舟むぎぶえ

〔ささ舟や麥笛を作つた経験、工夫などをくはしく書かせる。〕

六月

私のほ

〔むし齒豫防日に連絡して齒をみがくこと、むし齒の痛んだ経験治療した時のことなどに就いてくはしく書かせる。〕

雨の日

〔雨の日に何をしたら、雨の日の遊び、雨の日の自分のうちや庭の様子などを書かせる。〕

むぎかり、田うゑ

〔その時の様子と、兄弟姉妹と手傳つたことなどをくはしく。〕

金魚めだか

〔その他でんでんむし、魚とり、蛙など、遊びと觀察を續りませ。〕

うちのときい

〔時の記念日に關聯してうちの時計のこと、時計に關する思ひ出、その他時計に就いての話を書かせる。〕

七月

たなばた

〔たなばたまつりの用意、誰と作つたか、その日のことなどをくはしく書かせる。〕

おはかまあり

〔お墓まわりのこと、お墓の掃除のこと、途中のことなど。〕

朝がほの日子

〔花の敷色などを觀察を續けさせて繪日記風に。〕

くもきりぎりす

〔遊んでゐるうちに見たこと、おもしろいと思つたこと、不思議に感じたことなどを、その時の様子とともに。〕

花火水でつ砲

〔作つたことや、遊んだことをくはしく。〕

第二學期

九月

夏やすみ日子をよんで

〔友だちの日記や繪日記を見たり讀んだりして思ひ出したこと、氣づいたことを書かせる。〕

こうあほうこう日

〔ことばのおけいこと、聯關して、こうあほうこう日にしたことなどに就いて子どもらしい觀點から記述させる。〕

二百十日

〔二百十日前後のあらしの様子を書かせる。庭の木や草花、田圃のこと、海邊のことなど。〕

おひがん

〔お彼岸にしたこと、遊んだことなど。〕

お月見

〔お月見の支度、おそなへもの、すすきをとりに行つたこと、その晩のことなどをくはしく。〕

十月

うん動くわい
ゑんそく

〔全體の様子、友だちの様子、遠足の途中の自然觀察など、寫生風に書かせる。詩に書かせるのもよい。〕

このごろのたんば
海山

〔毎日の生活を背景にし、この頃の自然に親しませる目的で書かせる。〕

やくにたつたこと

〔お手傳ひ、買物その他、うちの生活の中で、自分が役に立つたこと。〕

柿もぎ栗ひろひ
きのことり

〔したこととともに自然を描かせる。〕

讀んだ本のこと

雑誌や本で讀んでおもしろかつたお話を思ひ出して書かせる。自分の考へも書き添へさせる。

十一月

明治節の日のこと〔町の様子や、ラジオで聞いたことなどを書かせるのもよい。〕

菊

〔うちの菊よその菊學校の菊公園の菊など。〕

私たちのうん動

〔どんな運動をしてゐるか。どんな運動が好きか。體育大會を見に行つたことなど。〕

家のまはり

〔家のまはりや、通學途上の自然の様子をくはしく。〕

戦地のにいさんへ

〔兄でなくとも親戚知己やその他の兵隊さんなどに宛てて、自分たちの學校のこと、村や町の様子などを書かせる。〕

十二月

火の用心

〔火事を見た時のこと、火の用心の大切なわけなどを書かせる。〕

ちよ金したこと

〔今までの貯金や献金などに就いて書かせる。どんなお金をどうして貯金したか又献金したか、その時の氣持などくはしく。〕

みかん

〔蜜柑をたべたこと、蜜柑の形色など。〕

かんだんけい

〔うちの寒暖計學校の寒暖計など理數科とも聯關して。〕

お正月のしたく

〔餅つき神だなさうち買ひものなど、たのしいお正月を待つ氣持で。冬休の作業に備へて繪日記風に書かせるもよい。〕

第三學期

一月

今年のお正月

〔去年のお正月とちがつたことがあればそれを書かせる。ひきしまつた氣持で書かせる。〕

る日き

〔正月四五日間の繪日記適當に文章を挿入させる。〕

すまふ

〔大相撲のこと、自分たちの相撲のことなど。〕

入營

〔兄の入營、知人の入營などに就いて、うちを出る時兄さんの様子、見送りのことなど。〕

見たえいぐわ

〔お正月に見た映畫のこと、これまでに見た映畫のことなどを書かせる。〕

二月

豆まき

〔自分のうちでの豆まきの様子、家内中の年齢などに關聯して書かせる。〕

雪の日

〔雪の降つた日の様子、自分のしたこと、遊んだことなど。〕

病院の兵たいさんへ

〔お話するやうに慰問の手紙を書かせる。〕

病氣の友だちへ

〔風邪をひいて休んでゐる友だちへあてて學校のことなどを
お話するやうに書かせる。〕

學べいくわい

〔學藝會の全體にわたつて書かせる。特におもしろかつたこ
とはくはしく。〕

三月

お節く

〔去年のお節供と異なつたところがあればそれを書かせる。
今年のお節供の様子を書かせる。〕

おかあさんへの手紙

〔地久節、母の日に關聯して母親に送る手紙のかたちで、ごの
ろの自分のしたこと、學校のことなどに就いて書かせる。〕

春をさがす

〔春はどこに來てゐるか、自然への觀察、季節の草花などに就い
て書かせる。〕

三年生になる

〔三年生になるよろこびうれしさを主として、自分の一、二年生
時代の思ひ出、三年生になつてからの覺悟などを書かせる。〕

話し方指導要項

指導の發展段階

第一期

兒童と話をするあらゆる機會に留意して、はつきりとおちついてものをいふやうに導き、「ヨミカタ」で得たことばを手がかりとして發音や語法を訓練し、次第に生活の中に活用するやうにつとめる。又人の話を注意して聽くやうに仕向ける。

第二期

兒童の見たこと、聽いたことなどに就いて順序だてていへるやうにし、ことばづかひや、いひまはしなどを正しくするやうに導き、人の話をよく聽く態度を養ふ。

第三期

自分のいほうとすることを要領よく話し、相手と場合に應じてそれぞれふさはしい話ぶりをし、ふさはしいことばが使へるやうに導き、人の話の要點をつかみ得る力を養ふ。

第四期

同じ話でも相手にわかりやすく、しかも興味深く語り、上品なことばづかひをするやうに導き、又男女によつて、ことばづかひに違ふ點もあることをわきまへて話すやうにさせる。
なほ話をしたり聞いたりするときには相手の心持をくむことが大切であることを知らせ、その心がまへを養ふ。

初等科第一・二學年

指導要項

(一) 話し方は、読み方指導を中心にこれが基本的指導をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 読み方話し方を一體と考へ、読み方の教材たる挿畫・掛圖・文章等を中心として、話をさせる。

(2) 話合に於いては、すべての兒童に話す機会を與へることにつとめて、言語發表を盛にし、これを適正に指導する。

特に言語發表を嫌つたり、臆したりするものには、適當な方法を講じ、先づ氣輕に話すやうに仕向ける。

(3) 読み方教材を通して、正しい發音、ことばづかひになれさせ、教材を朗讀暗誦すること、言語を身振にあらはすこと、對話を實演することなどにより、正しい話し方に導く。

(二) 話し方は、綴り方指導に於いても、これが積極的指導を行ひ、特に左の事項に留意する。

(1) 綴らうとする主題を中心にして、兒童の見たこと、聞いたこと、考へた

こと等の話をさせ、言語發表の修練をさせる。

(2) 綴り方を單に書かせるだけでなく、それを朗讀し、また聴くことになれさせ、またまつた話をしたり聴いたりする修練をさせる。

(3) 兒童の綴り方を中心として、いろいろな話をさせ、これを話し方として適正に指導する。

(三) 他教科、他科目の指導と聯關して、常に言語修練をなす。そのため特に左の事項に留意する。

(1) 修身禮法と聯關して、挨拶返事姿勢態度等の躰をなす。

(2) 音楽と聯關して、發音發聲を正すことにとめる。

(3) 理數科に於ける觀察や作業と聯關して、事物事象とことばとの正しい結合を圖り、正確な言語の使用に導く。

(4) 兒童の圖畫工作に就いて、自分の經驗や思つたことを發表させ、話し方の修練をなす。

(5) お話會、學藝會等に於いて、他教科、他科目の學習諸行事、童話讀物等を

話題として、大勢の前で話すことの初歩的指導をなす。

(四) 話し方の指導は、兒童の生活のあらゆる機會に於いて行ひ、常にその場その場に於ける言語修練に留意する。

(1) 特に初期の話し方指導に於いては、教師は兒童の親しい話相手となり、話の誘導者となり、又兒童相互の仲介者となつて、すべての兒童に氣輕に話す機會を與へることにとめる。

(2) 教室に於ける問答話合はもとより、教室外に於けることばづかひに就いても常に留意して、一般的または個人的に指導する。

(3) 教師はつとめて醇正なことばを使用し、特にこの時期では、丁寧なことばづかひをして、兒童をして知らず識らずの中にそれに倣はせるやうにする。

(4) レコードラジオ等を選択利用して、正しいことばになれさせる。

(5) 家庭と協力して、挨拶その他日常語を正しく使ふやうに躰ける。

K/31.8-5-3

昭和十六年五月三日
昭和十六年五月五日
發行

(非賣品)

著作權所有

著作
發行
者兼

文部省

東京市小石川區久能町百八番地

印刷者

大橋光吉

東京市小石川區久能町百八番地

印刷所

共同印刷株式會社

0123456789